前渡坪内氏御用部屋記録一

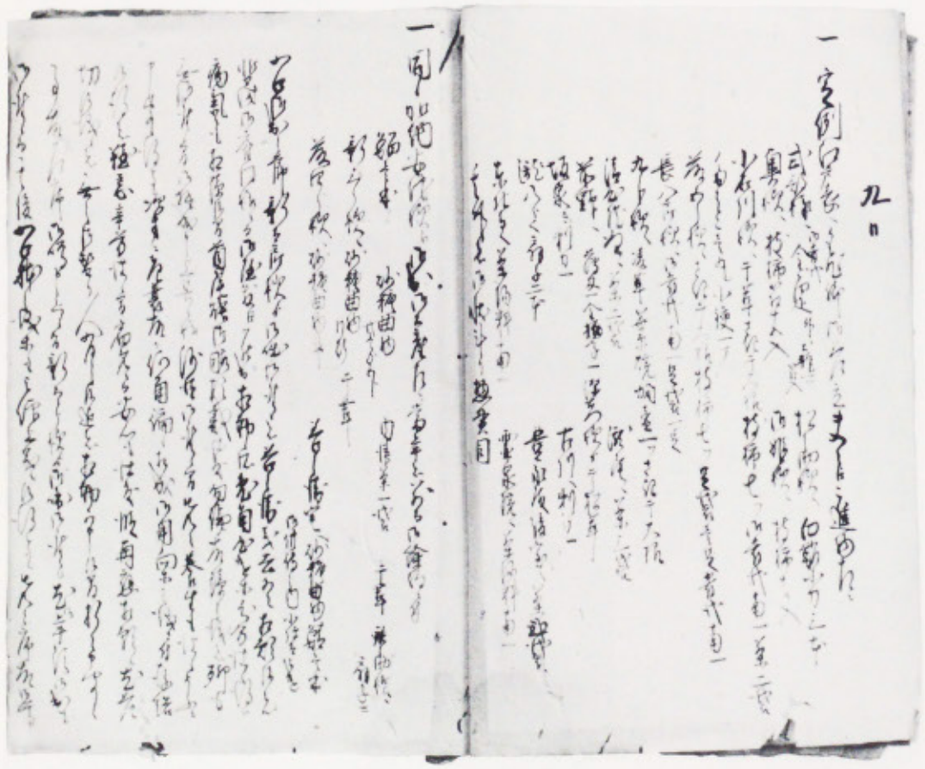
昭和六十年三月

各務原市資料調査報告書第六号

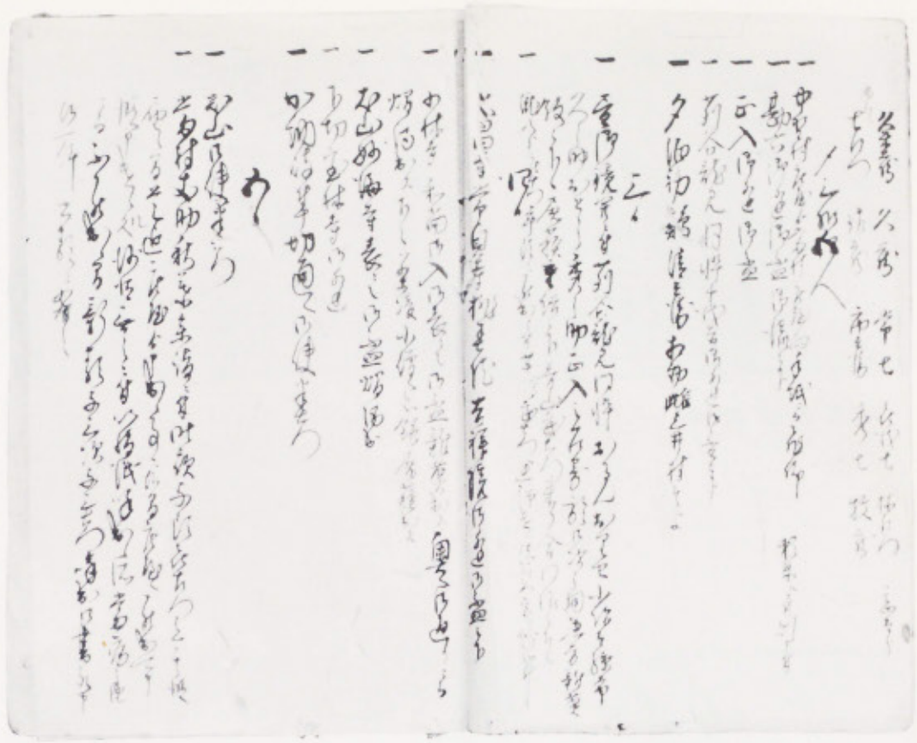
各務原市教育委員会

前渡坪内氏御用部屋記録一

御用部屋記録



文化五年正月



文化八年正月

旗本坪内家墓所（新加納小林寺）

序

各務原市史の編集事業も中程に達し、すでに「考古巻」「史料編古代・中世巻」「史料編近世Ⅰ巻」の三巻が既刊され、近々「史料編近世Ⅱ巻」「民俗巻」の二巻も編集刊行する運びとなりました。

市史の編集に先だち、市内の旧家・社寺等に所蔵されている古文書等を調査し、多くの資料を収集・整理してきました。その貴重な資料の保存と活用の便をはかるべく、『各務原市資料調査報告書』第一号から第五号まで刊行してきました。今回第六号として「前渡坪内氏御用部屋記録一」を公刊できることとなり大変喜ばしく思います。

「前渡坪内氏御用部屋記録」は、旗本坪内氏内分前渡坪内家の御用記録で、享和元年（一八〇一）から慶応四年（一八六八）にわたって三十三冊が、前渡坪内家の用人の手で書き残されています。旗本坪内氏一統の関係や近世後半期の地方（ぢかた）の政治・経済・社会事情等を知るうえでまたとない恰好な研究史料です。

本書は『各務原市史』「史料編近世Ⅰ・Ⅱ巻」と共に、近世地域史研究の基礎資料として、広く活用していただくことを念願いたしております。

編集刊行にあたって、快くご協力いただきました資料所蔵者の方や翻刻を担当していただいた先生方、また本書作成に助力した市史編集係の諸氏に対し、ここに深甚なる感謝を申し上げる次第です。

昭和六十年三月二十二日

各務原市教育長

水野定之

前渡坪内氏御用部屋記録一

目次

口絵
序
凡例
解説
○享和元年（見出）……一
○享和元年八月……一
○享和元年九月……一
○享和元年十月……三
○文化三年（見出）……四
○文化三年三月……四
○文化三年五月……四
○文化三年六月……五
○文化三年七月……八
○文化三年八月……九
○文化三年九月……二
○文化三年十月……二
○文化三年十一月……三

○文化三年十二月……一四
○文化四年（見出）……一七
○文化四年正月……一八
○文化四年二月……二一
○文化四年三月……二三
○文化四年五月……二四
○文化四年七月……二五
○文化四年八月……二六
○文化四年九月……二七
○文化四年十月……三一
○文化四年十一月……三二
○文化五年（見出）……三四
○文化五年正月……三四
○文化五年二月……三七
○文化五年三月……三九
○文化五年四月……四〇
○文化五年七月……四〇
○文化五年八月……四六
○文化六年（見出）……四七
○文化六年正月……四九
○文化六年二月……五二
○文化六年三月……五六
○文化六年四月……五九
○文化六年五月……六三
○文化六年六月……六三
○文化六年七月……六七
○文化六年八月……七〇
○文化六年十月……七一
○文化六年十一月……七二
○文化六年十二月……七四
○文化七年（見出）……七六
○文化七年正月……七七
○文化七年三月……七八
○文化七年六月……七九
○文化七年七月……七九
○文化七年八月……八一
○文化七年十月……八三
○文化七年十一月……八五
○文化七年十二月……八九
○文化八年（見出）……九五
○文化八年正月……九六
○文化八年二月……九九
○文化八年閏二月……一〇〇
○文化八年三月……一〇三

○文化　八年　四月……一〇四
○文化　八年　五月……一〇五
○文化　十年（見出）……一〇八
○文化　十年　正月……一〇八
○文化　十年　二月……一一二
○文化　十年　五月……一一三
○文化　十年　六月……一一三
○文化　十年十二月……一一五
○文化十一年（見出）……一一六
○文化十一年　正月……一一六
○文化十一年　二月……一二二
○文化十一年　三月……一二五
○文化十一年　六月……一二五
○文化十一年十一月……一二六
○文化十二年（見出）……一二九
○文化十二年　正月……一二九
○文化十二年　二月……一三三
○文化十二年　四月……一三九
○文化十二年　六月……一四〇
○文政　四年（見出）……一四〇
○文政　四年　正月……一四二
○文政　四年　二月……一四七
○文政　四年　三月……一五二
○文政　四年　四月……一五三
○文政　四年　五月……一五五
○文政　四年　六月……一五七
○文政　四年　七月……一五八
○文政　四年　八月……一六一
○文政　四年　九月……一六三
○文政　四年　十月……一六五
編集後記
干支早見表

凡例

一　本報告書は旗本坪内家の内分坪内嘉兵衛家の御用部屋記録を活字化したものである。

一　御用部屋記録のうち、享和元年（一八〇一）から文政四年（一八二一）までの十一冊から抄出し収録した。

一　原史料の所蔵者は前渡西町居住の富樫心行氏である。富樫家は、旧姓山本氏を名乗り坪内嘉兵衛家の家老を務めた家であり、明治初期、主家の離村時に記録を引き継いだ。

一　収録にあたっては、できるだけ原本の体裁を尊重するよう務めたが、必要に応じて（　）書で注釈をつけた。また、省略箇所は（前略）・（中略）・（後略）とせず一行空きとした。

一　漢字はできるだけ常用漢字を用い、古体・異体・略体文字も原則として現行正字体に改めた。

一　助詞は原則として原本に従ったが、万葉仮名はひらがなに統一した。但し「而已」は「のみ」とせず原本のままとした。

一　虫損等により判読が困難な場合は、その字数を□で示し、字数の推定が不可能な場合は□　□で示した。

一　読みやすくするため、適宜本文中に句読点を付した。句読点は「、」に統一した。

一　史料の抄出と翻刻は、豊田高専助教授篠田壽夫氏にお願いした。

一　本報告書の校正補助等は、市史編集係長斎藤文彦、同主事後藤光伸・上村恵宏、同嘱託増田五郎・川原田京子・星野文子が担当した。

解説

はじめに

この史料は、濃州各務郡前渡村内六百石を知行所とし、村内に屋敷を構えて居住した坪内嘉兵衛家の御用記録である。類例の少ない貴重な史料であり、『各務原市史』（史料編近世II）に収録する予定であったが、紙数の都合上、あえて別編として刊行することになった。それでも抄出して活字化するほかないのは残念であるが、各巻頭に見出しが付いているので全体を知ることはできると思う。以下坪内嘉兵衛家とこの記録の内容について若干の説明を加える。

坪内嘉兵衛家

同家の家柄を定義することは難しい。江戸時代を通じて家柄を確立することこそが同家の念願であったのである。

坪内氏の先祖は前野氏を名乗る尾州葉栗郡松倉郷（現岐阜県川島町）の郷士で、源義経の安宅関伝説で有名な富樫左衛門の血筋を引いているという。濃尾の国境をなす木曽川の渡津を根拠としていたため、織田信長から重用され、織豊政権下で大いに勢力を伸ばした。宗家前野長康は但馬国豊岡五万石の城主にまで出世したが、慶長二年（一五九七）関白秀次の一味として秀吉から切腹を命じられた。その弟で坪内氏を名乗った喜太郎利定は天正十八年（一五九〇）徳川氏に召出されて長子源太郎とともに関東に赴き二千石を与えられていた。事件後、前野氏に付属していた次男嘉兵衛ら三子も関東に赴き、各三百石で徳川氏に召出された。長子源太郎にも五・六百石が与えられていたようである。関ヶ原の戦い後の慶長六年二月、坪内父子五人は戦功による一倍加増の沙汰を受け、本拠地松倉郷周辺に知行所を与えられた。関西に対峙する家康の布陣の重要な一環であったに違いない。大坂両度の戦陣には家康の本営にあった。坪内氏は家康の旗本としては珍しく秀吉の朝鮮出兵に参加した経験からも火器の取り扱いに長じており、江戸幕府初期には五十人の銃手（同心）と与力十騎を率いる鉄砲頭の地位を世襲した。嘉兵衛家に伝わる初代定安の画像は鉄砲を持って蹲踞した姿であるし、十一代昌壽は慶応四年東山道総督府に大砲方として随従している。なお坪内氏の家伝は異説が多く細部が一致しないが、これは織田・豊臣・徳川と三代の政権交代を切り抜けたための傷痕と、次に述べる宗家と庶家の紛争の結果であろう。

坪内父子五人の知行所は各務・羽栗両郡内十九ヶ村、合計村高六千五百三十三石余であり、慶長六年拝領時の知行書立は一紙連名であった。

これがその後の紛争の原因になる。中興の祖となった喜太郎改め玄蕃利定は各務郡新加納村に陣屋を開設し、知行所支配を進めた。この村は各務野の西端に当たる軍事的要地であり、陣屋は平野に突出した台地上にあった。中仙道はその北側でかなりの坂道となり、村境には境川が流れている。また各務野西半を入会地とする更木郷八ヶ村の一員として、広大な野の管理に参画することができた。ちなみに、その惣鎮守手力雄明神が鎮座する北隣の長塚村も新加納領である。さて坪内氏はこの地域が浄土真宗の強力な地盤であることを考慮し、本願寺教如に協力して新加納御坊を建立した。これは慶長末年に岐阜地方小熊村へ移転したが、坪内氏の秘蔵する「真向の尊影」（親鸞上人の画像）の折々の開帳は毎回多数の参拝者を集めた。寛永年間には二代家定が、禅宗妙心寺派の名刹で信長の兵火で焼失していた少林寺を再興し、坪内氏菩提所として保護した。このように知行所支配に寺院を活用することは前渡の「御用部屋記録」でも随所に見られる。

新加納陣屋の支配地は「七千石村々」と総称されている。知行書立では六千五百三十三石余しかないが、それは本来一倍加増で七千石を与えられたはずであるのに、幕府代官らの手違いで村高不足になっているという認識によるものらしい。なお宗家から五百石の分知をしたあと、天和二年（一六八二）に五百石の加増があったので、坪内氏一統の知行高は全部で七千石余になったが、加増分は上州で与えられ、新加納支配ではない。さらに元禄三年（一六九〇）に千石を分知して宗家蔵入地が減少したが、これが加増によって回復するのは幕末の万延元年（一八六〇）である。加増分は安房国内で与えられ、坪内氏一統の知行高は一時八千三十三石に達した。

七千石村々は御納戸・御分知・御内分の三種類に分かれる。

御納戸分は宗家（御家元）蔵入地であり新加納陣屋直轄地である。利定の長子源太郎改め惣兵衛家定が慶長十四年（一六〇九）家督を継ぎ、父の知行を合わせて四千七百九十二石となったはずである。元禄三年以降は分知によって千石減になる。しかし、対外的には他の三子分をも代表し、公称五千五百三十三石余で五千石以上の家格を維持した。これが財政窮乏に拍車をかける。家定以降の当主は江戸城郭内に屋敷を与えられ幕府に出仕した。寛政四年（一七九二）以降の屋敷は市ヶ谷御門内三番町にあり、墓碑は渋谷村東北寺にある（現存）。

分知には築地（松本）・貝坂（無動寺）の両家があり、江戸に居住して幕府に出仕した。築地家は万治三年に四代惣兵衛定長が家督を継ぐに当たり、弟勘解由定賢へ五百石分知したものである。初め生母の旧里で正保元年に廃絶した菅沼氏を名乗らせたが、二代目から坪内姓に復した。知行所は上中屋・山脇・松本・下切（のち小網島にかわる）の四ヶ村内で与えられ、松本村に陣屋を置いた。前渡家とは知行所が隣接することからも関係が深く、五代伊之助定恒は前渡家から養子し、安永年間一時生家に知行所支配を委託したこともある。貝坂家は元禄三年に五代惣兵衛定重が家督を継ぐに当たり弟権之助定高へ千石分知したものである。知行所は無動寺・成清・笠田・大佐野・下切の五ヶ村で、無動寺村に陣屋が置かれていた。四代定央は宝暦十年（一七六〇）勘定奉行に累進している。

内分知家には前渡・平島・三井の三家がある。慶長六年の知行所拝領が父子連名によるものであり、慶長十四年初代利定の死後は長男惣兵衛家定がその名の如く一族を代表して幕府に出仕したが、他の三子もそれぞれ知行所の配分を受けていた。一倍加増で各六百石宛であると主張するが、総高が不足のため現実には各内分高も不足する。しかし幕府からの公的割付はなく、宗家・庶家の対立のため、六千五百三十三石余の正確な内分高を知ることは難しい。慶安二年（一六四九）の検地の結果は総高六千七百六十七石余で、御納戸分五千五十石余・前渡分六百二石余・平島分五百八十九石余・三井分五百二十二石余である。次男嘉兵衛定安は上前渡村内に知行所を与えられ同村本郷に屋敷を構えた。三男佐左衛門正定は平島村および上下前渡村の一部を知行所とし平島村に居住した。四男、実は長女の子を養子とした太郎兵衛安定は三井・上戸・中野の三ヶ村内に知行所を与えられ、三井村に居館を構えた。宗家が江戸に居住して幕府の役職を歴任するのに対し、この三家は知行所に居住して宗家の要請があるときのみその旗下として一緒に勤仕した。平島の家伝によれば「木曽川出水之節、不限昼夜堤え罷出、水下村々より人足出させ相固候様」幕府から命じられたものであるという。宗家とともに元禄五年（一六九二）には駿府御加番を勤め、同八年からは新規火消役として九年間江戸赤坂火消屋敷に居住している。この宗家と庶家の関係は戦国時代の寄親・寄子制に近い。江戸幕府の職制でも下級幕臣は身分は幕臣であっても独立して幕府に勤仕せず上級幕臣（または役所）への附属を命じられることが多い。これを与力といい、本来は同じ幕臣であって主従関係にはないが、寄親と進退を共にし、日常生活面でもその監督を受けるのである。三家知行所への公儀御触等は新加納陣屋が一括して触流し、また三家は家督・婚姻願や宗旨手形を宗家宛に提出し、宗家の旗本軍役の分担金を徴収される。しかも公的な諸願達は三家連名によるか他二家の添状をもって行うことになっており、新加納や江戸との連絡も当番制で勤めたようである。永年このような状態が続く間に、宗家は庶家を内分つまりは宗家から知行を与えた家来分と考えるようになり、幕府もそれを支持している。その転機は享保期のようである。

当然三家側はこれに反発するが、その先鋒になったのが前渡家である。初代嘉兵衛は豊臣方から移った三子の代表格であり、知行所も木曽川の渡津かつ水防の要所である。七代定該は宗家の息女を娶り江戸小石川大塚町に屋敷を構える。また二男伊之助を築地家の養子に入れる。その移住は寛保三年（一七四三）前後かと思われるがはっきりしない。六代から八代までの戒名は下渋谷村禅宗祥雲寺地内霊泉院の過去帳に今も残っている。直参旗本の家格を回復しようとする努力は結局実らず、八代定效は天明元年（一七八一）に江戸を引払い前渡村へ帰住する。しかしその後も家格をめぐる宗家との緊張関係が続き、十一代昌壽は慶応四年（一八六八）東山道総督府へ積極的に附属することになる。

なお現在宗家は東京都江東区塩浜二丁目に、前渡家は各務原市三井町に子孫に当たる方がおられる。

前渡坪内氏御用部屋記録

この記録の所蔵者は各務原市前渡西町の富樫心行氏である。同家は旧幕時代は山本姓を名乗り、代々前渡坪内氏の用人を勤めた。記録中に文化期は山本瀧八郎、天保期は山本祐左衛門として登場するのが同家の先祖であり、この記録の作成者であろう。最後に用人を勤めた軍八郎は明治中期に山城国醍醐の古刹仏眼院を矢熊山に移し、長子を得度させて中興一世とした。なお幕末期の二冊は各務原市那加桜町の永井好之氏の所蔵であるが、永井家は前渡村北島の草分け百姓であり、村内の野方や同郡野村全村を保有した有力者で、永井弘衛のときやはり前渡家の用人を勤めた。両家所蔵文書は『各務原市文書史料目録一』と『各務原市史』（史料編近世Ⅱ）に収録されている。

「御用部屋記録」は享和元年（一八〇一）から慶応四年（一八六八）にわたって三十三冊が残っている。これは前渡家の九代定就（寛政十一年家督）・十代定昌（文政四年家督）・十一代昌壽（万延元年家督）の時代である。これに先行する史料として八代定效時代の天明四年（一七八四）からの御触状留等四冊があるが、これは各務原市史に抄録した。他に類似史料として「日記」がある。標準的なもので「記録」と「日記」を比較すると、「記録」は「年号干支記録・御用部屋」の表題で、巻頭に事項を一つ書で示した目録が付いている。内容は往復文書留が主体で、坪内氏一統や近隣領主との慶弔・寒暑・参勤の挨拶、新加納陣屋および平島・三井両家との事務連絡、拝借金の交渉などが多い。「日記」は「何月月の大小日記」の表題で、「記録」の半分の大きさのものを一年分合冊にしてある。内容は日付・天候の後に来客や当主・用人ら屋敷内の人の動きなどを記している。どちらも記録者の個性によって形式、内容に差があるのは勿論である。

別表に示す如く、「記録」は文化期・天保弘化期・安政期に集中しているが、これは山本家が用人本役を勤めた期間と関係するのであろう。通常用人は本役と格（並）と二人ずつ置かれたようである。とりあえずこの巻には九代嘉兵衛定就時代の享和元年から文政四年までの十一冊分を収録した。公的出状は当主名の公文と私信・用人宛取次依頼文・他家の添簡と三・四通に及び、また同一案件について何度も文書の往復がある場合などは適宜削除した。年中行事や慶弔の挨拶も代表例に止め、公儀御触は全部削除した。

定就は安永二年（一七七三）江戸大塚屋敷で生れ、天明元年九才のとき一家が前渡に移住、寛政十一年（一七九九）二十七才で家督を継ぐ。室モヨ女は加納藩士安池新太郎の義妹で作州勝山藩士外村惣右衛門の娘である。文政四年宗家より隠居を命じられ、同八年（一八二五）五十三才で病死する。自ら家政を切回して家格向上に努めたようで、文政十年から十二年までの分は通常の「記録」と異なり当主自らの日記と思われる形式・内容である。積極性が仇となり、借財を累積させたうえ他家との対立を招き、隠居させられることになった。隠居名の冬扇、また墓碑に刻ませた左の和歌に当人の心情が偲ばれる。

病中吟　今日よりはあすはよかれと楽しむもかぎりある期を招く成るべし

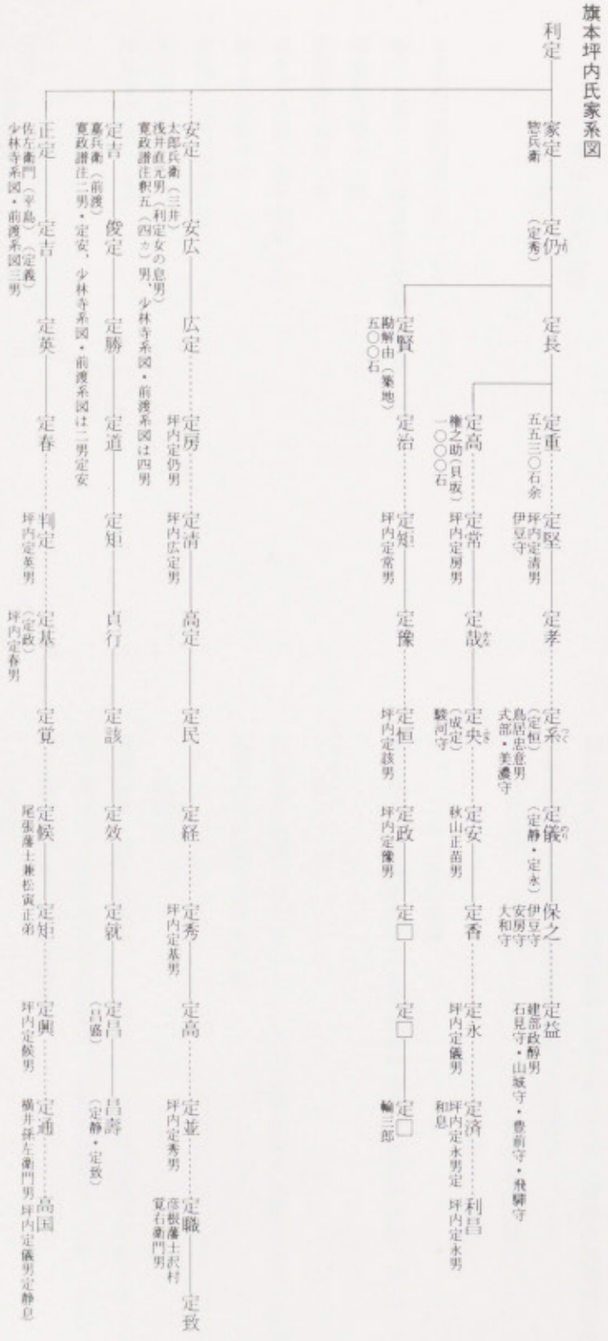
辞　世　仮の世に借りたる金よ善き事はなさず返さず身は帰る塚

「記録」は「日記」および部門別の諸記録と総合することにより、多方面への活用が期待できる。第一に、先例に従って行動するため度々「記録」が調べられているように、旗本の家政や知行所支配が極めて具体的に示されていることである。前項に述べた坪内氏一統の関係のほか、姻戚関係で結ばれた近隣諸藩の家士や旗本との交際とその縁故の利用ぶりが窺われる。とくに領主財政の破産状況と公金貸付・棄捐令など幕府政策とのかかわりが注目されるが、これについては天保九年以降の諸借財返済の総合記録「乾元万物資始」が役立つ。前渡家の最大の特色は地方知行取であり在地に居住すること、しかも知行所が居村一村であるため地頭屋敷で直接支配に当たった点である。譜代家臣と在地有力者の通婚または在地有力者の家臣への登用、頭分制の利用など知行所の人的把握については、文化十年代成立の「百姓家系集」が役立つ。これは農民各家族ごとの系図に、来歴や本家・御目通資格などを註記したものである。なお前渡屋敷の人員については明治二年の「人数帳」がある。地頭屋敷の慶弔時の有力者の招待、祭礼・雨乞などへの地頭側からの参加、また何かにつけて賦課される夫役の多さなど、村落生活と地頭屋敷のかかわりも興味深い。新加納陣屋と前渡屋敷の行政・司法権の区分も問題となる。

一方、領主層の生活記録であるという限界はあるが、地域の生活文化や商品経済の状況を知る手懸りにもなる。村方の行事である祭礼・雨乞等は勿論であるが、地頭屋敷での年中行事や冠婚葬祭時の献立・贈答品なども、招待や手伝いのためかなりの村民に見聞され普及する面があるし、また地域の水準に規定されるはずである。浄瑠璃・俳諧などの芸事も同様である。その買物からは地域の商品経済の状況が窺われるが、これには文久二年の「年内小入用請払日記」が役立つ。

なお『稲羽町史』は坪内氏一統の系譜と、抄出ではあるが「新加納御役所記録目録」・「平島方坪内高国手記」などを収録しているので是非参照されたい。

旗本坪内氏家系図



（『寛政重修諸家譜』を基礎に「少林寺系図」と「前渡系図」から作成）

前渡御用部屋諸記録の伝存状況

年号	当主	記録	日記	其他
天明1				御法事留
2				
3				
4		○		
5				
6				
7	八			
8	代			
寛政1	定	○		
2	效			
3				
4				
5				
6				
7				
8				
9		○		
10		○		圓照院逝去諸事留
11				
12			○	
享和1		○		諸色覚（山本氏出府）
2				
3	九			
文化1	代		○	
2	定			
3	就	○		
4		○		
5		○	○	
6		○		
7		○	○	
8		○	○	

年号	当主	記録	日記	其他
文化9			○	
10			○	
11	九		○	前渡村百姓家系集
12	代		○	
13	定			
14	就			
文政1				所々証文留 御法事留
2				
3				
4			○	
5			○	
6			○	御本家え御状留
7			○	
8			○	
9				
10				
11	十			
12	代		○	
天保1	定		○	
2	昌		○	
3	（昌		○	
4	盛）		○	
5			○	○
6			○	
7			○	○
8			○	
9			○	乾元万物資始（借財方仕方）
10			○	
11			○	
12			○	○
13				

年号	当主	記録	日記	其他
14		○		
弘化1		○		
2		○		
3		○	○	
4		○	○	
嘉永1		○		
2	十			
3	代			御用留（木曽川堤普請）
4	定			
5	昌			木曽川国役御普請所覚帳
6	（昌			
安政1	盛）			
2		○		
3		○		
4		○		知昌院葬式一通
5		○		
6				御法事留
万延1				
文久1		○		
2				年内小入用請払日記
3	十			
元治1	一			
慶応1	代			
2	昌			銃手召連出府日記
3	壽		○	
明治1			○	官軍御用諸入用帳・軍中日記
2			○	人数帳
3				諸入用出入帳
4				
5				
6				

（表紙）
「
享和元辛酉記録
七月より
」

一本家虎口御門番一件
一藤平本養子ニ付桜井佐太郎殿え文通一件
一桃春院代替り一件
一庄屋弥作御咎一件
一尾州名古屋へ金子御願一件
一藤平出府願一件
一銀蔵田畑荒立退一件
一笠松拝借金一件
一岐阜奉行替り文通

（八月）
同廿一日
新加納より廻状来、明日罷出候様申参ル、廻状留ニ有り、右便ニ江戸御状来ル
一筆致啓上候、然は先便得貴意候之通、式部殿義虎口御門番所被蒙仰候処、御番金一ヶ年三百両余相掛候趣御座候、右之外当時御出番迄諸向附届・御番所え御出銀・其外諸入用之内、御割合金拾八両宛御差出被成候之様、得貴意候旨式部殿被申候間、当月晦日迄之内右御割合御出金可被成候、右之外は前々御役被相勤候節之通御心得可被成候、委細は新加納役人共より可及御懸合候間御承知可被下候、右可得貴意如此御座候、恐惶謹言
八月五日　坂泉亀平左衛門
坪内嘉兵衛様
統望（花押）
猶以秋頃相催候処弥御安全被成御座珍重之御儀奉存候、以上

（八月廿六日）
同日
村方庄屋組頭百姓代呼出し、高壱石ニ金弐両ツヽ拾弐両来ル晦日迄此方え調達可致旨申付候

同晦日
一桃春院替ニ付先住同道ニて後住来ル、御目見相願申候由申出ル、則夕方又々可被参逢可申段申聞ル、夕方来御逢済、右序ニ来ル二日入院披露仕度、御使者相願候

九月朔日
一弥作名代為次罷出、桃春院入院ニ付二日暫之内開帳仕度段願出候、則承届遣、先達て預り置鍵渡遣ス

同二日
一桃春院入院ニ付、先概之通使者相願候ニ付遣山本祐左衛門、為祝義（別ニ包）三拾疋包 目録一包 右之通也

入院相済桃春院礼ニ出ル、三本入扇子箱持参

同四日

一桃春院罷出、寺破損ニ付村方手伝イ御威光ヲ以被仰付可被下旨申出ル

一同日御本家より御頼金節句前迄抔申出候様、庄屋計呼出申付ル、尤昨日廻文ヲ以罷出候様申遣、弥作義何かひま入有之候由ニて不参也、右序ニ桃春院破損惣方一日ツヽ手伝可致旨申付、尤貧地故食事等も持参可致旨申付ル、役前壱人ツヽ世話やき候様申付ル

一弥作義孫四郎相料候処、金子約速(束)致ちつと参りじきに上り可申ト存候処、先方留守ニて手間取候由申出ル、不都合之申方故、孫四郎同道ニて罷出候様申付遣ス、暫時罷出ル、一通申聞候処、昨日竜泉寺へ参り夜前おそく帰り申候、留守ニ御廻文参り候故女共じきに孫四郎方へ送り申候儀無念ニ御座候、是迄ついに遅刻も不仕今日ニ限りておそなり申候は無念ニ御座候由申故、猶々不埒之申方、廻文之趣も不致承知候、其上先程申候ニは用事を早くしまい上り可申と申候はどふして呼出候趣を致承知候哉、旁不埒ニ付差控へ申付ル、御咎中御用向孫四郎相勤可申旨申付ル

同十五日

一先達て江戸表御門番被蒙仰候ニ付御高割金之儀、御用捨御座候様坂泉御氏へ御三所御連名ニて御頼被遣候ニ付、則返書今日当着、文言左ニ

貴札致拝見候、然は式部殿御門番被蒙仰候案内、井御入用之儀ハ相知次第追て御高割ヲ以御出金之儀可被申達之旨、先便得貴意候処、右高割之儀、先年浜追手被蒙仰候節之格も可有御座之間可被及用捨之旨、猶又御三人共当時至て御不勝被成(手脱か)御座、別て佐左衛門殿ニは水難以後御難渋御座候ニ付、宜可致勘弁之旨、御紙表之趣致承知、則式部殿、申聞候所、先年浜追手被蒙仰候節ハ当時は振合も致相違、諸入用等多御座候えは其節之格ニわ難被准候、殊ニ各様之御持高中々以五千五百石余之高内ニて、式部殿拝領高之為御高役被蒙仰候儀ニ付、各様之御高も相抱候儀勿論御座候間、所附御入用は不及申都て御高役之入用は高割ヲ以可被成御指出候筋ハ、各様ニも御勘弁可有御座事ニ候間、先例等無差別御銘々之御高役ニ有之候之間、割合之儀ハ早速被成御指出候様被存候、且御三人共御不勝手之由被仰聞候え共、右御不勝手之義ハ式部殿とても御同様之儀ニて、左様之申立　公辺に難相済儀は申迄も無御座御事ニて、公用向入用高割御出金等之儀ニ相抱候筋ニハ無之儀ニ被存候、尚又佐左衛門殿水難之儀被仰聞候え共、高役之儀は半毛以下之損毛ニは不相抱、仮令半毛以上之損毛ニても三ケ年宜候えは右損毛猶々　公儀も御取用ひ無之趣ニ御座候間、為念得貴意候、右之趣ニて式部殿初不勝手之義ハ御同様之義ニて御座候えは、御銘々御持高之御奉公ニ候間、何れ割合可被及用捨筋合無之儀ニ被存候間、去月六日得貴意候通り、御割合早々被成御指出候之様可申達之旨被申付候、且各様御承知ニも御座候哉、御門番之儀ハ持高格式有之其御高ニ准し候御場所被　仰付候義ニて、式部殿之儀

ハ御存之通、各様御高共五千五百石余之拝領高ニて公用向被相勤候えは、右入用之儀持高ニ応し高割可被申達義は勿論之事ニ候間、乍(憚か)軽右体之行違等無之、公用向無滞被相勤候えは、式部殿ハ勿論之事各様ニも御安堵之筋ニ候条、御不如意之中御迷惑ニハ可被成御座候えは共、早々御指出可被成候、前書之趣新加納役人共よりも可為御掛合候之間、左様御承知可被成候、右御再答可得貴意、如此御座候、恐惶謹言

九月六日　　坂泉竜平左衛門

統望書印

坪内太郎兵衛様
坪内佐左衛門様
坪内嘉　兵　衛様

(十月十九日)
同夕

庄屋孫四郎罷出ル、銀蔵義先達ても申上候通兎角耕作怠り申候、先達て御咎被仰付候親類共寄合、田地ニ素蕎麦(麦か)候時其儘ニて養ひ等も不仕、此節麦蒔ニ付銀蔵義麦も不蒔、其上何方へ参り候哉行衛も不知候処、此節罷帰居候ニ付親類共より再応麦蒔可致旨申候え共、なをざりにヲヽサおれも蒔わと計申居候由、右之趣ニては先達て親類共へ被仰付義故親類難義ニ罷成申候間、何卒銀蔵田畑之作物親類へ刈取御年貢上納仕度、御未進等も有之候義故親類とも御願申上候段申出る、田畑作付等も親類より仕度候え共本人銀蔵義なおざりに打捨置候間、此等之義御上より被仰付被下候様に

と申出る、明日召連罷出可申旨申遣ス

同廿日

一庄屋孫四郎罷出、今日銀蔵井親類之者御呼出御座候処、銀蔵義夜前より何方へ参り候哉宿に居不申、仍て追々さがし候へとも未タ相知不申、あまり刻限延引ニ罷成候間御断ニ罷出候由申出ル、左候ハヽ銀蔵来り次第召連れ罷可出、若又昼後迄も見合帰り不申候ハヽ親類計召連罷出可申旨申付ル

一七ツ過孫四郎罷出、銀蔵義未タ行衛知不申、仍て親類源四郎　召連罷出候由申出ル、則親(類脱か)へ申渡ハ、銀蔵耕作怠り今以麦作等蒔付不申候由、右畑麦作蒔付等親類申合明日より蒔付可申、又太切之御田地荒置候銀蔵追々不埒ニ付親類より尋召連罷出可申旨申付ル、田方刈取之義ハ本人居不申義故追て沙汰ニ可及旨申付ル

廿六日

一銀蔵行衛相知不申、親類和兵衛・源四郎出ル、田方刈上之儀組合立会東数庄屋へ達こし取、組合立会改可申、且又家作井持高諸道具等庄屋組合親類相改預可申、一々書付今日中ニ申出(ママ)可旨申付ル、祐左衛門・庄右衛門用向ニて他出ニ付暫留主ニ相成候、若留主中銀蔵行衛相知候ハヽ親類急度預り可申旨申付ル、則書付夕方出ス

表紙なし（文化三年　御用日記）

十一　半八娘水死一件
☆一　五度目雨請之事
✕一　若者丈助・造酒蔵仲間はふかれ候ニ付願一件ナ新加納へ欠込訴一件
①一　八郎四郎家内退去一件
✕一　常貞寺息病死届之事
◎一　当祭礼神楽ナ俄致度願一件
＝一　本家於外様御離縁一件
⊞一　御陣屋知行所之者呼出ニ付差翰之儀一件
⊠一　為次方新客一件
□一　戸田伊賀守様御家督ニ付御□詞一件
✕一　江戸表御従弟女様御不幸一件
カ一　御勝手方一件
ケ一　加納御用人中より御倹約ニ付御音物等□断ナ御着城案内一件
一タ　三井亀三郎様御誕生御使一件
一ヤ　御本家江戸御役人罷登候ニ付右案内□始末一件
一ケ　毛見一件
一セ　少林寺祖僧転位上京之事
一ヲ　大野村出入ニ付内取扱之事
一シ　新開米御渡方御断一件
ニク　外山下草被下置候一件
一デ　当村丈助弥三七ヲ相手取田地出入一件
一　免定差出候所当畑方御引少も無之ニ付色々申立候始末一件

○文化三丙寅三月十九日紀州様御通行ニ付村方より手当願出ル、来ル四月三日鵜沼御留之由、然は朔日人足寄候由、別て惑迷仕候間格別御憐愍相願候旨申出候故、随分御手当之儀は可聞入候え共、常例之ごとく相心え候ては致相違、旧記ニも其度毎手当遣候共相見へ不申候、年柄ニ寄願ニ付遣候儀ニ候間、村役初其段は相心得居候哉之旨、八郎四郎心得ニて申聞セ候様申遣ス、仍之此以前御通行之様子ヲ相糾候所、享和二壬戌年四月十二日庄屋与頭惣代御手当被下候為礼罷出ル、右願ナ手当遣候日限は書落候事哉相見へ不申候、其節は人足壱人ニ付銭百文・馬壱疋ニ弐百文、其外小前方之内至て難渋之者計へ手当遣候趣ニ相見へ候、右は五月十日頃迄ト有之候

一○　同十五日紀州様御通行ニ付庄屋弥作鵜沼宿へ罷出候由届ケ出ル、尤壱人村方ニ残り居候趣ニ相見候、今日伝馬一双五分当り候由、人数百十人・馬九疋今四ツ時揃ト申事ニ候由、今夜は太田宿御泊り也

一　五月九日御陣屋より御三所御役人連名以書状、明十日昼前之内罷出候様大塚甚三郎より申来ル、右書状三井へ致順達候

一　同十日後藤八郎四郎被仰付罷出ル、平島よりは岩佐清蔵、三井より加藤辰右衛門罷出ル、四ツ時頃少林寺ニて待合御陣へ罷出候所、

大塚甚三郎罷出申聞候は、先達て中川御番ニ付御銘々様へ御知行中へ御高割金之儀御談申候処、御知行所村役共御差出之節申聞候は、御銘々御出府之節も村方へ被仰付候ニ付二重ニも相当候、何レニも困窮之百姓共ニ付御断申上候由申出候ニ付、其段江戸表へ申遣候所、今便又々申来り候は、何レニも五千五百石余之内ニ候え共、御高割之儀ニ候間差出不申候ては相済不申候、御出府之節トハ訳も違候事故、当晦日迄取立御陣屋へ差出可申旨演説有之、次ニ御三所様御高割之義も当晦日迄御出可有之候様被申聞、是迄彼是等関之儀も有之候え共、今度は右等之義ニては相済不申候旨申来り候段大塚被申聞、尤員数之儀は御書状ニ可有之旨ニて、坂泉氏より之書状被相渡候、右之趣銘々罷帰可申聞旨ニて引取候、途中ニても三人談合候は、御高五千五百石余ト被申聞候義筋違之事ト申合候事、御百姓方之儀は一端御陣屋へ振向ケ候事ニ候間、猶又村役共差出可申方可然段申談候事

一　江戸表より之書状左ニ　御名様　坂泉竜平左衛門

一筆致啓上候、然は先達て得貴意候通、中川御番所被蒙仰候ニ付御役取附御入用金拾八両宛御出金被成候様、御達可申旨被仰付候、尤新加納御陣屋より可及御懸合候間御承知可被成と奉存候、右可得貴意如此御座候、恐惶謹言

四月廿六日　坂泉竜平左衛門

坪内御名様　　続望（花押）

一☆　同（五月）廿三日夜庄屋弥兵衛罷出ル、申聞候は、追々照続ニ付葭池水落申候、然共溝塞草抔生茂り候間、明日役四五人頂戴仕度由願出候間、差懸り候儀取計候様申付候

一☆　（五月二十六日）別段申聞候は、追々照り続候ニ付田畑共焼候間、今晩雨請懸申度、先は物入不申様何レえか籠り度由相願候間、御聞届之旨申聞候

一☆　同夜ニ入庄屋喜藤次罷出申聞候は、雨請之儀御聞上候処、白髭大明神え湯花上ケ候様ニとの落聞ニ付、明四ツ時取計候趣申出ル

一☆　同廿七日朝庄屋為次罷出、雨乞之儀四ツ時頃執行候ニ付御代参御差出之旨窺ニ出ル、尤先例ニ付可被仰候間、刻限案内ニ罷出候様申遣候

一☆　同九ツ時為次案内罷出ル、御代参源右衛門様御参詣、御初尾十二銅、御着用麻上下、御供御侍・御草履取

一☆　六月朔日当番庄屋為次差支ニ付弥兵衛罷出申上候は、昨日は能雷雨ニて惣方悦申候、仍之御礼御聞上候所、提燈上ケ候様落聞ニ付、今晩五ツ頃相燈シ候、御代参御差出被下候ハヽ御迎ニ罷出可申旨申出候ニ付、刻限罷出候様申遣ス

一　同五ツ頃為御案内為次出、御代参源右衛門様、御供侍一人・御草履取、御初尾十二銅

一☆　（六月六日）右序ニ相願候は、追々照続田方も干水ニ付、雨請之儀相願候、尤是より村役共立帰御聞等上ケ候ては遅り候間、御屋鋪御鎮守於

稲荷ニ御鬮御上ケ被下候様相願候間、右は先例も有之事ニ候間御承知之旨被仰出候ニ付、夫々用意申付、御燈明・神酒壱対御備御前御上下ニて御直御鬮御上ケ被遊候、右御鬮村役願品左之通

当村八社ヵ熱田・津島・洲原へ代参、右は一緒ニいたし御鬮上候所、天神上り申候、御鬮八郎四郎取次当番庄屋へ相渡ス、庄屋開キ見候事、次ニ千度参り・湯花・松明・提燈御鬮御揚ケ御座候、湯之花上り申候、右ニて相済惣方引取申候、御門前より引返御礼申上候事

一同七日九ツ頃湯之花上ケ候由、組頭弥三七案内ニ罷出候、為御代参俣五郎様御社参、御供御侍一人・御草履取、御初尾十二銅、尤庄屋共儀は今日麦納ニ付手引不申、仍之組頭御案内ニ罷出候

一☆ 同十一日晩方庄屋・組頭不残罷出申聞候は、今晩天神へ御礼仕、直様弁天え雨請相願度、かけ提燈御好ニ付、夕飯後惣方罷り申候間、御代参被成下候ハヽ御案内罷出申候間、天神より弁天え御社参被下候様申出ル

一万蔵ト申者方ニ婦人預り居、右ニ付預主より若者へ酒振舞候所、右酒之儀ニ付若者故障も有之、既ニ吉兵衛ト申者八分致候よし内々御聴ニ達候事も有之候ニ付、他之者差置候儀全体不相成候所、右体之儀共ニては故障之儀も難計候間、早々立退かせ候方可然旨、八郎四郎心得ヲ以村役へ談候事

一☆ 同十五日村役共罷出、昨昼後能潤雨ニ付今晩御礼仕度候、御鬮上候所松明御好ニ付、今晩矢熊山ニ燈シ申度、尤常例天王祭礼ニ付暫く早く天王之方相済、夫より一端引取、夕飯後御礼弁天へ仕度由申出候間、承知之旨申遣候

一同夕天王祭礼ニ付御代参八郎四郎、若党・草履取、御初尾十二銅、提燈十弐、竹七本ニ付為持遣

一☆ 同弁天へ御代参同人、御初尾十弐銅

一☆ 同十六日庄屋・与頭罷出、昨日之雨請御礼申上ル、ヵニ今朝も能雲出候故見合罷在候え共、又々追々雲吹はげ候間御願ニ罷出候、多土(度)権現え雨請相願度候え共、七日之内惣方慎之所不行届、却て御罪(罰)当り候ては恐入候間難御願申、仍之先日之通踊は除候て其余御鬮御揚被下候様相願、尤薬師住持も留主中之儀故、於稲荷御鬮相願候趣申出候間、村方之者共多土え相願度心願ニ候ハヽ、村方惣方ニ替り 御前御慎ミ可有之候間、早々代参差立候方可然旨申聞候所、村役共一同難有早々代参之者村方ニて鬮取仕、又々罷出申旨申聞候事

一☆ 同昼後庄屋喜藤次・為次罷出、先刻より引取鬮取仕候処、西組庄屋喜藤次ヵ紋七当り候所、紋七儀は足弱候間弥兵衛ヲ相頼候由、今日も彼是遅り候間明日出立之積り、今晩八ツ頃より出かけ候旨申出ル、明後日帰之節堤通り二軒屋西之あたり迄村方之者迎ニ出候由、就は薬師へ御札相納可申哉、当稲荷へ持込セ可申哉之旨申聞候間、薬師之方可然旨申遣、ヵ御代参之儀は如何被成下候哉之旨申聞候間、何レ帰之義も深更ニ可相成候間、御代参又は御社参共可仍時宜候え共、何レ帰之儀は申出候様申遣候事

一☆ 同十七日より御前別火被召上候

一☆ 同十八日多度行帰ニ付、村方鎌鍬留・干物等一切不相成候趣申触候よし、八ツ時頃より亭主分之者不残松本村迄迎ニ罷出候、尤不参之者有之は過料差出可申由惣方申合之旨及承候、若者神楽釣り同所迄迎ニ罷出候事

一☆ 同八ツ時頃与頭市兵衛罷出、只今御祓着之由届出ル、追付御社参有之候段申遣候、存外早々罷帰候ニ付、前文之迎之手筈も合不申由、八ツ半頃致参詣候処、未御仮屋も出来不致有之、暫く寺にて待合候処、村役共より相願候は、此節桃春院留主中ニ付乍恐御祓御仮屋へ御移被下候様相願候間承知之旨申答候、参詣之節為御迎庄屋弥兵衛・与頭市兵衛・平右衛門・弥三七裏門先迄出迎候事、薬師堂ニは為次・喜藤次出迎候、扨薬師堂ニ御祓持込候儘有之候、竹之先ニ御幣挟、其所ニ御祓荒縄ニて結付有之候、解候て両手ニ持仮りふくめん替りニ紙を口ニ加へ御仮家へ移し候て、御幣は前ニ立置候て帰り候事、薬師大門迄村役共送り候事、今晩源右衛門より行燈献候、若者共色々騒候由、昼夜共村役両人・小前方も罷り居候事之よし、七日之間日参之積也、今夜余程雨降早速御利生ニて皆々悦申候

一☆ 同廿日庄屋組頭罷出、昨日より夜ニ懸能潤頂戴仕難有旨御礼ニ出

一☆ 同夕方村役罷出申聞候は、今日ニて二夜三日ニ罷成申候、今晩川迄御送り可申哉、何レ御上思召次第ト村内申聞候、如何可仕段申出候、尤村方之者亭主分之者は替り合薬師へ籠り居候由、旁々村方も費も多候間、今夜御送り之方可然旨致内談候間、其旨申聞候

一☆ 同廿日夕庄屋為次罷出、先刻罷出可申所、御仮屋御番ニ相詰候故不参仕候、先刻御下知ニ随ひ今八ツ時川迄御送り申候、就は船為拵候間御目かけ候由ニて致持参、長サ五尺計巾壱尺五寸位之船、へがい・ともがい(舳櫂)も付有之候、書付之儀致呉候相願候間、八郎四郎認遣、へ先ニ多度大権現如此相認、船底ニ雨請成就濃州各務郡前渡村惣百姓と相認候、ヵ御幣四本拵遣候、七五三縄ニも紙を切付遣候事、且又今夜御社参之有無も尋候間、刻限頃御社参可有之候、併遅リ候ハヽ村役壱人御案内ニ罷出候様申遣候

一☆ 同夕若者俄致迎大勢参り行烈(列)抔致候、折節至(到)来之酒弐升程有之候間、乍少分遣候

一☆ 同九ツ時半頃致参詣候、今晩も六ツ半頃より五ツ過迄致大雨候て皆々悦候、社参之上御仮屋より御祓を出し、船ニ乗セ申候、船之両脇ニ麦からにて杭を拵へ、夫ニ四本之御幣を立、七五三引廻し有之候、先方より参り候御幣は真中ニ立有之候、右へ御祓結付置罷帰り候、村役共不残薬師大門迄送り来り候

一☆ 同廿一日四ツ頃村役不残・惣代三人為御礼罷出候事

一① 同九ツ頃村役不残ヵ惣代として半兵衛・和蔵・喜代七罷出、願書差出、今日は八郎四郎儀病気ニ付引籠罷在候間、宮川孫市出勤有之候間同人取次、願面左之通り

年恐口上書ヲ以奉願上候御事

一御当役後藤八郎四郎様御儀、風聞ニ御返役も被仰出候段惣百姓一同承知仕候、仍之年恐奉願上候、当村之儀は連々百姓困窮仕候て歎敷奉存候、然所両三年□年恐御上様ニも御倹約被仰出、御勝手御〆り等も格別之段承り難有、惣百姓方ニおゐても右ニ順シ候様申合候、殊ニ両三年打続旱損仕候、当年は別て旱損ニも御座候間、当暮之所年恐御六ヶ鋪も可有御座儀ニ奉存候間、新規御役人中様ニては中々行届不申、是のミ惣百姓歎敷奉存候間、何卒御当役八郎四郎様いつれニも当年之所ハ御勤役被下候様一同奉願上候、仍之不顧恐以口上書奉願上候間、此段御勘考之上村方願之趣御聞済被成下置候様、幾重ニも奉願上候、以上

寅六月　　百姓代　半兵衛印
〃　和蔵印
〃　喜代七印
弥三七印
市兵衛印
平右衛門印
弥兵衛印
喜藤次印
為次印

御地頭所様

右之通取次差上申候、以上

右之趣ニ有之候間、孫市儀若年之事故、以書付申聞候、左ニ口演之覚

一村方惣代より願書之趣及一見候所、至極尤ニも相聞候え共、八郎四郎退役ト申儀決て無之、何方より右体之風聞承候哉致承知度候、先達て退役願も差出候え共、兼て永勤之筈ニて召抱候事ニ候間、退役願取上不申、尚又永勤之旨申付候、然共在所表ニ無拠儀ニ付妻子は盆後ニも引払候え共、八郎四郎儀は右之趣ニて永勤申付候事ニ候、然所右体相願候儀不審敷存候、殊更惣代トして罷出候半兵衛、和蔵儀は、去夏及騒動候節も印形及遅滞候者ニ有之候、其節之願とは引替り今度之願面は相違之事ニ有之候、然共実々当方為ヲ存相願候事ニ候ハヽ其趣意も可有之候間、一応相尋申度事も有之候間、来月七日は善兵衛致出勤候間、其節罷出相願可申候、併退役ト申儀は無之候、其旨相心得可申候、譬退役ニ相成候迚も其段申出シ候上ニて右体相願候事ニも可有之所、風聞之儀殊更前文之訳故聊退役ト申儀ニも無之候所へ、右体願出候儀は何カ不審鋪存候間、先々願書差戻シ申候間、其旨相心得可申候、以上

六月廿一日　　取次　宮川孫市

一覧之上申答筋も有之候ハヽ以書付可申聞候、此書付一見後可相返事

右之趣取計申付候処、村役共一覧之上門迄下リ度由ニて、暫時及内談候様子ニて、又々罷出申聞候は、難有ト計申置引取候事

一☆（七月）同十三日庄屋為次罷出、追々照統候間又候雨請之義惣方相願候間、於薬師御願上ケ候処、薬師へ湯花上候様ニとの御願上り候間、明五ツ時頃神子参り呉候様申遣候積ニ御座候、此段□□候旨申

出ル、則御聞届之趣申遣、尤明日刻限頃案内ニ罷出候様申遣、同十四日九ツ過頃案内申出候間、八郎四郎被仰付御代参、御初尾十二銅、若党・草履取、神子申候ニは、二夜三日之内ニ御□生可有之、丑寅之方より雨来り候よし申候

一☆同十六日夜庄屋為次罷出、今日は能雨降り候ニ付、早速於薬師御願之儀和尚へ相頼候処、和尚被申候は、大般若転読之儀兼ても心願ニ有之候所、右為御礼転読可然由被申候え共、押付候儀は如何敷、仍之御願之内へ転読之儀も書加へ候処、大般若転読御願ニ掲り候間、明日八ツ時より和尚転読有之候、右経等草井村ニて借用之積りニ有之候由申出ル、尤跡方御祈禱ニも相成候間可然旨御聞済有之候、然は明日鍬鎌留ニて惣方遊候由、是又届候事

同十七日八ツ過頃村役為案内罷出候、今日は八郎四郎勘定被仰付候故取込ニ付、御代参山本祐左衛門被仰付候、若党壱人・草履取壱人、御初尾十二銅、暮合少以前ニ引取候

一①同廿四日八郎四郎明日退去ニ付左之通被仰渡候

覚

一今般在所住居相願候ニ付、諸勘定等聊相違無之候、諸帳面慥受取申候、猶以永勤申付候ニ付、以後出勤之儀月ニ一日ツヽ左之通り

正月三ケ日之内　二月中旬頃　三月節句
四月何□□　五月節句　六月照中之内
七月節句　八月祭礼十二日　九月節句

十月検見頃　十一月上旬之内　十二月下旬

右之通大概相心得可申候、乍少分倹約中為手当一ヶ年金壱両差遣候事、臨時用向之節は申遣次第出勤可有之候、用向日限ニ寄別段手当可申付候えとも、定式之儀は右之趣ニ相心得可申候、以上

寅七月廿四日

一②八月朔日惣若者代八左衛門・牧蔵・利助・孫蔵罷出申聞候は、当祭礼神楽計ニては薬薄ニも御座候間、俄相催度候間此段御願申上候旨申出候故、右は中老分へも咄合惣方村中故障無之候哉、又は山東方若者相見へ不申候、此義は如何之旨相尋候所、是迄神楽入事ニ踊等相催候節は入用等中老分へも相頼候事故相談ニもおよひ候え共、此度之儀は若者計懸り物出候事故相談ニは不及申候、ヰ山東方之儀は踊等之節は一緒ニ相加り候え共、神楽之儀は先年より本郷方両組而已ニて拵候事故、差構不申候段申聞候間、何様尤ニも候え共、中老方へは一応噺置候方可然、何事ニよらす大勢集り候えは若故障之儀有間敷□□不申候間、其節は中老分之世話ニ相成候事も有之候間、噺置可然候、右之趣承知ニ候ハヽ書付相認候間、若者之事ゆへ印形有之間敷候間爪印いたし候様申聞候所、故障無之候間書付相認候、尤文面中ニは中老分へも咄合候趣ニ書取申候、左ニ

御尋ニ付申上候御事

一当祭礼例年之通神楽取出シ申候、就は子供俄相催度由申候ニ付、村方中老分一両輩え右之趣咄シ合仕候えは故障之儀は無御座候、

勿論目立候儀ニは無御座、於土間神楽之間合ニ仕候事ニ御座候、
此段御聞済被成下候様奉願上候、以上

寅八月朔日　惣若者代　八左衛門爪印
牧　蔵爪印
利　助爪印
孫　蔵爪印

御地頭
御役人中

追て申聞候は、薬師座鋪借申度由申聞候間、此義は桃春院ト相対可仕旨申遣ス、就は例年之通御屋敷へも罷出可申候え共、御覧被成下候程之儀ニも無御座候間、御用捨被成下候様ニも申聞候間、此義先例も有之候間罷出候方可然旨申聞候所、左候ハヽ昼前之内罷出、昼後於薬師神楽相廻し可申旨申聞候て罷帰り候

一※ 八月三日庄屋喜藤次罷出申聞候、先達て御内見ニ入候丈助・造酒蔵より之願書御差下之上、情々利解申聞候え共中々聞入不申、又候願書差出候間取次差上申候、御内考も被成下候様申出候、願書左ニ

乍恐以書付奉願上候

願人　造酒蔵
同　丈助

右両人奉願上候、先月十七日上下若イ者一統申合、私共両人え申聞候は、以来何事ニよらす村方相談等之儀其方共両人儀は村並相はぶき可申旨申聞候間、甚難心得奉存候間、如何様之趣意ニて右体申聞候哉之段、惣方立会相糾申候所、只理非不相分無法ニ一同申合申聞候、左候えは私共村並はぶかれ候ては立所も無之、依之乍恐奉願上候、趣意申立候えは其趣意ヲ以御願申度候え共、趣意少も不申立理不尽ニ右体申聞候間何卒御慈悲ヲ以惣方被召出、何故之趣意ヲ以村並相除キ可申哉、御威光ヲ以御吟味被仰付被下置候ハヽ難有仕合奉存候、趣意相分申候えは私共も得心之儀ニ御座候え共、無法ヲ以両人押込候段乍恐不得其意奉存候間、此段厚御吟味被仰付被下置候ハヽ難有仕合奉存候、以上

寅八月　願人　造酒蔵爪印
同　丈助印

御地頭様
御役所

右之通相願申上候間奥印仕候　庄屋　喜藤次印

右之趣ニ有之候間、内考之上可及沙汰旨申聞、願書善兵衛初ニ預置候

一※ 同夜五ツ時頃新加納御陣屋使来、手紙左ニ

以手紙致啓上候、不勝之天気合御座候え共、弥御安全被成御勤珍重奉存候、然は其　御知行所前渡村百姓酒造蔵・丈助と申もの、当御役所へ欠込願申出候ニ付、御添状無之願書取上ケ不相成段、利害申聞候え共口上ニても申立候、当方ニて取上ケ無之候ハヽ、祭礼之場所え踏込一命を懸ケ差留可申由申之候、左候ては変事出来之程も無覚束奉存候間、御内々申上候、御勘考被成模通能静ニ御祭礼も相調申候方可然哉奉存候間申上候、当方ニては何れニも

御添状無御座候ては取上ケ不申、今暫ク同役評衆中、願書一覧いたし居候旨申聞預り置申候、当方門前ニ相結居申候段申之候、願書写御覧ニ入申候、御勘考之上当方引取変事も出来不仕候様御取扱可被下候、右之段御内々得貴意候、早々御返事奉待上候、以上

八月十日夕　今尾茂左衛門
表ニ　辻善兵衛様

願書写左ニ

当村祭礼ニ付、先規より双方納得之上ニて神楽を廻し来り候処、当年は私共え相談も不仕、神楽入レ言と名付狂言仕組候間、御地頭様え此由御願奉申上候処、御差留不被下置、私共身分相立不申候間御願申上候間、当　御役所様より狂言御差留被下置候様、御慈悲奉願上候、左様無御座候ハヽ無是悲場所へ踏込、一命を打捨候ても相留申度候、何卒御慈悲を以早速祭礼神楽ヵ狂言御指留可被下置候、納得無御座事ニ左様仕候ては村法相破レ候間、幾重ニも御願奉申上候、以上

寅八月　前渡村百姓　酒造蔵印
同　丈助印

新加納
御役所

右之通早々写致シ御覧ニ入申候、御内々御勘考被成可被下候、若写違も難計奉存候、御勘弁御察可被下候、何れ御返事奉待上候、以上

一※ 同十二日五ツ時頃惣若者罷出、夜前相伺候儀如何哉之旨申出候間、未タ不及沙汰候え共、祭礼之儀故太鼓抑候儀は不苦、神楽俄之儀は先々延引可然申遣候、同五ツ時半頃庄屋喜藤次罷出、追々御苦労相懸候一件両寺取扱ニて双方和熟ニ相成候、仍之両人共御咎御免被成下候様相願候、則御門前迄召連候由申出候間、早速呼出請書申付候、左ニ

御請申上候覚

一 先達て私共入組之儀ニ付、当　御役所へ以願書御願申上置、去ル十日追訴御願ニ罷出、御下知も無御座候処、新加納御役所へ欠込出訴仕候ニ付、親類之者共被召出、願書願下早々つれ帰り候様被仰付候ニ付、親類之者共御陣屋へ罷出、其段申聞候えとも彼是心得違仕、重々不埒之段被仰渡奉恐入候、依て為御咎手錠被仰付、別て恐入相慎居候所、昨夜より常貞寺・桃春院ヵ其外夫々之衆中立入、差添ニて取曖被呉候ニ付、伺其意内済納得仕候、然上は先達て御願申上候願書御下ケ被成下置候様奉願上候処、是以御聞済御下ケ被下置慥ニ請取申候、右内済事済仕候上ハ、於後日少も故障ケ間敷儀毛頭無御座候、為其御受印仕候処仍て如件

寅八月十二日　前渡村　酒造蔵印
同　丈助印

御役所

右之通私立会ニて被仰渡、承知仕候ニ付奥印仕差上申候、以上

同村庄屋　喜藤次印

右ニて致事済、咎差免シ候

庄屋引取懸ケ、若者共両三人罷出候様申遣候、則□刻罷出候故、延引被仰渡候神楽・俄共不苦候間早々相初候様申遣候、其後又々両三人罷出、雨天なから先例之通御屋敷へも罷出度由申出候間、勝手ニ可参旨申遣候処、八ツ半頃より罷出神楽・俄相催候事

一㊥（九月十一日）同日七兵衛罷出、明日名古屋へ便り有之候旨申出候間、織之右衛門様へ御状被仰遣候、八郎四郎一件左ニ

以手紙致啓上候、秋冷御座候え共弥御堅勝被成御座珍重奉存候、然は家来後藤八郎四郎儀追々蒙御懇命於拙者忝奉存候、然所先頃被仰下候ニ相免シ、急々罷出可申奉存候処、其後迚も罷越不申、尤此間被仰下候ニは病気痛所も有之候由ニ御座候え共、左候ハヽ態々以使成共断申越候筈ニも可有之候処等閑之致方、此上於拙者猶予難相成奉存候、元来貴様御世話被下候事故、是迄も何事も致了簡、只々永勤之所而已存候て召遣候所、両舌を以暇相願、其上様々之悪口申越候段、重々不埒奉存候、殊更当方菩提所納所入魂ニ相交候所、是以存外之悪口以自筆申越候由ニて、同寺長老殊之外立腹ニ御座候、八郎四郎義一端立退候え共、猶又永勤申付一ケ月一両度宛出勤可致旨申付候処、既ニ請も仕致退去候上は家来ニ相違無御座、仍之右寺長老えも家来之儀故、拙者何共申方無御座、甚以迷惑奉存候、其上同寺ニて金子も致借用、夫形ニ致退去候由、旁以重々不埒奉存候間、兼々懸御世話候上気之毒奉存候え共、何レ武家方奉公之儀構申度奉存候間、近々夫々えも可申達奉存候、当地ニて之風聞ニは、石川氏家来分ニて当時出雲屋敷トやらに借宅仕居候由及承候、弥左様ニ御座候哉致承知度奉存候、武家奉公之儀急度／＼差障り候間、貴様ニも其趣御心得被下、其御地ニ仕官仕候風聞御聴候ハヽ為御知被下候様奉希候、若御用捨等於有之候は、急度御恨奉存候間、先々此段乍幸便得貴意度如此御座候、以上

九月十二日　　坪内嘉兵衛

坪内織之右衛門様

尚申文略

右書状七兵衛方へ十一日夜為持遣候

一ケ（十月六日）同日村方毛見尤一昨四日申触置候、当年は立毛悪敷下切坪五合五勺ニて相済候由、仍之当方相調見候処免三ツ五分、此物成四拾六石余ニ相当リ候分ニて三割五分七厘ニ相当り候間、精々四拾七八石之所ニて相納候様被仰付致出役候所、於場所小前より申聞筋、五割引とも御願申度候えとも余り手張候故、四割八分引相願候由申聞候間、余程違候えとも御用捨方之儀三割可被下旨申候え共元来余程之違故中□不申、色々利害申聞候所達て相願候ニ付、此上出役之為了簡八分御用捨可被下候間都合三割八分ニて相受可申旨申聞候所、小前より四割四分引ニ相願候段達て申立候故、此上出役了簡不能旨申聞候所、村役共も骨折候えとも不行届、併四割弐分ニてハ大方相納り可申旨村役共申聞候えとも、余り手張候故先々引取、思召も相伺候上ニて沙汰ニ可及旨申聞引取、当年は存外立毛悪敷候間、小畝引之高も余程ト相見候間、両様ニては大引

ニ相成候間、相伺不申候ては難取計、漸々六ツ過頃引取申候、例之通御酒等被下候て休足被仰付候事

一同七日村役共呼出、昨日之検見一件申談候、当年之所誠ニ以手張候御用捨方ニ付、当役ニおいても御取成難申上、然共立毛悪敷候旨追々御取成申上候所、此上弐分引被下候間都合四割ニて御受仕候様、村役共ニも精々相心得小前方へ申聞候様申付候所、惣方へ可申聞旨ニて引取申候、同夕村役罷出申聞候は、為次義は岐阜四ケ寺相廻り候ニ付無拠不参仕候段断申聞候て、其上申聞候は、先刻之趣惣方へ申聞候所、段々厚思召ヲ以被仰付候事故御違背は不申上難有奉存候、猶又小畝引方之儀宜敷相願候旨申聞候、尤為御礼惣代召連候て御門前ニ控させ置候旨申出候、則申上候処請書取可申旨被仰付候間、左ニ

差上申候御請書之事

一当御検見之儀、格別之早損ニ付追々御用捨方之儀奉願上候処、為御用捨物成ニて四割引被仰付、一統難有奉存候、依之為惣代御請書奉差上候、以上

文化三寅年十月七日

前渡村本郷東組惣代　久右衛門印
同西組惣代　惣右衛門印
同山東組惣代　加　吉印

御役所

右之通一緒ニ被召出被仰渡候間、奉承知候ニ付奥印仕差上申候、以上

同村庄屋　為　次印
同　喜藤次印
同　浅　七印
同村組頭　弥三七印
同　市兵衛印
同　平右衛門印

右書付印形不致持参候由申聞候間、明朝致持参候様申付候、大縄相済候上は明日小畝引罷出候間、村役之内一両人為案内明朝罷出候様申付遣候

一㊥（十一月）同二日善兵衛被召連平島へ御出、扨大野村出入一件御出合御座候所牧右衛門ニも罷出何角被申上候、右始終は最初大野村代々庄屋義蔵村方ニて憎まれ候より事起り、庄屋前帳面入狂も有之由ニて及出入候所、糯ト只米之所差引ニ少々心得違も有之、直段相違之事故其所は少分之事故、及吟味候所早速相分候所、庭帳之内庄屋義蔵紙数抜取候由小前申立支配請不申候出入中、右義蔵一統之者は全体米野越ニて数代大野ニ住居と申ニも無之、三四代ニも相成候由、宮崎を氏トして当時庄屋ニて競（勢）ひ能候間、西大野方小前之者共大野はへぬきの百姓ニて候故、右体之所より事起り候儀ト相聞候、西大野方之内ニて御法度之博奕いたし居候由ニて、宮崎

一統方より石を打候所内より追欠出、其者をつかまへ致二ちようちやく一候所、宮崎方より新加納へ及出訴、御法度之儀致居候ニ付可見届存候て参り候所、内より大勢かけ出ちようちやく致候由出訴いたし候故、相手方呼出及吟味候所左様義無之、成程勘定相御座候て三四人寄合居候所へ外より石を打候間、ろうせきいたし候故咎可申ト立合候所、其者逃去候、全以御法度沙汰ニは無之、ちようちやく等も不仕由ニて、数度吟味有之候え共不相分故、先達て江戸表へ罷下り居候、猶又一昨日両人江戸より御差紙(到)至来ニて致出立候由、是もたたき候仲間之由ニ候え共、吟味之節は人声致候ゆへ取さへに罷出候ト申抜候由、右体無証拠之言葉争ゆへ、何レヲ何レと相分かたく候え共、納り之所も荒増御相談御(々ヒ)座候処、庄屋出入之儀は双方年番ニいたし候ハヽ相納可申歟、又博奕一件は実意を以相糾候ハヽ、元来致居候ニ相違無之儀ニ候間、夫ヲ以押候て誤証文てつはりと書かせ可申歟、なれとも博奕□□儀は表不立儀故、御冥加構(講)ニて寄合居候段申為披、其上も不承知ニ候ハヽ入牢ニても申付候ハヽ西方たんのふも可致哉と、漸々御評儀一決ニ相成候、然共江戸役中被申候は、博奕之方は宜候え共庄屋出入之方御頼申候様被申候事故、其所御評義(議)六ヶ敷、博奕之方宜と申は於御本家御裁許相成候て宜哉又は御差出ニ相成候て宜哉、何レ其所不相分故、明日御当方様新加納へ御出ニて其所御聞決之上、弥御取懸り之思召ニ候ハヽ明日平島へ御左右可申筈ニて御帰り

一㊥(十一月廿二日)今日御陣屋へ村役共百姓代召連罷出候所、外呼出も有之候え共先ヅ御三家様共先え呼出ニ相成申候、今朝御意之趣当番河田源内へ申達候所、先差控罷在候様申聞候、村役惣代之者呼出候節江戸役中より周右衛門え申達候由ニて、御三所御用人中へ只今村役百姓代呼出シ利解申付候、左様御承知可被成、先夫々御控可被成と周右衛門より被申聞候故差控罷在候、前野氏・古川氏より被申聞段々利解被申渡候え共、困窮ニ付難渋而已申立候故、厳敷被申付候ニ付又候断申立候故、是は百姓方夫役ニ候へハ何程相願候ても断は聞届不申候、法外之事計申立候えは咎をも申付候抔と被申、物数多申立候者えは縄打抔と申事ニ相成候故、村役共より相願暫く御門迄御下被下候様願ニ付、聞済之上御門迄相下り相談之上、明日迄之日延申立候ニ付、是以聞済ニ相成、其上下私共へ又々権左衛門罷出、只今明日迄日延相願候故聞届ケ下相下り申候間、先々今日は御引取可被成ト申事故引取申候、仍之明日も三人共罷出候筈ニ引合相分レ申候、且又引取之砌被申渡候は、今日之様ニ法外之事申立候えは品ニより咎も申付候之間、此段も御三人様へ可被仰上ト之事ニ御座候

一同(十二月)五日新加納より直段附来、左ニ

一御直段両ニ壱石壱斗四升かへ

一御払直段両ニ壱石弐斗弐升かへ

右ニ付七日取調、八日免定出候様被仰付、当畑方御用捨無之故か頼置候え共不申来候間、先御用捨無之積也

一同八日惣村役罷出候間、御免定弐通相渡候て例之通請書取之候、外ニ書付ニて米弐石手当として被下置候

覚

一御直段両壱石弐斗弐升

一御払直段壱石弐斗五升

右之通相定、致封入相渡シ候、尤年御直段御本家御直段ニ七升安ニ候え共、畑方無御用捨ニ付、御本家御払直段八升安ニ被仰付候事、同夕為御礼惣方罷出申聞候は、当畑方御用捨無御座候間、いまた村方へは為見不申候え共、御本家出高ニ五斗弐升余御引御座候間、小前へ為見候ハヽ如何可申出哉難計候間、此段申上候由申出候間、当年は畑方御用捨迚は無之候、下切村聞合候哉之段申聞候、いまだ承合不申候間、早速承糾可申旨申聞候て引取候

一同九日罷出候て申聞候は、御免定小前へも為見候所、何レ同シ地所ニて御用捨無之ト申儀は有御座間敷、例年三四合位は違候え共壱升とも違候儀無御座候、出高之引ニては当村へ六石程も相当り候由、若御聞済も無之節は御門前迄も相詰候て御願申上候抔と申様ニ相成候ては惣方難渋奉存候間、此所御勘考可被成下抔とおどし言葉抔申聞候間、左様之儀ニてハ無之、当年下切村御用捨無之、尤是迄下切ニ順候事ニ候所、下切ニ御用捨無之故、出高ニ御用捨有之候迚、下切を打捨出高ヲ申立候儀難得其意候、出高之御用捨は訳合可有之旨申聞候所、左ニ無之五斗弐升余当畑方用捨ト有之候段申聞候故、何レ御憐愍願致候ハヽ以書付相願候様申聞候て帰し候、同夕罷出申聞候は、村方へ書付之儀申聞候所、是迄以書付願候例無御座候間、書付ヲ以御願申上間敷旨申出候故、左候ては難渋之訳合も上迄通申間敷、又は聞誤り言誤リト申事も有之候えは、都て願事ハ以書付願出候儀ニ有之候、弥々其模合ニ候ハヽ善兵衛帰リ次第又々可申遣旨ニて為引取候

一同十四日惣村役罷出申聞候は、夜前御察度被仰聞候一儀、為次とも申合候所、恐入候御儀ニ奉存候、不力之村役共何分御用捨相蒙り度段申出候間、則申上候所、不埒取曖ニ付御呵被仰付候ニ付、口書取置申候左ニ

奉差上口書之覚

一当年畑方へ以思召御手当米被下置難有頂戴仕候、然ル処当夏中旱魃ニ付畑方諸作共旱損仕凶作ニて難渋、殊更三ヶ年以来打続不作仕候故、一統困窮仕御上納難相努、以御慈悲此上之御用捨被成下置候様、勿論　御本家様御出高御免定小前之者共拝見仕候所、当畑方え格別之御用捨米被下置候趣ニ御座候、例年御本高之御用捨御出高ト格外ニは相違も不仕候所、当年は格別之相違ニも御座候間、右ニ被為遊御准御手当米被下置候様、村方一同ニ口達ニて御願申上候処、御出高之御用捨当年ニ不抱訳ケ合御座候ニ付、例年之分ケ合を以御用捨被下置候由御利解被仰聞、口達ニては意合も不相訳、趣意之相立候様願書を以御願申上候段被仰付、則願書差上申候処、御出高御用捨トは格外相違之段申上候ニ付、趣意相違仕候故難被遊御取上も、困窮ニ付難渋而已申立御願申上候えは御取上可被下置、願意認直差出候段百姓代之者共え再応御利解被仰

聞候え共、得承知不仕、只御慈悲之儀ロ達にて御願申上候様申立候ニ付其段御願申上、先達て指上候願書御願下ヶ被成下候様申上候ニ付、口達ニて御願申上候通願書ニて得御願不申上候段種々蒙御差当候へ共、村方より申立候趣申上候ては御上様へ奉恐入、猶又御利解之趣村方へ申談候ても承知於不仕は、私共不取締之儀相糾候事も得不仕、役前之取計不行届段蒙御糾候え共、一言之儀申上訳も無御座重々奉恐入候、勿論ヶ様不都合之儀御願申上、日々罷出候て御利解被仰付候え共等閑ニ取計置、御上様へ奉懸御苦労、此節え相成一言之申分も無御座候ニ付、蒙御呵奉恐入候、右不行届儀共於取計候ニは急度御咎も可被仰付之処、時節柄以御憐察御有免被下置候趣被仰渡難有仕合奉存候、此上は先達て取次奉差上候願書御下ヶ被成下候えは、村方より何様意合之不訳儀申立御願申上度段申出候共、私共ニて取計、御上様へ奉懸御苦労候儀一切仕間敷候、依之ロ書奉差上候所仍て如件

文化三寅年十二月十四日　　前茂村組頭　平右衛門印
同断　市兵衛印
同断　弥三七印
庄屋　浅七印
同断　喜藤次印
同断　為次印

御役所

右調印之上願書差戻申候て致事済候、当年は出高廿三石余之所へ五斗弐升余畑方御用捨ト有之候由、右は当年ニ不限訳合有之候て之事由、於御陣屋被申聞候、右之御用捨高ニては当御知行畑高ニては六石余ニも相当り候由御座候、当御用捨出高ニ不懸御慈悲願ニ候ハヽ弐石も可被下思召之所、願書願下ヶ候て御慈悲願は致不申候、其所如何之様子ニ有之候哉一向合点被参候事

「（表紙）
文化四年正月
丁卯記録留
御用部屋」

一㊐ 伊勢金拝借一件
一♡ 当村伊右衛門方新客
一○ 一ツ橋様御八男松平久之助様御死去ニ付穏便
一♡ 庄屋喜藤次方新客
一㊗ 去冬より弥三七丈助出入中之所今度丈助妻縁ニ付差拒候一件
一□ 庄屋為次年貢残一件
一♡ 当村勘作方新客与三右衛門事
一△ 庄屋当番請取渡之事
一□ 安藤対馬守様所司代御引渡として御通ニ付御使者一件
一ケ 旧冬より出願之丈助願一件
一☆ 山東組和兵衛新開米庭入間違糾一件
一㊐ 笠松御役所拝借相済手形引替一件
一イ 巾下清水池渡井普請願一件ヰ山東三軒屋池薬師溝さらへ一件
一サ 善六年貢不埒ニ付家材（財）差出一件
一下 下中屋源左衛門年済滞金一件
一フ 道橋普請願ニ付見分一件
一ヨ 俣五郎様御養子一件
一伊 山東組より伊勢参届
一タ 庄屋為次退役願
一京 本郷西組より京参届
一若 秋葉祭無届致候付察度申渡候一件
一忌 辻善兵衛母方叔父不幸届
一聖 桃春院懺法
一㊐ 大津拝借名目ニ付御勘定所より御本家へ御沙汰御座候一件
一タ 庄屋為次休役ニ付元蔵へ庄屋御預ケ一件
一カ 少林寺開板一件
一セ 犬山上本町佐野屋伝八より祐左衛門・庄右衛門・七兵衛相手取致出願ニ付御用人中より内々懸合一件
一ス 諦定御詫御聞済一件
一フ 大釜上之池樋破損ニ付見分一件
一タ 北島祓参届一件
一ム 無働（動）寺御陣屋添書大佐野村久左衛門当村喜左衛門相手取金子出入一件
一エ 江戸御出府一件同御延引之訳
一西 脇八郎兵衛新講立一件
一下 三ケ村一緒ニ雨請洲原へ飛脚差立候一件
一加 納様御参府一件
一大 津拝借金入組一件之御受延引之御直書五月晦日ニ御陣屋へ持参、当役より御答之儀園右衛門え申談之事共ニ
一洲 原宮え雨請御祈禱代参御入用四ケ村割賦御出分一件
一俣 五郎様江州水口加藤能登守様御家老足立新助殿へ御養子一件

一大垣宿本陣上田九右衛門身上不如意ニ付近辺諸家方え御手当被成下候願ニ付御救金被下当役より取扱候書状留
一大垣御家中御用人中え暑中御見舞披露之御直書留
一江州大津御役所宿場金拝借入組一件ニ付七里左六郎方え当役より書状差出候七月十日ニ認候処飛脚出不申同十九日岐阜出ス
一大垣様今般御初入ニ付御歓ニ被進候儀ニ付平島・三井より書状ヲ当役より之返書共留
一戸田釆女正様御入部ニ付御歓之御状七月廿四日御用人中え平島・三井御一緒ニ御使御遣一宿泊ニて帰ル
一八月廿一日大塚利右衛門方へ大津七里氏え入組一件熟談ニ罷出申度候九月朔日頃ニ罷越候来ル廿六日頃書状御認被下候様相頼遣ス
一八月廿二日永田清左衛門ヲ苅谷幸右衛門方へ俣五郎様水口御家中足立新助殿え御養子御熟縁相整当廿六日爰許御発足之趣善兵衛より出状ニて為知遣ス
一同日大佐野久蔵と当村勘六出入一件内済之儀ニ付永田清左衛門え出状遣ス
一円城寺野々垣源兵衛殿用達中え俣五郎様御発足当廿八日桑名宿迄船路通船之儀所々御番所無差支通船相成候様善兵衛より書状ニて頼遣ス
一俣五郎様水口え御引移り之節桑名宿より水口宿迄人馬先触笠松助左衛門より桑名問屋迄誂遣呉候様頼遣ス
一墨俣宿安藤李重郎ト申者米証文入組一件
一桃春院大嶺信州行一件
一荏大豆少々不作ニ付見分願出候一件
一与頭市兵衛退役ヲ惣左衛門跡役被仰付候一件
一小柿村貸地一件ニ付切通棚橋和平殿え御差出一件
一切通森七兵衛方え右一件ニ付善兵衛より手紙遣ス
一同村御陣屋御役人中え善兵衛立会口上書取調差出ス
一大津入組一件之儀江戸表え御直書被遣候
一犬山御用人中より佐野屋伝八願書願下ケ一件申来ル
一下印食大塚利右衛門死去ニ付御悔葬式之先例一件
一切通森七兵衛・上會我部惣左衛門と両人小柿村入組一件内済取曖被仰付候由ニて当方へ来り取扱様子申立候一件
一犬山御用人中え先日之返書遣ス一件
一勢州山田松木雅楽之助より拝借金返納一件書状来ル
一切通森七兵衛方え内輪取曖品返答書状ニて遣ス
一松木雅楽之助え拝借金返納方返書遣ス
一笠松拝借金返納方之廻状来ル
一新加納より御役金差出候廻状来ル
一山東組久米蔵方へ大佐野村久助より嫁引取
一本郷東組喜藤二妹新加納村弥三郎方へ縁付
一大津御役所拝借金滞分去寅年利足当年より年延願一件十一月廿二日出ニ書状岐阜飛脚屋へ廿一日ニ遣ス

□当年江戸表御参府御催旁ニ付、勢州山田御林御奉行所御貸附金御拝借之儀、先達て御師松木雅楽之介え御直書ニて御頼御座候所、

御本家様御役人中より添翰有之候えは出来之旨申来り候間、此度御陣屋役人中より之添書遣、左ニ

一㊂（正月十一日）同日八ツ半頃伊勢へ参り候飛脚助右衛門帰返書来ル、左ニ

尚々神用取込乱筆御免可被下候、委細十五日過自是御左右可申上候、以上

改年之御慶目出度申納候、弥御安全可被成御超歳珍重之御事奉存候、然は先達て被仰聞候当地　御役所御用金拝借被成度由被仰聞候ニ付、御本家御添翰無之ては出来兼候段申上置候、然所御本家添翰も出来候ニ付、態々飛脚を以又々被仰聞、急々当地役所之上相伺呉候様被仰越、尤三日計も飛脚之者致逗留候て成共取極候様との御事御座候、当地　御役所へ諸願事等、正月十五日過ならてハ何事も難申上候、所詮両三日之飛脚逗留ニてハ何れ共決着不致候、十五日過相伺候ても早速ニ御返事も無之、十日計も相立不申候ては否之御返事も出不申候、無益ニ永々逗留致候事も気之毒ニ御座候間、飛脚之者差返し申候、十五日過御役所へ相伺、御沙汰之上名古屋え向早状差出可申候間、左様御承知可被下候、猶又御手紙致拝見候、然は来廿四日安藤対馬守様加納御泊り之由被成弐百両と申金子は迚も出来不申候、漸々出来いたし候て八十両か百両之処ニ御座候、右も相伺可申候ては難相知候、何レ十五日迄は松之内ニて諸事願等ハ申出候義相成不申候間、左様御承知可被下候、十五日過御伺申上、否之御沙汰御役所より有之候上早々御左右可申上候、先夫迄ハ村役人御差越ハ御無用ニ御座候、何分ニも十五日相済不申候てはいつれ共相分り不申候間、左様御心得可被下候、当地　御役所之上御決着次第、名古屋貝屋権左衛門方へ向急書状差出可申候、其節村役人ヲ御本家御添翰書以御遣し可被成候、左も無之ては相調不申候、其節委細ニ証文之下書・御添翰之下書等比方より遣し可申候間、右之御左右申上候ハヽ早々御遣し可被下候、此節は何れとも難申上候、嘉兵衛様より委細ニ被仰下候、別ニ書状差上不申候、貴様より宜御申上可被下候、先は右答申上度、御報旁如此御座候、恐惶謹言

正月六日　　松木雅楽之助
（花押）

辻善兵衛様

尚々乍序申上候、旧冬御祈禱御祓差上不申様家来共へ申付遣候処、例年之通差上候由之御書面ニ御座候、旧冬より私方御祈禱差上候儀御断申上候事ニ御座候、如何間違家来御祓差上候哉、全体坪内御一統ハ西村八郎太夫御旦中ニ御座候所、先達て源右衛門様御出ニて嘉兵衛様へ御祓納候様被仰聞候ニ付差上候処、当時西村八郎太夫旦家浦口町安田伝太夫方ニ相成候ニ付、右安田伝太夫方より坪内嘉兵衛様御祈禱拙者方より相納候義如何之由来り候、仍之去年より差上不申積りニ相心得い申候事御座候、乍去是非私方之御祈禱御頂戴被成度候ハヽ、安田伝太夫方へ其御方より御懸合被下、安田伝太夫師旦之縁切り之上此方御祓御請可被下候、左も無御座候てハ当地式法ニ相背候事ニ御座候間、兼て此段申上置候、且又本文申上候当地役所御用金拝借之義ハ急々ニハ相極り不申候、正

月松過ならてハ諸事願等も難申出候、十五日相済候ハヽ相伺候て御沙汰之上、早々御左右可申上候間、左様御承知可被下候、以上

別紙

一白申上候、弥拝借相願、御役所御聞済御座候節は、御本家之御知行所ニ無之ては相済不申候、添翰而已ニてハ相成不申候、御本家御知行所之村方御書入之事ニ御座候、為念申上置候、其節ニ至り間違候ては拙者迷惑いたし候、猶又拝借相調候ても、上納之義三ケ年ニ元利上納之事ニ御座候、此義も間違候てはいよ〳〵拙者及難儀候事ニ御座候、何れ当地御役所へ十五日過相伺御沙汰之上、早々早状書以可申上候間、左様思召可被下候、以上

正月六日　雅楽之助

善兵衛様

一□同廿二日平島様・三井様へ、安藤様御通行之儀、当役人松原・加藤へ申遣、右文面は、来廿五日安藤様御通行ニ付御使者ニても被進候事ト奉存候、御進物之義鰹節か枝柿ニても被献候哉、御使者之供廻ヵ休足所例之通畳屋利兵衛方ニて着替等支度可然哉之段、申遣候所左之通り返事来ル

御手紙致拝見候、然は来廿四日安藤対馬守様加納御泊り之由被成御承知、右ニ付ハ御使者加納御泊り迄御差出之方可然哉ニ思召、ヵ御進物等之義御相談被仰下、則御紙面之趣相達候所、前方切通御陣屋出来ニ付為御歓御使者ヵ御進物等御三方様共御同様ニ被遣候所、御返礼御挨拶も無御座、外々えハ加納様始岐阜御坊所迄も御挨拶之御使者被遣候段及承り申候、当御三所様へもせめて御家老衆か御用人中より歟、御書状ニても御挨拶可有御座事哉ニも被存候、いかに御役からなれ迚、御使者御音物等御受捨とハ余り御無体なる被成方、此上又候右体之御取計ニてハ一向気之毒被存候故、此度之御使者御差出之義ハ延引ニも被致度、依御相談申上候様被申付候間、右之趣宜被仰上可被下候、草々御報如此御座候、以上

正月廿二日　加藤辰右衛門　松原牧右衛門

辻善兵衛様

右之通り申来り候故思召相伺候所、此方様計御使者御差出之思召ニ御座候、尤右手紙之趣ニも有之候え共、右は御役柄之□、其上御両家様共其後御文通も不被成ト申程之御儀ニも候ハヽ御趣意も相立候え共、御文通も被成候事ニ候ハヽ、今般近辺御通行御座候ハヽ、御使者御差出可有之儀ニも被存候所、右之振合申来り候間、此方様計之思召ニ相決候、右書状留ニ有之

□同廿三日殿様加納へ御年頭ニ御出故、右御序ニ安池様へ御頼ニて、安藤様へ之御進物枝柿五十入箱ヵ足付立派ニ出来□御頼御座候所、御出入方へ被仰付可被下旨ニて御承知被下候、□明後日は御使者之者安池様へ相伺、弁当抄右御屋敷ニて支度仕べく旨被仰聞候、ヵ本陣へも当方より御使者有之候間可然頼入候段、是以安池様より被仰遣被下候筈、兼て御遠類ニ御座候安中十右衛門殿義も、今度若御供ニ有之候哉之旨、是又御聞合可被下旨被仰聞候

□同廿五日辻善兵衛御使者被仰付候、若党壱人・草履取・鎗持・挾箱・釣台二人、御口上書左ニ、奉書二ツ切

対馬守様倍御勇健被為成御座、恐慶(恭)之御儀奉存候、今般御用向ニ付近辺御通行之趣承知仕候ニ付、御途中御安否等御窺申上度、以使者目録之通進献仕度奉存候、是等之趣宜御披露可被成下候、以上

正月廿五日　坪内嘉兵衛使者　辻善兵衛

外ニ安中十右衛門殿へは御供ニ候ハヽ御使者相勤様被仰付候、箱入志保見まんちう一箱被遣候、ヵニ枝柿箱は加納様ニて御拵之事故、今日あの方ニて書付等も御認被下候事

一枝柿一箱 以上 奉書一枚

右之通相認致持参候て安池様へ罷出、御進物受取夫より三河屋林右衛門方へ罷越控罷在候て、林右衛門本陣へ承合ニ遣候所、加納様御使者・大垣様御使者相済候ハヽ御案内可申旨申来故相待罷在候、安藤様ニは切通へ御立寄りニて、夫より岩田ノ岩観音へ御参詣ニて、加納柳丁大田や新助へ御立寄り、御本陣へは暮合頃御着也、本陣より案内有之ニ付罷出ル、玄関ニて刀抜若党へ為持候、若党儀宰領兼候故、刀ハ暫時草履取ニ渡候様申含置候て、目録箱より目録取出懐中いたし、玄関へ揚候て、取次中へ御口上申入候て目録相渡候、然所御役筋ニ付御進物御座候儀哉、又は御懇意ニ付被遣候儀哉、是迄も御役柄ニて御通行之節は被遣候事哉之段、尋御座候間、数年□□入も仕候儀ニ付、近辺御通行之事故途中御安否相調□□品進献被仕候段申候所、致承知候旨ニてあちらへ被立、又暫□□罷出被申聞候者は、旧記吟味等致候え共混雑ニて不相分候、先例も有之□被進候儀哉之旨尋御座候間、先例も有之、尤先刻申述候□□御役柄ニ不拘御出入之儀ニ付進献被致候段申述候所、又候其□評儀も有之候趣ニ相見候所、御取次頭取青沼助兵衛ト申人被罷出候て、被入御念候御使者御進物等忝被存候、被致受納候間勝手ニ引取可申段被申聞候間、引取申候て早々安池様へ入り、無滞相済候段申上候内、御門限ニも相成候間早々引取申候、御屋敷へは夜九ツ頃罷帰り候事

一サ(二月)同十日西組善六儀未進不埒ニ付呼出致吟味候所、金弐分は当晦日迄ニ可致上納候え共、跡金之所は何ツト申日限等難申上度(ママ)旨申候間、左様ニては不相済候間、親類受合候様申聞候え共、是以受合不申候間、段々及吟味候所、左候ハヽ家財居屋敷差上候段申聞候間、其趣受書申付候、写略之、親類弥三吉・庄屋代与頭市兵衛

一フ(二月十一日)此間中願出候道橋普請之儀、同十二日見分被仰付善兵衛罷出、場所左之通、彦六前より堤下通藪伐払、中之凹切埋、鶴松屋敷裏通堤上り際迄、夫より和蔵屋敷裏通伐払道直し、弁才天前山道凹之所へ土留石入切埋、与三次裏堤下池際道長五間程藪伐□、同所池際より要水吐溝本郷村中より村西川田吐口迄、為次裏通道藪之方垣より内へ壱尺伐払、藤助前石橋懸替、弥三八前板橋二枚替、其外村中之内所々板橋取繕、別段願候は御屋敷池渡井腐候ニ付埋替、右之通見分之上今日より取懸り候

一ヨ 同十二日浅野兵部相見へ、俣五郎様岐阜稲葉神主塩谷和泉守方え御養子之儀内伺ニ来ル、尤二両年以前沙汰も有之候え共、持参少々望候故其儀は不行届段申答候処、其後一向沙汰も無之候処、又候先方より沙汰有之候ニ付、御内存伺ニ罷出ル、何レ一両年引続候旱損ニ付、好等有之候てハ御相談ニも難及候間、其処先方了簡も聞決之上、重て御申聞被下候様申遣候

一ヨ（十六日）同日御前・俣五郎様岐阜へ被為入候、右は此間浅野兵部参り、先日之趣先方へも通候之所都合宜候由、何ニも乍御慰稲葉御参詣旁御出も被成下候ハヽ御供可仕旨申候ニ付、兵部方へ向早朝御出、夫より岩戸村兵助へ兵部参り、同人事も召連候方可然ニ付、兵助方へ参り候処、達て御立寄相願候ニ付御腰被懸候処、御酒御茶漬等差上候て、夫より山越岐阜へ御出候処、先方も無差支、仍之御社参序ニ兵部御案内致候趣ニて塩谷和泉守へ御立寄候処、先方娘御菓子持出候、夫より和泉も罷出候て暫御咄有之、御帰御座候事

一若 同十七日本郷方若者呼出、例之通庄屋へ差紙ニて申遣候、今日藤兵衛・伊三郎・次右衛門罷出候、右は去ル十五日薬師秋葉山祭礼致直し候由ニて太鼓等も相聞へ、当日は渦盤ニ付御参詣も御座候て御目ニも留り候事間、右届無之ニ付察度申渡候処、村方より御願候て祭礼致候間、村役より御届申上候儀ト相心得候て御届ニ罷出不申候、然共是又左様之儀ニは無之、何レ祭礼之儀は若者受持之事故、不申出候はてハ相済不申候間、立帰惣若者へも申合、弥無調法ニ候ハヽ其段御詫申上べく候由、申聞候て為引取候事

一大 同十九日辻善兵衛御陣屋へ罷出候、村役喜藤次・甚右衛門・百姓代元蔵罷出ル、周右衛門・茂左衛門より申達御座候は、甚三郎より御達可申所未病中ニ付、私共より御達申候、江戸表より被仰越候由ニて御用状書抜為見被申候て、其外書付ニ調印致候様被申聞候、差出被申候、左ニ御用状も同様之事

御請書

当月六日大手御勘定所ニおゐて御勘定御奉行井上美濃守様・水野若狭守様御口達之旨、御勘定御組頭関川庄右衛門様・芝与一右衛門様御列座之上被仰聞候趣

坪内式部殿内分坪内嘉兵衛知行所美濃国各務郡前渡村へ借受候大津御代官石原庄三郎より拝借金、近年納方等閑ニて自余差障ニ相成候間、以来期月ニ急度相納候様可取計候、若心得違有之候ては不相済事ニ候間、御口達有之候ニ付、承知仕候旨御答申上候処、則御請印可致旨被　仰渡候、請書左之通

東海道大津水口伏見宿成金（助駅か）、坪内式部内分坪内嘉兵衛知行所美濃国前渡村え借受候所、近年納方等閑ニて自余之差障ニ罷成、不相済事ニ候、以来心得違無之期月無遅滞相納候様、急度取計可申候

右之通被仰渡奉畏候、以上

二月六日　　坪内式部家来　河田喜平太

右御前書之通被仰渡、逐一承知奉畏候、返納期月無遅滞急度上納可仕候、仍て御請印差上申候、以上

丁卯 二月十九日　　坪内嘉兵衛家来　辻善兵衛

御役所

右調印致候様被申聞候え共、兼て之入組も有之候間調印難致、引取候上ニて旦那へも申達シ御請可致旨ニて罷帰り候、村役共へも同様之事之由、是以調印御断申罷帰り候由

一（三月）同九日大津七里氏へ書状岐阜飛脚屋へ向出ス、左ニ

以剪紙致啓上候―、然は今般御勘定所ニおゐて本家坪内式部家来被召出、嘉兵衛方拝借分其御役所宿場金相滞候由、期月ニ至候ハヽ相納候様被仰渡候ニ付、右為御答今度嘉兵衛家来江戸表へ罷下シ申候、右ニ付は最初小柿村小兵衛より御手前様え相願、同苗佐左衛門知行所平島村へ金百両、嘉兵衛知行所前渡村へ金百両、都合弐百両は以謀計其御役所ニて横借仕候儀明白ニ御座候、然所右及露顕候節、貴公様よりも御声懸ニ付、河渡村七郎平立入候て種々取扱候ニ付任其意置候、兼々御承知之御事ニ付此段文略仕候、且又今般御勘定御奉行所ニおゐて被仰渡候儀、恐入候御儀ニ奉存候間、右横借始末申立候、就は御名前相除候儀も難相成、小兵衛御入魂ニ付右体被仰付候儀、右等申立候節は御名前も出候儀故、是迄御懇意ニも被成下候間、此段可得貴意旨、嘉兵衛申付候間如此御座候、以上

三月九日　　辻善兵衛

七里左六郎様

一七 同九日尾州犬山御用人中より左之通申来、白木状箱入

上坪内嘉兵衛様

御用人中様

内用　岩田又左衛門

以手紙致啓上候、連日暖和趣候処弥御堅固可成御勤と奉珍重候、然ハ其御屋敷御百姓前渡村庄右衛門・祐左衛門・七兵衛と申者え爰元上本町佐野屋伝八と申者より追々金子取替置候処、勘定滞候付彼是懸合及催促候え共、模通付不申難渋之旨相歎、別紙之通及出願候、都て他領掛合之儀は尾張様御役人中取扱之筈ニ相成居候間、右御役筋え為相願候筈ニ御座候、乍去其御屋鋪之儀は御懇意合之事ニ候えは、一通りニ取計候も菲薄之儀ニ御座候故、御心得ニも可相成哉ト内々各様迄申進候、御渡之上為相願可申候、其内若御勘考も候て内輪調候ハヽ双方静謐幸之儀ニ御座候、則願書写壱冊指越之候、御熟読之上御戻し可被下候、依て不能詳候、此段御懇合申度如是ニ御座候、已上

三月九日　　岩田又左衛門

坪内嘉兵衛様

御用人中様

一タ 同十六日弥兵衛罷出、平右衛門娘・勇七娘・惣九郎娘伊勢へ被参致候所、平右衛門義も追欠跡より参宮仕候段、届出ル

一㊐ 同十八日勢州山田御師松木雅楽之助より書状宮宿届来ル、先達て相願候拝借金七拾両相叶候間、早々大庄屋村役共差出候様申来ル、右書状ヵ証文下書等一件袋ニ入有之候

一大ツ　同日（廿三日）御前加納様へ御出、右は江戸表より被仰越候大津金御請之儀、暫延引之趣ニ答品拵江戸表へ申遣、其内ニ御両家へも御相談之上江戸御出府も治定ニ相成候ハヽ江戸表ニおゐて被仰立度候間、右御相談として御出之所、何レニも此問之趣可然段被仰候間、又々右之通ニ御決御座候、仍之明日御状御差出御座候筈、并先達て御陣屋より来候請書ニ善兵衛調印致し候、村方之儀ハ差出不申候

一大　同廿五日御差出之書状左ニ

一筆……、然は先達て大津表拝借金一件ニ付委細御相談申上候所種々御評儀も被成下候所、小柿村懸合之儀は相立不申候ニ付、御請印之儀仕候様被仰下、併御役所ニ納候証文私正印ニ有之候ては猶更之儀ニ付、御請印速ニ差出可申旨被仰下承知仕候、右証文之儀は私印形ニては無御座、前渡村百姓共印形并庄屋年寄証人等印形ニて奥印家来印形ニ御座候、先達て申上候通、両通之証文差遣候節、家来奥印は両通共於当方調印仕候へ共、百姓方印之儀ハ於大津表相調候積ニて印形預り、其節差出候家来持参仕、模通候九分金之証文ニ調印仕候て、宿場金証文之方は無印ニ仕置候所、右証文御役所へ差入、小兵衛奪借仕候儀ニて、印形之儀は小兵衛如何取計置候哉、何レ前渡村百姓正印ニは無御座候、此段御糾ニ相成候えは明白仕候、然共御相談申上候儀ニ相洩候存念無御座、仍之御請印相調差出申候、何分可然奉願候、然共元金百両亥年より今年迄五ヶ年利分積上候てハ百七拾五両ニ相成申候、中々以皆上納之儀無覚束奉存候へは、何レ御歎御願申上度奉存候間、此段御差含置可被下候、右得貴意度、如此御座候、恐惶謹言

三月廿五日　　坪

坂泉

前野

一大ツ　善兵衛より口上書左ニ善兵衛認

口上覚

一当二月六日於　御勘定所被仰渡候前渡村拝借分、大津石原庄三郎様御代官所宿場助成金相滞候ニ付、期月相納候様被仰渡、仍之御請印仕候様被仰付候ニ付、暫延引之儀御願申上候処、又候御請印之儀被仰付候え共、右一件ハ前渡村拝借仕候儀ニハ無御座、口入人本巣郡小柿村小兵衛ト申者奪借仕候儀相違無御座候、外ニ平島村拝借分も御座候て、此方金高百両九分金と唱候金子ニ御座候、都合弐百両は小兵衛横借ニ御座候て、前渡村へ拝借仕候儀ニては無御座、勿論百姓方正印之証文ニても無御座候、然共被仰渡候御趣意重ク御座候間御請印調印仕候、然共村方請印之儀は右申上候訳合ニ付、御勘考も被成下候様奉願上候、以上

三月廿五日　　辻善兵衛印

新加納

御陣屋

一同五月廿八日御陣屋より来状左ニ

以手紙致啓上候、向暑之砌弥以御安全被成御勤役珍重奉存候、然

は昨夜得貴意候前渡村・下切村・松本村・山脇村田方植付水無之ニ付、任先例洲原へ雨請御祈願之飛脚差立候儀承知之趣被仰聞、則今晩飛脚差立申候、右ニ付上下四ヶ村共一所ニ、明廿九日夕方村役人当方へ呼出し、雨請御祓可相渡候間、左様御心得可被下候、此段可得貴意如此御座候、以上

五月廿八日　　河田源内

今尾周右衛門

辻善兵衛様

一（七月三日）大垣町方本陣上田九右衛門義身上不如意ニ罷成候ニ付、御諸家方え以書付御手当被成下候訳ヶ相願候之間、右之為御挨拶白銀五両と書付して南鐐三片差遣ス、書状左之通

一筆致啓上候、甚暑之節御座候え共、弥御堅勝被成御凌珍重奉存候、誠ニ先達てハ当屋敷え被成御越え共、早々之御事ニ御座候、然は其砌御申聞被成候一件、追て主人えも相達候処、被致承知候え共、時節柄之儀故不能心体、可然取計候様被申付、依て御挨拶之積迄白銀五両致進上之候、御受納被下度候、右之段得貴意度如此ニ御座候、已上

七月三日　　坪内嘉兵衛内

辻善兵衛

名乗書判

御本陣

上田九右衛門殿

（七月廿日）御両士様より之御手紙致拝見候、如仰今以残暑強ク御座候え共、各様弥御安全可被成御勤珍重奉存候、然は　大垣様今般御入部御座候ニ付御歓被仰遣之趣、御相談被仰下致承知候、下拙義も兼てハ御使者ニても被進候儀哉と旦那え相伺候え共、彼是取紛延引ニ罷成、却て貴答ニ相成候、御進物之儀一種ニて鰯一折被遣候様思召ニ付、其段御相談被仰越、御紙表之趣委細旦那え相達申候、何分御同様之趣ニ取計候様被申付候、且箱之儀も銘々ニて為拵可申候え共、若不同ニては不宜、勿論立入候事なから一緒ニ作り候ハヽ少々は下直ニも可拵候えは、近頃乍御苦労御両士之内より御申付、箱・鰯共ニ御一緒ニ御調可被下奉頼候、日限之儀も彼是延引ニ罷成候えは、早ク被差出候方可然ニ候間、来□□御定可被下候、尤釣り台ニて差遣候方宜候え□□釣り人壱人差出可申候、猶又遠方之儀ニ付明七ツ時寅刻平島御屋鋪え罷出候様取計、三井御屋鋪え向差出し可申候、三井より釣り台御拵釣り人壱人御添被遣可被下、左候えは平島表ニて足軽壱人御差出可被下、将又松原氏御廻文元ニも御座候えは、御進物之儀御引受御取計可被下、代銀之儀は廿四日ニ為持遣シ可申候、先々御取替置可被下候、右之段御頼旁御報得御意度、如此ニ御座候、以上

七月廿日

尚々、大垣表より之御状箱并封状二通共慥ニ落手相達申候

一筆啓上仕候、秋暑之節御座候え共、采女正様倍御勇健被為成御座、恐慶之御儀ニ奉存候、今般御道中無恙御着城之旨承知仕、目出度御儀ニ奉存候、依之微少之至ニ御座候え共、右為御祝儀鰯一箱進献仕度奉存候、御序之刻可然御執成可被成下候、奉頼候、恐

惶謹言

七月廿四日　　御名　在判

堀十郎左衛門様
秋山景右衛門様

一同（八月）廿弐日永田・苅谷へ以書付俣五郎様御養子之儀申遣、左ニ

一筆致啓上候、秋冷御座候え共弥御安全被成御勤珍重奉存候、然は俣五郎様御義御養子相整、江州水口加藤能登守様御家老足立新助殿方へ御取組熟縁ニ相成、当晦日先方へ御引移之積ニ御座候、此段御案内申上候様嘉兵衛様被仰付候、江戸表　御屋敷へも御序之刻可然様奉頼候、右得貴意度如此御座候、以上

八月廿二日　　辻善兵衛

永田清左衛門様

右同文言ニて苅谷幸右衛門へも遣ス、右序ニ円城寺野垣氏へも御通船之儀聞合ニ遣ス、左ニ

以剪紙致啓上候、追日秋冷相催候え共、弥御堅達被成御勤珍重奉存候、然は嘉兵衛弟俣五郎儀、今般江州水口御家中へ養子取組相整候ニ付、当廿八日爰許発足之積ニ御座候、就は船路桑名宿迄罷越度候間、川並御番所之儀御問合申候様嘉兵衛申付候、別紙之通少々荷物積添申度、旁不案内之儀ニ付、御差図等被成下候様致度、此段御頼申候間、可然取合被下候様奉頼候、右可得御意如斯御座候、以上

八月廿二日　　辻善兵衛

御用達中様

本紙美濃紙

覚

一駕籠　一挺
一乗下駄荷　一駄
一両懸　一荷
一御挾箱

右之通積添申度奉存候間、可然奉願候、以上

八月廿二日　　坪内嘉兵衛内　辻善兵衛

円城寺
御番所

一先触之儀も、九日庄右衛門笠松へ私用ニて罷越候間、誂遣ス、尤助左衛門迄頼遣ス

先触之事

一本馬　壱疋
一人足　六人

右は坪内嘉兵衛弟坪内俣五郎儀、用向ニ付当廿八日爰許致発足、船路止宿ニて翌廿九日坂ノ下泊、水口宿迄罷越申候間、人馬差支無之様継立可給候、以上

八月廿二日　　濃州前渡　坪内嘉兵衛内　辻善兵衛印

勢州
桑名宿より

江州
水口宿迄

宿々
問屋衆中

追て此先触着次第水口御家中足立新助殿方へ相達可被申候、以上

一同九月二日俣五郎様御内祝被仰付、赤飯左之通為持遣ス、尤三井・平島へは結文ニて遣ス

平島様　一重　三井様　同　安池新太郎様　同
安池新三郎様　安池藤四郎様　少林寺
自得寺御隠居　浅野兵部　岡崎元良
松原牧右衛門　永田左内　苅谷幸右衛門
山本祐左衛門　永井七之丞　宮川孫市
桃春院　山本小弥太　常貞寺
久昌寺　堀半右衛門　三組庄屋組頭　壱重ツヽ之三重
勘六　烈道様　苅谷竜見
和吉女房しゆん

米弐升

〆二十七軒也　糯米壱斗九升
ささげ弐升五合

一同九月三日水口へ御供之者開来ル、去ル晦日無御滞御養子御引移相済、御婚礼も首尾能相整候趣申聞ル、右御供之者共へ御酒被下候、藤田庄右衛門・山本小弥太えは茶漬等被下候事、善兵衛義は水口ニて御使者相勤、夫より大津表へ罷出候間、何角口上ニて申越ス

一同二日水口出立大津御役所へ罷出ル、其夜は海津屋市兵衛方ニ止宿、翌三日七里左六郎殿え以宿、坪内嘉兵衛家来辻善兵衛出津仕候間御逢被下候様申込候所、此節病中ニて引籠罷在候、今日は至て頭痛も強候間難懸御目候間、何卒明日罷出候様被申聞候間、夫より京都へ参り其夜は三条ニ致止宿、翌四日未明ニ京都致出立、五ツ頃七里氏宅え罷出、宿場金横借分滞候一件色々申合候所、七里氏も段々深切ニ被申聞候、此方よりは元利共〆上九分金ニ打替、八ヶ年済御聞済被下候様申頼候え共、一箇訳立不申候はてハ御勘定所迄も申立候程之儀相済不申、其上九分金は五ヶ年済ト御定有之儀、右を八ヶ年ト申儀難出来、何レ御為悪敷は取計申間鋪候間、先金三拾両は利分ニ候間、右丈ケは如何様之時借成共御取賄被成、早々御上納有之候えは、其段申立御勘定所へも申解可致、其方よりも御本家へ相済候趣御届も御座候えは一箇先相済候、其上ニて当暮ニ至、壱割金五拾両当役所金御世話可申候間、右は被成御拝借、其内ニて当年分利足拾五両御納被成候て、残三十五両ニて当時御賄被成候急借分御済被成方可然、来年又は両三年之内ニは豊作も可有之候間、其節外は御こたへ被成、五十七十も其節御上納ニ相成候えは追々金高も減候間、先其年々ニ御付送り被成方可然、何レ笠松以来御懇意も被下候儀故、麁略ニは不存候間拙者御任被下候様（被）不申聞候間、左候ハヽ当暮之御貸附之儀得と御治定被下候

様呉々申演候所、其儀は承知罷在候え共、先差当り其方之御手際為御見無之てハ不案心之由被申候間、其儀は如何敷候え共、ケ様御引合申上候上ハ、於私は御受申上候存念ニ御座候え共、罷帰旦那へも申聞候ハヽ如何被申聞候哉難計奉存候間、即座ニ御受は難成候えとも、八九分通は御請申上候心底ニ御座候、右之趣御請申上候上は、日限等相違も無之急度御談通は取計可申、じだらくの取引は元来不仕段申答候所、其心底ニ候ハヽ弥頼母敷候間、何レ金子廿日迄ニ上納相成候様取計可申旨被談候間、其儀は不行届候間、何レ晦日迄ニ上納可仕ト申候所、弥々ねぢ合、廿五日ト相成、又漸々晦日迄ト申事ニ相成候、尤右之御請書早々差出可申旨被申聞候間、是は罷帰当十五日迄ニ着仕候様出可申旨申談候所、仕立飛脚ニて差登候様被申聞候間、是も漸々町飛脚之筈ニ懸合申候、右之趣ニ相談じ先々引取申候、七里氏へ為土産名酒切手三升致持参候所、引取後為挨拶宿迄使ニてたはこ入二ツ被差越候、右相済直様出立いたし、瀬田ニ止り、翌五日越知川泊り、六日赤坂泊ニて加納へ着之上、安池新太郎様え相伺右一件荒増、漸々夜九ツ過頃御屋敷へ引取候て、翌八日始末申上候

一同十一日京都飛脚定日ニ付、大津御役所へ請書差出ㅍ七里氏へ書状左ニ

差上申御請書之覚

一其御役所ニて先年当村方え御拝借仕候宿場金百両之御利足金相滞申候ニ付、先達て御勘定所え御達ニ相成候ニ付、此度御願申上候て、相滞候御利足金三拾両当月晦日迄ニ急度上納為仕可申候間、御聞済被成下候様奉願上候、右之御請書差上申候処仍て如件

文化四卯年九月十一日　　坪内嘉兵衛家来　辻善兵衛印

大津石原庄三郎様

御役所

一筆致啓上候、秋冷之節御座候え共弥御安泰可被成御勤役、珍重御義ニ奉存候、誠ニ先達て出津之節ハ初て御宅え致推参御面倒之御事共御頼申上候所、御懇意ニ御取扱被成下、万々忝御挨拶ニあまへ緩々長座仕、勝手好之儀共御頼申上候え共、無御気障も御叮嚀ニ御利解被仰聞被下候故、乍愚案致承知被仰下候趣ニ御任せ申上、利金三拾両之分は当月中ニ返上納可仕旨御受申上度奉存候え共、兼て申上候通新規者之儀、殊更先役より主人え申達置候趣意ニハ相違ニも御座候事故、未熟之私宅人之了簡ニて御請申上候て引取之上、旦那へ相達候処若々行違候てハ、御懇意之思召も不行届候ては、却て失敬ニも相成儀奉存、御請之儀暫日延頼申上候所、是以御聞取被下候故去ル七日夜致帰村、翌日早々旦那え御利解之趣相達候えは、兼て意合被致承知候とは相違ニて、御深切之御取計忝次第被存、何分当方下地不如意之勝手向故、元利共ニ一旦之御取上ニも相成候てハ、以来立行兼候事故致心痛候、先此節相滞候利金三拾両致返上納候えは御熟談ニ相成、於御勘定所は入組之訳合相済候方ニ相成、其上ニて当冬分拝借金御願申上候えは、壱割之利足ニて五拾金御貸附被下、其金子ヲ以当年之御利足拾五両も致上納候えは、元金之儀は当分四五ヶ年も御貸居ニ被成下、年々

利金丈致上納、其内ニ知行所取箇之多年ニは元金五拾両も致上納、六七分通も上納之上は又々拝借奉願、御聞済ニも被成下候趣ならハ、漸々ニも取続立行之姿ニも相成可申候えは、利足之滞三拾両は如何様致候て成共当月中ニ調達、晦日迄ニは急度致上納候様、御受申上候段可然ニ候、併当年も不作之年柄ニ、内々臨時入用も有之候えは、御利足相滞候三拾両取箇之内より致上納候てハ必至ニ不立行候えは、当年新拝借五拾両之分無相違御貸付被下候様、此節より呉々も御内願申上候様ニと被申付候、猶又安池新太郎えも右之趣相達候処、主人同様之了簡被申聞候間、兼々申上置候通相滞候利金三拾両ハ、如何様仕候成共当月晦日迄ニ無間違急度上納可仕候間、右之御受書相認差上申候、此印書　庄三郎様奉始御同役衆中えも御披露被成下、何卒御聞済ニ相成候様御取計奉願上候、尤前文主人より被申付候通、当年之御拝借御願申上候て五拾両ハ是非々御貸付被成下候様、御聞済之段は此節より聢ト御内願申上候間、其段御含置被下可然様御取成奉願上候、何分相違無御座候様御含置可被下候、右之御受書別紙差上ケ申度、尚以後之儀御内願申上度、旁以愚書如此御座候、恐惶謹言

九月十一日　　坪内嘉兵衛家来　辻善兵衛

七里左六郎様

人々御中　　名乗書判

別啓申上候、先達ても御伺申上候坪内小兵衛より当屋鋪へ質入田地之儀、最早尊公様ニては御懸り合無御座候間、当方勝手次第ニ小柿村小兵衛方え引合取立候段被仰下候、就て御頼申上候ハ、先年尊公様より安藤対馬守様御領分切通村御陣屋へ御差留之御書状(判)至来之趣、御役人中より当方へ被申聞候えは、貴公様最早御掛り合相済候段被仰通被下候ハては、当方より懸合申候共若々取用不被申候ては、小柿村へ掛合申候共、御領主御陣屋より御差留之儀故聞請兼可申哉と奉存候、勿論当方より取掛り候ニも先御陣屋え罷出、小柿村小兵衛先達て之質入金子今以不相済候間、田畑相渡申候様御申付被下候段御願申込、従御陣屋御達之上ニて取掛り申渡奉存候間、御繁用之御中御苦労ニは奉存候え共、急々御陣屋へ御通達被成下候様一重奉願上候、是又若哉入組候ては甚以難渋ニ御座候間、御面倒之儀御頼申上候、何卒々々急々ニ御書状ニて御達被下候段、呉々も奉願候、以上

右十一日岐阜飛脚屋へ差出ス

一同六日墨俣宿安藤李重郎ト申者来ル、右は八郎四郎在勤之節少林寺御納所其節万事御勝手向御世話之事ニ候間、下地借用方も有之儀ニ付、手形致遣候てもくるしかるまじく、其上祖欽僧より後難之儀は無之受合候趣之書状ニ付、右断申候ハヽ気あじニも相抱候間、去々年証文認遣候所、右証文ヲ以中人那平儀李十郎方ニて金子致横借、ㅍ東島ニても同様之事も有之由、右ニ付去々年来

折々墨俣より使差越候え共取合不申候処、少林寺へも色々懸合候ト相見へ候へ共不行届ニ付、此節ニ至厳敷催促有之由□□処、少林寺借用ニても無之、那平横借之事故、追々那平□同寺より懸合之上加納表役筋へも内願有之候所、元来加納住居人ニても無之大垣之住人之由ニ付、大垣へも内願被申込候所、那平儀は三四ヶ年以前所ヲ被払、大垣之住人は離候由ニて、少林寺迷惑之筋ニ相成、然共那平へ被及懸合候所、少分は金子も出来致候由ニ付、墨俣表えも色々申延有之候所、毎も間違勝ニ付杢重郎当方罷出候、然所善兵衛儀水口より出津留主ニて其段申聞、小弥太致逢(応)対候所、兼て之米手形之儀先頃も以使申上候所、其後御沙汰も無之候間罷出候、何卒米御渡被下候様申聞候間、小弥太申答候ニは、今日は役人善兵衛儀慶事ニ付致他出候、両三日中ニは罷帰り可申候間、御出之趣申聞此方より御答可申候、先日も御使被下候節も同人他行ニて引取後委細申聞候所、早速少林寺へ及懸合、同寺より御左右可致旨申遣置候、御沙汰も無之哉ト存候、何レ善兵衛帰次第少林寺より成共当方より成とも御沙汰可申旨申聞候所、左候ハヽ宜御願申上候、米御渡被下御村方ヵニ御渡之御場所等被仰下候様申候間、何ニも善兵衛帰候ハヽ可申聞旨申遣候、右ニ付評儀之上手紙遣、左ニ

一筆致啓上候、秋冷ニ罷成候え共弥御安全被成御座珍重奉存候、然は去年新加納村少林寺え当屋敷より訳合御座候ニ付、米手形相渡候所、其節加納町ニ住居いたし候奈荷屋名平より少林寺え相頼、金子致借用度趣之由ニて金子手段不行届、被及断候え共、是非手段致呉候様再応相頼候由ニて、無拠筋ニ相成当方より相渡置候手形を以金子之手段相調候ハヽ、其手形貸可遣之引合ニ相成候由、去暮迄ニ元利共急度致返済筈ニて被貸渡候由、然処去冬返済方相滞依て当春より追々名平へ少林寺より返金之催促有之候ても不相済由、彼是入組候内ニ、其御地より少林寺え直之御懸合ニ相成、追々御催促被成候え共、下地は少林寺え借用之金子ニも無之由、実は名平へ借用之儀ニて迷惑、殊更此節少林寺も金子才覚之手段も行届兼候趣ニて、大延引ニ罷成候段、就夫追々御催促ニて御掛合被成候ニ付、仲人ヲ以日延之断等も被申入候え共、仲人之申口も相違ニ相成候由ニて、所詮少林寺え御懸合ニては不行届趣ニ御承知故歟、先達ても当屋敷へ御使之人相見え候由、折悪敷加納より在所へ用事ニ付罷越留主中故不懸御目候え共、御入組之容体被申置候て委細致承知候ニ付、此手形之儀は訳合御座候て少林寺宛ニて差入置候儀ゆへ、外より当方へ御懸合御座候ても難取扱筋有之候故、其其(マヽ)御地えは不及御沙汰候え共少林寺え及対談、何れニも訳合被相立候様ニと申談置候、将又先境は貴公様当屋鋪へ御出之由、折節用向ニて致上京又々留主中ニて不得御意候間、御申置之意合致承知候、然共前文申達候通、当屋敷よりハ少林寺限訳合ニて相渡候儀故、外々より御申込御座候ても当方より直之御懸合難相成筋合有之候故、乍気之毒御応体難相成候、依之御申置之趣意を以当方少林寺へ委細及対談、何分ニも被致訳立候様懸合候ニ付、今般新規仲人を以無相違様ニ懸合可申趣ニ付、先境御申置之趣及御答申候、此段御承知之上此仲人え聢ト御引合可被成候、所

詮当方へ直々御駈合之御了簡ニても其儀は行届兼候、此段御含置何レ少林寺よりも只今急度皆済は難行届候趣ニ相聞候、何分訳立さへ出来いたし候ハヽ、御気永御懸合之上ハ相済可申ト奉存候、右当方之訳合申述度旁荒増御承知何角御含之上御合為可被成ト奉存候、乍愚案書中ヲ以申述度如此御座候、恐惶謹言

九月十日　　辻善兵衛

安藤杢重郎様

一十月廿六日切通村森七兵衛方へ以使札内滞取扱返答申遣ス、左ニ

一筆致啓上候、寒冷相募候え共御揃弥御安全被成御座珍重之御事ニ御座候、然は先頃は遠方御出之所例ニ早々之仕合遺念之至ニ奉存候、且其砌御申聞被成候小柿村次郎蔵入組一件、先達て御陣屋え御達申上候ニ付、右懸り合之族共被召出御糾御座候処、右之者共より内輪取扱之儀立て相願候由ニて、従御陣屋御両所え取曖之儀被仰付、依之小柿村之訳ヶ合懸り者御内懸ヶ合も被成候ニ付、其趣意を以当方え御申聞被成候趣委細致承知、其段　主人えも申達追々致勘考候処、日外も鳥渡御噂申上候通、年々之利足相滞先達て出津之上段々懸ヶ合、滞分金六拾両致返納候様ニと申儀、其儀意(違カ)配申候えは又々御勘定所え御達ニ相成候趣、若又江戸表え御呼下シニ相成候てハ、時分柄と申村役共迄召連候ては、右之訳立相分り候迄何程之日数相懸り候哉難計、左候てハ心配之上費等も相懸り候ては此上之難渋ニ見替無拠御受申、先月滞之分致弁納候、当年分之利足期月十二月ニ拾五両致弁納候て、其上元金之訳立取究可申との義、当年一ヶ年ニ利足金都合七拾五両之弁納ニ相成申候、当屋敷も近年臨時事多ク殊ニ凶年打続、取箇減少ニて勝手向不模通之時節ニ、当年七拾五両弁納は何ニも引当テハ無之候え共懸合ニて無是非被懸趣致ニて致調達候、最早無程極月ニ相成候えは如何可相成哉と途方呉罷在候仕合ニ候えハ、此節次郎蔵方不如意之所当方え取立被及潰候義気之毒ニは候え共、当方之難渋ニは難見替候間、先去御申聞之趣意ニては御挨拶には御座候え共及御断申候、夫共此上趣法立直し内済ニも致度と申事ニも候ハヽ又々及御相談可申候、左様御承知可被下、右之趣惣左衛門殿えも御序之砌可然様御申通可被下候、右之御答申述度、以愚札如此ニ御座候、恐惶謹言

十月廿六日　　辻善兵衛

森七兵衛様

一十月廿八日出ニて松木雅楽之助方へ名古屋向ヶ返書遣ス、左ニ

貴札致拝見候、如仰寒冷之節候え共弥御安全ニ可被成御座珍重奉存候、然は当四月小林　御役所御用金之内七拾両当村へ拝借仕候ニ付、返納之儀来ル十二月七日迄元金之内弐拾四両ヵ利足共為致上納候様被仰越委細致承知候、尤先便ニ御頼申上候ハ、当年元金之内返納方難渋ニ付御貸居利足計致上納度段申上候所、御内伺も被成下候え共御聞済も無御座由、就テは元金之内三ヶ壱是非々々致返納候様被仰下候え共、当知行所当春以来照続田方植付も定例之時節ニは不致出来、時節後レ漸植付候程之儀、又候当年も干損ニて不作、秋気に相成候ても大風雨等ニて、田畑共実法悪敷凶作故

収納米相減、甚致迷惑候、村方も打続凶作故必至之困窮相歎候間、収納米取立も行届申候、追付御廻且御さ候えハ相分り可申候御事ニ御座候、依て元金三ケ一之金高返納難相成、甚以致迷惑候、何卒右等之訳ケ合可然様御取成被下、三ケ一之金高御減少御聞済御座候様、御取計可被下段奉願候、乍去皆々御貸居と申事無御座儀ニ候ハヽ、元金之内拾弐両と利足不残可致返納候間、是ニて何卒御聞済ニ相成様呉々も御取計奉願候、右丈之儀は如何様之趣談致候て成共為致持参可申候、左様御承知可被下候、勿論当年は始て拝借仕候儀故、元金三ケ一之分は御断申上間敷と心得居申候え共、何を申も前文之通少分知行所干損之上大風雨之難等相重り、誠ニ甚不作故、以之外取箇相減途方呉申候、併御大切之拝借金ニ候えは、何様差支候共元金拾弐両ハ致返納、御趣意相立候様取計申度奉存候、此段御勘考之上御聞済ニ相成候様奉希候

一当暮拝借証文仕替候ニ付、村方収納米書入証文并下拙より願書等、其外本家役人添翰等之迄御案文御差越被下致承知候、何分十二月上旬迄ニ取調為致持参可申候間、其節宜鋪御取計可被下候、右之段御賴申上度旁貴答迄如此御さ候、恐惶謹言

十月廿八日　　坪内嘉兵衛内　辻善兵衛

松木雅楽之助様　　在判

覚

一金拾五両弐分永百文　　前渡村

右は其村々拝借いたし罷有候永行直・渡海路御普請御手当テ御貸附、当卯年可納元利金書面之通候条、十一月廿日より廿五日迄ニ無滞上納可仕候、此廻状村下ニ口々令請印、順能相廻し、留り村より可相返候、以上

卯十一月五日　　笠松御役所

庄屋
年寄
百姓代
拝借人

一十一月廿一日ニ大津七里氏え書状差出ニ付岐阜飛脚屋造酒蔵訛遣ス、左ニ

一筆致啓上候、寒冷之節御座候え共弥御壮栄ニ可被成御勤役珍重之御義奉存候、然は去九月上津之砌尊宅え罷出候て坪内小兵衛横借拝借金之儀段々御歎申上候所、当知行所前渡村連印証文其御役所え差上置候儀故、何れニも当方へ引受返上納可仕筋ニ御座候段、呉々も御利解被仰聞、且又御利足滞金三拾両返上納仕候えハ入組之訳御聞済被成下、元金之義は年済ニて御利足壱割金ニ御打替被下置、尚又当年新拝借御願申上候えハ五拾両御貸下ケ可被下置、左候えは滞金三拾両ト当年分之御利足返納仕候ても、残金之五両ニて雑用利足等も相勤り候振合ニ被仰下候故、御尤之儀ニ奉存、乍愚案私勘考仕、左候ハヽ御受可申上候え共新参之下拙今暫ク日延御願申上、引取之上日那え一通申達候後御受書無程差上ケ可申、上納之儀は晦日迄御延引之段御願申上候御事ニ御さ候、依て九月

晦日滞金三拾両上納仕候処、其節御返書被仰下候は、子丑二ケ年之滞金ハ相済、去寅年之分拾五両不足之由重て拝借ニ上津之節持参上納仕候様ニとの儀致拝見候て案外仕候、右三拾両さへ上納仕候えハ滞金相済候儀と致承知御受申上候事故、先達ても申上候通当時暮シ方ニ差支候程之剋、少分之儀も金子之才覚調不申、容易不成儀ニ候え共種々之趣談仕、漸極月迄之工面仕調達仕候儀故、最早必至之差支ニて相調可申筋一向無御座候え共、是迄滞金之儀如何ニ相成候哉当方ニてハ篤と相訳り不申候所、従御役所被仰下候義故勘考仕候えハ其筋ニ相当候ニ付、段々趣談仕候え共、当年も知行所凶作ニて収納方も相減シ、下地不勝手之儀故、先達て之三拾両才覚ニ当惑仕、段々不拭工面ニて漸極月限之金趣談仕候て致調達候仕合故、其後色々致工面候え共迚も才覚出来不仕候、何卒御役所之以御憐愍当年より年送り返上納仕候様、厚ク御勘考之上御評義被成下候段奉願上候、此段幾重ニも御聞済被下、当年之新拝借五拾両御貸下ケ被下候ハては年送り之返上納も難相勤極難ニ御座候間、何分願之通御聞済被成下候様一重ニ奉願上候、さ様被成下候えハ来月上旬之内上津仕度奉存候、幾日頃ニも御貸下ケ被下置候哉、何卒急々日限之所貴報ニ被仰聞被下候段、是又奉願上候、尤自由ケ間敷義ニ御座候え共、中旬より末ニ相成候ては私在宿不仕候ハては収納方受払を相訳り不申、必至之難渋ニ罷成申候間、此段乍憚御推察之上、何卒上旬之内御貸下ケ被下置候様呉々も奉願上候、且又御役所之御憐愍御歎キ申上度事并当方難渋之訳ケは山海ニ候え共、悪筆不文言ニて御面倒恐入候間文略仕候、何分ニも願之通御聞済之程奉希候、恐惶謹言

十一月十九日　　坪内嘉兵衛内　辻善兵衛　昌信（花押）

七里左六郎様
人々御中

（表紙）
「文化五辰年記録
御用部屋　」

一善兵衛御暇願之事
一川並御普請相願候ニ付村方より絵図御願申上候事
一右御普請役御登ニ付新加納来状留
一新加納出火之事
一村役当番引渡之事
一大島雲四郎殿より以使者本家へ被申込候服部金一件
一御知行所制事方御本家へ御願被成度右一件
一外御山落葉願之事
一頬白坂北尾州様御境相直候事
一山東太平治方娘引取届之事
一大津宿場金九分金ト打替一件
一去冬大垣様へ被進候鹿毛駒御挨拶一件ニ付御礼御状留
一御馬場開一件
一岐阜奉行替りニ付初て御文通留
一三月廿七日頃江戸御発足ニて紀州様御通行ニ付願一件
一佐左衛門様再縁願一件
一朝鮮人来聘ニ付高懸役御触之事
一永井出羽守御在着ニ付御用人中より之書状留
一西郷村喜兵衛服部金出訴之趣ニ付懸合一件
一笠松拝借金御願込一件
一正入庄右衛門御陣屋へ呼出一件
一少林寺金子一件内願之事
一草井村円右衛門方証文書替一件
一上蔵様御慶事一件
一御屋根替一件
一博奕御触之事
一尾州寺西市左衛門ト申者先年借入り候村瀬幸右衛門金一件ニ付懸合始末

元旦

一御前御年頭御出、御供御倹約中ニ付御口二人・御中小姓二人・御鎗・御挟箱・御長柄傘・御草履取・合羽籠、薬師・常貞寺・上中屋天神・大野慈得寺・平島様・新加納御陣屋・少林寺・法光寺・片岡・三井様・久昌寺、御供之内壱人御使者相勤ル、平島ニて徳正寺武兵衛・新加納手代中・善休寺玄倫・庄屋多平治へも立寄祝義申入候事
一三井様御出、御居間ニて被仰置
一平島様より御使者松原牧之進相勤

九日

一定例江戸表へ御飛脚御差立、夫々え御進物左ニ
　式部様へ御看代金百疋、外ニ土瓶一ッ箱入

松之助へ白鞘小刀三本
奥様へ枝柿箱十五入　御姫様へ枝柿十ヲ入
小石川様へ干茸・さき干大根・枝柿七ッ・御看代南一・茶二袋・多はこ壱丸・小鋏一丁
藤五郎様へさき干大根・枝柿七ッ・足袋壱足・看代南一
長八郎様へ御看代南一・足袋一足
九郎様へ凌茸・笹原焼燗壺一ッ・さき干大根
清心院殿へ茶二袋　滝尾へ茶三袋
前野へ薄刃一・金杓子一　源右衛門様より干松茸
坂泉え剃刀一　古川へ剃刀一
滝八郎へ扇子二本　豊永殿後室へ茶弐袋
東北寺へ茶湯料南一　霊泉院へ茶湯料南一
其外は御状計り惣賃目
一同日加納安池様え御出、御土産在ニ、当年は別て御倹約ニ付
　鰯壱本・砂糖曲物代壱匁五分・内津茶一袋・干茸
　鉄之助様へ扇子ニ　新三郎様へ砂糖曲物同断・干茸
　藤四郎様へ砂糖曲物計
　善兵衛宅へ砂糖曲物・鯖壱本　御供侍之内小弥太被遣
右御出之節新太郎様より御咄御座候は、善兵衛義去冬相願候は、暫時御雇同様ニて御屋敷え罷出相勤候所、兎角心遣等分分（ママ）仕候えハ病気にも相障候間、首尾能御暇頂戴仕度、勿論故障之儀は聊も無御座候間、御執成申上呉候様沙汰御座候間、先々養生も仕候よふニ申聞候えとも、次第ニ老衰故か何角偏ニ相成、御用向等之儀ニ付存詰候えは難忘辛労仕候間、宿元ニて安心も仕度段再応相願候、尤差切候儀ニは無之、御替り人有之候迄は相勤可申候間、折々申聞候事故乍序御噂申上候旨、新太郎様より御咄御座候、尤御年頭御出も御座候て其後右体之儀等も被仰上義ニ候えとも、先々序故御噂御座候旨被仰聞候由、御答ニは、夫は差当り御迷惑ニも被思召候え共、無拠儀御勘考も可有之旨被仰候事

十八日

一旧臘前野半右衛門より内々申来り候服部金一件、来ル廿一日出ニ返書差遣可申積ニて下書取調左ニ
旧臘十一月廿六日出之貴札、十二月廿日着忝致拝見候、早速貴州可得貴意処、旧臘飛脚便りも無御座、仍之当春迚も彼是延引申候、此段御用捨可被下候、先々余寒強御座候所弥御堅勝被成御座珍重之御儀奉存候、然ハ大津拝借一件之儀ニ付御懸篤被仰下忝奉存候、右一件は不成一通　式部様ニも御案事思召候由奉恐入候、去冬中も申上候通、内々申頼利分滞金去冬迄六拾両返納仕、残て拾五両は当正月晦日限返納可仕旨ニて、去冬之所は延引御願申上候、此節取賄方申付置候所出来可仕模様ニて、調次第上納可仕奉存候、左候えは是迄之利分滞七拾五両皆金ニ相成申候上は、元金之所は年済御願申候えは相済候振合ニ御座候間、御安堵可被成下候、毎度御懸情被仰千万々々忝奉存候
一私共三人宗旨証文等之儀も御内々申上候所、御細書被仰下忝奉存候、右ニ不寄古形御取用之御存念之段御尤千万奉存候、於私共安

堵仕候

一旧臘大島雲四郎様より御使者能勢平左衛門ト申者御口上書持参ニて、御同人御知行所当国加茂郡迫間村住居御用人服部小平太ト申者不埒之品有之、此度永之御暇被仰付候由、右小平太へ御預金之内私方へ金子用立有之候処、一向返済も不致不始末之由ニて、右証文此度当国席田郡上保村百姓新左衛門と申者へ、右証文譲請可及出訴旨相聞候ニ付、御本家之義ニも御座候間御懸合御座候由、尤表立候儀ニも無御座候え共、御使者ニて被仰進候事故、式部様ニも得と御承知被為成候故、右等之儀如何之訳ニ御座候哉之旨被仰下承知仕候、右小平太ト申者は私知行所百姓七兵衛ト申者近縁之者ニて、先年より折々屋敷へも罷越心安仕候所、右七兵衛義ハ私方勝手向差支之節等は少分之儀共金子用立候処、七兵衛儀も元来不如意之者ニて、皆小平太方ニて致借用当方へも入金致候処、去ル戌亥二ヶ年暮方仕送り相頼、月々出金御座候処、戌年分は不残致返済、亥年分少々滞居候え共、一向返済不仕ト申儀は如何之訳ニて小平太より申立候事哉、尤受取書も所持仕候、全体右仕送り取極候節も、大島様御預金之訳□噂も無御座、小平太・七兵衛両人出金之由ニ申聞候間、既ニ証文名宛も服部小平太・永井七兵衛両人宛ニて、逢対之金子ニて御座候、御勘考可被下候、其上去々年之暮小平太難渋之由追々申聞候間、数年懇意ニも仕候故無拠致他借、金拾五両取次置申候所、去年中も利分差入証文仕替ニ□成、先方へ取次置申候、右御使者之御口上書之趣ニては一向返済も不仕候様相聞申候え共、金以相違之儀ニ御座候間、右取次金之訳ニて

も御勘察も可被下候、右申上候趣ニ御座候間御差含置被下、何分可然奉願候、右旁荒増申上度如比御座候、恐惶謹言

正月廿一日　　坪内名

前野半右衛門様

一筆致啓上候、余寒之節御座候え共弥御堅勝被成御座珍重奉存候、然は別紙口上書ヲ以奉願上候、何分可然御取成可被成下、御聞済相成候様奉頼候、右得貴意度如此御座候、恐惶謹言

正月廿一日　　名判

坂泉竜平左衛門様

前野半右衛門様

口上之覚

一私知行制事向之儀追々風儀等不宜、旁々以年々引方等も外村よりは多分ニも相当り迷惑奉存候ニ付、何卒御威光ヲ以風俗等も相直申度奉存候間、先年御願申上御聞済被下候通、当年より三ヶ年之間知行所制事方之儀於御陣屋被仰付被下候様仕度奉願上候、尤当時御無人中ニて別て恐入候え(共か)は此段奉願上度奉存候間、御序之節可然御執成被成下、御許容被成下候様奉願上候、以上

正月廿一日　　坪内嘉兵衛

坂泉竜平左衛門様

前野半右衛門様

同廿五日

一与頭喜藤次罷出申聞候は、私儀当番引渡候えは与頭役ニ御座候間、御内々御当役之思召相伺申度罷出候、余之儀ニも無御座、旧臘押

詰御願申上候外御山落葉之儀、其節被仰聞候は、被仰出候てより間も無之候間差控候様被仰聞候間、先々差控罷在候、然ニ当春ニ至候ても末々之者殊之外相歎、庄屋へは日々罷出申候え共差留置候、何卒御願申上度奉存候えは、御内々御当役之思召も相伺申度、御内々罷出候様申聞候間、善兵衛より申答候は、何レ御願申上候て御聞済ニ相成候事歟其段は難計候え共、先々御願申度との儀ニ候ハヽ、御願申上候て其上御取成も可申段申聞候所、左候ハヽ宜御願申上候段申聞引取申候、無程庄屋共三人相揃右一件相歎候は、末々後家やごめ等至て難渋仕候て寒気無凌御座候間、何卒是迄之通落葉被下置候様奉願上度、尤私共急度御請ニ相立、以後心得違之者無之様急度可申付候間、御取成相願候旨申聞候間、善兵衛答候ニは、其段御願可申候え共村方急度取〆候義を申立、以後相互ニ吟味いたし、御屋敷へも訴出候程之極りニ候ハヽ、御聞済ニも可相成候間、又々申出候様申聞候

同廿九日

一本郷庄屋元蔵・弥三七長根山御境目尾州方より新杭打候所、去年中追々村役共より申出候ニ付其段御願申上候処　御前名古屋へ被入候節坪内彦三郎様え御噺御座候て、雨宮善十郎殿へ向太田御代官小山七郎兵衛殿え御内願御申込被成候ニ付、聞届之上御境目之杭西より取付ニて三四本も打直候様子ニ、喜藤次より先達て申出候、其趣申上候ニ付、今般御知所地祭御祈禱熱田へ罷越候間、能席ニも有之候間、右一礼相済候様申渡可然段被仰出、則元蔵へ申

渡村方へ及相談候処、御礼ニ罷出候ニ付手品致持参可然段も申談候処、右之品物調候代之儀相談相決不申趣ニ申出候間、其段申上候所、未元形ニも不相成此度ニ限候事ニも無之候、去年中表立出願も致度段申出候故、従此方心付彦三郎様へ御頼御座候て、少ニても趣意相立候上ハ、此節及挨拶、猶又元形ニ相成候様申頼候ハヽ、此上も手之入候様ニも可相成哉ト申渡候所、村方決談不致、此方迄相歎候迎村方持前之儀は従当方取計可申儀無之、此方よりも何レ序ニ御挨拶無之ては御気済も不仕候事故、八重ニ礼物御上より御出し御座候儀は尚々難相成、弥々村方相談調不申候ハヽ、先延置可然旨被仰出候間、其段申聞利解申候え共、村役共も小前之不承知之儀は取計難仕旨申聞候間、先々延引ニ相成候

右は礼物何程之品ニて可然旨村役申出候間、差図ニては無之候へ共、御代官へ美濃紙壱束位、彦三郎様・善十郎殿へ小菊ニても壱束ツヽ進物可然旨申遣候所、村方存念は、右三所ニて南一位ならば相談も調候趣、其余分は御上より御出分有之候様致度趣ニ相聞候、然共地方御境目出入等之儀持(村か)方持前之事故、先々可成丈ケは村方諸入用引受可申筈之事ニ候、既ニ最初は太田御役所へ以添書出願致度趣ニも相聞候間、左様相成候ては村方入用も相懸り候事故、御内々御頼被成候事ニ有之候、右之差含無之不都合ニ付、先々延引ト被仰出候

二月十日

一辻善兵衛義病気ニ付在所養生之儀先達て御願申上候所、御聞済有之候ニ付今日下宿いたす

先月廿七日付御状昨二日相達致拝見候、余寒之節弥御堅固被成御勤珍重奉存候、然は旧冬御上津之節夫々御貸付之儀御模通も付、御帰村之処品能御片付有之趣ニて、此度金拾五両去卯年分利足として為御差登候段致承知候、且又其節御願込被置候九分金打替之儀、五ヶ年賦ニては当暮より御操(繰)合も六ヶ敷候間、拾ヶ年賦ニ相成候様被成度、右之通ニハ難出来候ハヽ先ツ当年之所は其儘ニて御差置、来巳年打替御願被成度候間、同役共えも申談相含可罷在旨、委曲御紙面之趣承知いたし、早速及評儀候処、無余儀御申立ニ候え共、拾ヶ年賦ニハ是迄類例も無之、其外取計方も差支候間難出来候へ共、段々之御申立之趣も無拠趣ニ付、格別之取計ニて八ヶ年賦迄ニは何用ニも可取計候旨及評儀候間、右之通ニて九分金ニ御借替被置候方、追々元金相減可然儀と存候、右ニ付ハ証文類御取調早々貴様御出津、猶又御申立候方可然奉存候、荒増之儀は御差出之庄屋代継右衛門へも申聞置候間、御承知被下度候、右之趣御報可得貴意如此御座候、恐惶謹言

二月三日　　七里左六郎

辻善兵衛様　　定明（花押）

同十一日

一大垣より御使来ル、右は去冬被進候駒為御挨拶足軽壱人・仲間四人・釣台弐荷来、御来状左ニ

一筆令啓達候、余寒候え共弥御無異珍重存候、然は先頃鹿毛駒一疋為御牽殊御乗立て由、過分之至存候、依之目録之通令進入之候、

恐惶謹言

二月十一日　　戸田采女正

坪内嘉兵衛様　　氏庸（花押）

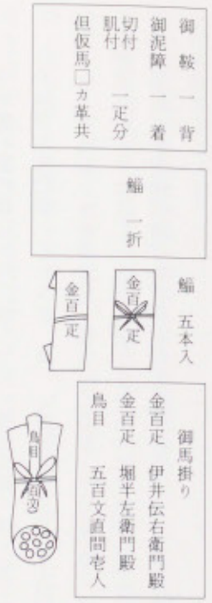
御宿所

一筆啓上仕候、春暖御座候処愈御安全被成御座珍重御儀奉存候、然は先達ては采女正方え御乗入之駒為御牽被遣之忝大慶被存候、随て此御鞍之儀は馬役内田喜四右衛門政央と申者領山ニて木品吟味いたし打立申候、尤右政央打立候鞍之儀は先達て　大納言様え被致献上候処御召鞍ニ相成候段御側蜷川相模守様より御達御座候、然処此度従　公儀朝鮮国え御鞍鐙被遣候ニ付、右品々打立候様御鞍師辻山城え被　仰付候由、依之細工之儀右同人より喜四右衛門え相頼越候故、去春出府被申付、江戸表ニて五背五足打立申候、尤其砌御馬術御師範諏訪部文右衛門様其外御馬乗役様方御立会　公義御召鞍之内より御撰出し、政長作之形を以打立候様被仰渡、則出来いたし申候、新作之儀ニは御座候え共、右之通　公義御用をも相勤候儀ニ付、右之写を以打立させ、態と塗等も不被申付被致進入候

一泥障切付其外一式は城下細工人え被申付候儀ニ御座候、誠ニ御礼被申述候印迄ニ御座候、書中を以も被及御挨拶候え共、尚又私より宜得貴意候旨被申付候条、如是御座候、恐惶謹言

二月十一日　　戸田四郎兵衛

坪　嘉兵衛様　　正恭（花押）



右御使之者へ吸物御酒鉢肴等ニ下平付茶凌(漬か)出し申候て足軽へ五十疋仲間四人へ三十疋ツヽ都合壱〆七百文遣ス

同十二日

先達て被仰付、御門前南へ新馬場被仰付候所、当村勘兵衛引受ニて立木相渡し手間余分金壱分上納之筈ニて致出来候、今日馬場開ニ付犬山御師範小野多門殿御門弟岩田十左衛門殿・柴山林平殿・長谷川新七殿・同午之助殿・宮川又作殿・吉田　殿御出、御銘々より御酒壱樽被上候、供弐人え役祝儀二十疋ツヽ被下候、犬山より栗毛・鹿毛二疋来、其外草井円右衛門馬河原毛・上奈良村常右衛門馬鹿毛・瀬部村嘉右衛門馬青毛・御中間伝助馬栗毛・御手馬青毛都合七ツ也、昼後より御開初ル、乗順左ニ

御前　源右衛門様　柴山林平　長谷川新七　長谷川午之助

宮川又作　小野多門

右ニて相済、是より次第不同ニ乗り候て相済、鳥の子小串銘々へ被下、御酒吸物等色々御馳走有之候事、右馬牽来り候方へハ御酒弐升ツヽ被下候事

同廿五日

一岐阜奉行替ニ付御文通左ニ

未得御意候え共一筆致啓上候、春暖御座候え共弥御堅固被成御座珍重奉存候、然は今般其御地御奉行被蒙仰候之旨目出度奉存候、右御祝辞得御意度如此御座候、恐惶謹言

二月廿五日　　名

青山儀左衛門様

別啓得御意候、御近辺ニ罷在候拙者共之儀、応分之儀も御座候ハヽ被仰下候様奉願候、以後無御隔意御文通等被下候様奉頼上候、以上

一同廿一日(三月)先達て江戸表へ御願被成候御知行所御制事方御頼被仰遣候所、今日返書来ル左ニ

一筆啓上仕候、追日春暖罷成候え共弥御安全被成御座珍重之御儀奉存候、然は先便被仰聞候御知行所制事方等之儀、御陣屋え御頼被成度御口上書之趣承知仕候、然ル処当時古田安兵衛・大塚甚三郎等引込、其上公事出入等多有之候ニ付、申上候てもとても御承知有之間敷奉存候間、先此度之義は御見合被成候方可然奉存候、御役人共も相揃追て被仰立候は、尚又可申上候間左様承知可被成候、右得貴意度如是御座候、恐惶謹言

三月十一日　　前野半右衛門

寛常（花押）

坂泉竜平左衛門

続望（花押）

坪内嘉兵衛様

追啓、早速貴報も可仕之処種々勘弁等仕延引罷成候、以上

同廿三日

一村役人元蔵・弥三七罷出申聞候は、今般　紀州様御通行ニ付大助ヶ相願候え共相叶不申、仍之下切村・松本村・平島村・三井村・当村五ヶ村申合セ新加納御陣屋へ御願申上、御添翰申請候て太田御役所へ出願仕度、依之御陣屋へ罷出候間、御届旁〻ニ御添書相願候旨申出候、尤今日御陣屋へ罷出、明日太田へ罷出度よし申候間、添書左ニ

以手紙致啓上候、暖和相成候所弥御安全被成御座珍重奉存候、然は今般　紀州様御通行寄宿方人足之儀ニ付、太田出張御役所へ出願致度、五ヶ村一統之儀ニ付当配下前渡村村役人共罷出申候、就は其御陣屋えも右一件御願申度、御聞済之上は太田御役所へ罷出申度之旨申聞候間、可然御取扱被成下候様仕度奉存候、右得貴意度如此御座候、以上

三月廿三日　　辻善兵衛

今尾周右衛門様

今尾茂左衛門様

四月六日

一村役共罷出、紀州様御通行ニ付御手当之儀願出候間、明朝罷出可申旨申遣ス

同七日

一村役不残罷出可申所、川方御普請清見分ニ付右場所ニ罷出候ニ付、弥三七・弥兵衛両人罷出候間、此間中願出候　紀州様御通行ニ付、村方困窮ニ付御手当願候間、為御憐愍別紙之趣被下置候之旨申渡、受書相渡、尤惣代呼出可申之所、御普請所旁隙間入ニも可有之候間、印形其方ニて取調差出候様申渡ス

差上申御受書之事

一銭百文　　人足方壱人分

一同弐百文　　伝馬壱疋ニ

右は今般　紀州様御通行

一七月八日平島より左之状来

□令披見候、然は同苗佐左衛門縁組之儀願之通就付候差越候来状之趣令承知候、恐惶謹言

六月十九日　　坪内式部

定儀（花押）

坪内嘉兵衛殿

坪内太郎兵衛殿

一七月十七日少林寺より以使僧申越候は、江戸表より当十五日着之所、留主中御見廻等之一礼申述、其上ニて申聞候は、兼ても御願申上候金子之儀無拠御本家へ内願仕候、仍之願書写〻江戸表より之御状御届申候、三井・平島へも御状参り候由申聞ル、左ニ

一凡金三百両余右は

坪内嘉兵衛殿事如何之儀ニ候哉年来不如意之由ニて、去ル亥年正月拙僧と北島村七兵衛方へ招寄、嘉兵衛殿名代西市場村赤座継右衛門と申仁罷越候て被申聞候は、勝手向之儀兼て不如意之所、此節ニ至り候ては他借等も出来不致、殊ニ公儀拝借金凡弐百七拾両程も有之、誠ニ必至ト差支致方無之ニ方ニ暮罷在候ニ付、勝手向引請世話致呉候様、先達ても追々長塚村浅野兵部も相頼申上候儀ニ御座候ト達て被申聞候え共、拙僧儀は出家之儀故手前ニ金子等所持不致候えは、中々以万事不行届候段再応相断候所、左候えは此上相続も難相成程之事ニ付、何分ニも六百石高引請夫々仕法相立候上金主等相頼候ハヽ、在家とは違出家之儀は格別之事故金主出来可申候間、是非引請世話致呉候様達て被相頼候ニ付、不得止事去亥年正月末より寅之年八月迄四ヶ年之間、諸方懇意之方ニて借用仕候て出金之上世話致候処、如何之存寄ニ候哉、年々急度元利共返済無之其当惑罷在候、坪内嘉兵衛殿儀未勝手六ヶ鋪は御座候え共、拙寺儀三百両も前渡え借入金引請候ては中々手談難行届、殊ニ甚六ヶ敷申聞金主えは、無拠少林寺什物等相渡し置候程之儀ニ御座候、其義も嘉兵衛殿え逐一申立置候儀ニ御座候、右ニ付拙僧江戸出府已前進追々相願、猶又口上書を以隠居晁州へ頼置、少林寺難渋之段申上置候処、先月十一日出ニ嘉兵衛殿より御答之口上書被差送候処、御気之毒ト被申聞候而已ニて、何レ少林寺え引請其金子御片付も不被成下候趣ニて、其上拙僧え勘考致候様申聞候え共、少林寺手金之儀ニ候えは随分御檀那之儀故勘考も仕候え共、諸方より借入金之儀故金主方中々承知不仕、於少林寺も致方無御座候故無拠御内願申上候、此儘捨置候ては御太切之御菩提寺住職も難相成候程之儀ニ御座候、此段御憐察被成下置、此上御本家様之御影を以、早速嘉兵衛殿少林寺引請金主方へ夫々訳立被致候様、偏ニ奉願上候、全嘉兵衛殿ト少林寺ト達て金子出入仕候儀ニは無御座候え共、外金主へ此上断之申様も無御座、少林寺甚以難渋至極ニ御座候間、無拠御願奉申上候、此段御差含被成下可然奉願上候、不相分儀共御座候ハヽ拙僧東北寺ニ滞留仕候間、御呼出シ御尋被下置候奉願上候、以上

文化五辰年六月日　　少林寺

御役所

七月廿二日村役共呼出草井村証文仕替、左ニ

借用申金子之事

一金拾九両弐分ト銀六匁は　　文字小判也

但シ利足儀は金壱両ニ付壱ヶ月ニ銀八分宛

右は御地頭所御要用ニ付貴殿御頼申候処御承知被下、書面之金子御渡被下慥ニ借用申所実正也、御返済之儀は当辰年十二月十日限ニ元利共急度御返済可申候、為後証借用一札依て如件

文化五辰七月　　各務郡前渡村与頭平右衛門印

同　惣右衛門印

庄屋　弥兵衛印
同　元蔵印
証人　宮川庄右衛門印
坪内嘉兵衛内　辻善兵衛
詰合無之ニ付無印　山本滝八郎印

草井村
伊神円右衛門殿

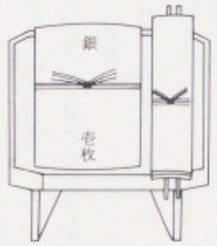
一右庄右衛門持参、当正月より之利足金壱両三分拾三匁余は当晦日迄ニ遣ス筈、其内米壱駄当月借入候様引合可申旨相談之上差遣候、前顕之通り致承知候

一七月廿二日山高三左衛門様出ニて、上藤様義名古屋山中鉄八郎様申方へ兼々御縁談御座候所、弥々御熟縁之由申来ル

一七月廿三日山高様御逗留ニて万事御懇合相済、当廿六日日柄能候ニ付御結納来ル筈、尤目録ニて御侍ニ為御持之筈、御支度之儀は聊御望無之、然共是迄御志つかひ持先旦那御遣物之由、右片付ニ少々金子入用ニ付、当日入用旁金三拾両御持参被下度、右之内五両は当日、廿両は当冬極月、五両は来年盆前ニても盆後冬ニても不苦候、誠ニ両かけ壱荷ニてよろしくと申事之由、御両親様へ扇子箱、妹方御二方へ揚枝差等、其外手遊少々用意致候由、右之趣ニ付先々金子手段之儀無覚束、庄右衛門呼寄及談事候所、二ヶ所計心当も有之由ヰ小弥太儀も心当有之、其上牛子村ニて先日造酒蔵ヲ以及懸合置候金子も有之、加納様ニても少々は出来可致趣故、御承知之御返答被仰遣候、尤廿六日御結納ニて翌廿七日御引移之筈ニ御取極故、何角御用意は明日名古屋ニて御調之御積、翌廿四日山高様御同道ニて御前名古屋へ御出、御供滝八郎跡より金子等為持御迎ニ遣ス筈、明廿五日御帰リ之筈、然所廿四日昼過より大雨ニて廿五日も同様、殊更四ツ頃より北風烈敷、中々御買物も難出来、仍之廿六日暮合頃漸々御帰り

一七月廿六日七ツ頃名古屋より御結納、使服部（ママ）ト申者来ル、目録差出ス、左ニ

二寸程
もくろく
一家内喜樽　一荷
一寿留免　一台
一多以　一おり
以上
一寸七八分



右使へ三匁札遣、仲玄へ弐匁札遣ス、銀壱枚代札三分包来ル

右使之者御酒御料理被下候て相開候、下宿勘作方へ申付、明日は直様下宿より相開候筈

一右御祝儀ニ付御進物左ニ

一安池様より延紙十帖

一長谷川平馬殿（犬山）より指樽一荷諸白弐升

一小野多門殿より指樽一荷諸白弐升

一祐左衛門より小半紙壱束　一庄右衛門大半紙五帖

一小弥太酒壱升　一諦定より半紙壱束

一七之丞母より足袋一足　一与兵衛より半紙壱束

一少林寺より紙ヰたはこ入　一竜見常貞寺より酒弐升

一村役共より酒弐升　一桃春院より扇子ニ風呂敷

一山高三左衛門様より御酒御看

右之通献上、村役へは御酒被下候事

一同日御供方ヰ昨日御結納来り候御祝儀申上候様申触、尤八ツ揃・七ツ御立ト申触候事

一七月廿七日吉辰ニ付内々御客分ニ御引移、御先方之儀は御願も無之候由、然共御当方様義は廿三日以御使者御願書御添書之儀御両家様へも御頼被仰遣候、ヰ御結納日限・御引移日附等も被仰遣候、御結納之当日御両家様とも御招も可被成所、去年俣五郎様御結納之節三井様御出も無之、殊ニ御断も無御座候間、今度は先々御止被成候、尤一向急之事故不行届旨被仰立御断被仰遣候、加納様えは御出も被下候様以御使者御風意聴旁被仰遣候え共、当月は御月番故御地行難出来御断ニ付、当日は御内計ニて御祝之御積り、廿三日ニは御上藤様御鉄漿御祝有之

一七月廿五日御陣屋へ御書状御差出、尤御両家様御添書は平島より直ニ御陣屋へ御差出之筈。

覚

右は私妹縁組仕度奉存候、此段奉願上候、以上

尾州御家中　山中鉄八郎
坪内嘉兵衛印

月日

書判

坪　式部殿

右は奉書半切、上包直紙　縁組願　御名　如此

一筆啓上仕候、然は私妹縁組仕度別紙ヲ以御願奉申上候、願之通被仰付可被下候、右奉願上度如此御座候、恐惶謹言

七月廿五日　御名

御名東御書判

坪　式部様
参人々御中

一七月廿三日平島より使来ル、少林寺一件左ニ　御名様申上候　坪内佐左衛門　坪内太郎兵衛　切封以手紙啓上仕候……然は尊公様御方え少林寺より繰入金御座候処、残金相滞御返済無御座ニ付、此間江戸表ニて本家へ被相願、依之私共え申参り候ハ、少林寺事ハ御菩提所相続行届かたく之段被相願候ニ付、私共よりも尊公様え御相談申上、御返金御座候様申参り候処、私共参上仕早速可申上処、両人之内不快之者又ハ差支之儀も御座候付、得参上不仕形候えは御無礼ニも相当り、殊ニ本家より之儀気之毒仕候、併御面上ならてハ難申上、彼是申内余り延引相成候故、先以手紙申上候、近内両人共参上仕候て委細申上度、如此御座候、以上

七月廿三日　坪内太郎兵衛
坪内佐左衛門

別紙申上候、江戸表より申参候一件連名返書儀は、受一通り認メ

新加納陣屋へ廿五六日頃ニ差出可申哉迄(とか)奉存候、心事御面上迄申残候、乍末殿方様へも宜奉願上候、三井より申上候、当方何れも御伺宜申上候様申聞候、以上

右一件縁組願書差出候ニ付先日坂泉・前野より之返書遣左ニ

被仰付候ニ付御書取之御答左ニ申上候

一今度少林寺長老被罷下候所、同寺納所之頃去亥年より相頼勝手向世話御座候所、寅年ニ至任職御願申上　御聞済ニ相成候上は、後住ニも相成則転位上京ニ付、何角世話向之儀も是迄之通り難行届、依之断ニ付無拠儀ニ奉存候故、外金主承合候えとも差当金主も無御座、如何可致哉ト縁家安池新太郎方へ及相談候所、差当り了簡も無御座候え共、月々入用之儀はヶ成ニ力ニも可相成旨申候え共、差当り少林寺残金丑年元利より〆高弐百四拾両余ニも相成候ニ付、中々以右金子之儀冬至難行届、公金拝借返納分ヵ暮方引取、其余は御寺へ差入可申、右御不承知ニ有之候えは必至難行立旨、新太郎より少林寺長老え御談申候所御承知ニ付、寅年之春より八月迄御寺より御出金弐拾両余ニ候所金弐拾六両余相渡申候、去卯年暮ニ至候ては三百両余之元金内五拾両外取次分引取、残て弐百五拾両余之所へ金三拾両余相渡申候、当辰年春中追々御寺御難渋之由被申聞候間、又々山林払拾五両差入申候、尤去冬以来大津拝借滞金七拾五両差出、誠ニ以必至と差詰り、中々以他借之分えは挨拶ニも難及候え共、不成外御寺之儀故三拾金余差入申候儀ニ御座候、当春迚も同様差支之中ニは御座候え共、御難渋と御座候ニ付乍少分も差入申候、全以如才之取計ニては無御座候え其、去年以来外横借分百両引請ニ相成、其上利足滞金七拾五両調達仕候上之儀、御勘考可被成下候、当地出立之節も催促御座候へ共、収納時ニは無御座金子手段難行届及御断候所、左候ハヽ御寺引受借用分夫々え相廻り当屋敷より及断可申旨被申聞候え共、是以筋違之儀先方ニても聞受申間敷旨及答候所、其後同寺隠居被参被申聞候ハヽ、今度住寺江戸表へ下り候ニ付以書付相願候、右之訳は当盆前五十両・冬ニ至り百両返済致候様被申聞候、右不承知ニ候ハヽ江戸永逗留之積ニ有之候間、返答申聞候様被申聞候間、追て勘考之上可及御答旨申置、其後返答申遣候ニは、当盆前五十両・暮ニ至百両返進可申之旨被仰聞候え共、御存之通盆前収納ト申候ては麦ヵ金納ニて漸々廿両余ニ有之、中々以五十両ト申金子相調不申、暮ニ至候ても百両ト申金子は手段難行届候間、御勘考可被下旨及答候、其後何之沙汰も無御座候所、此節帰寺ニ至り右一件御内願被申上候由、弥々御内願ニても致候ハヽ今一応其段可被申聞儀ニも奉存候所、無其儀御内願被申候儀甚以恐入奉存候、元来不成一通御寺柄之儀、殊ニ御懇意合ニて御願申候儀ニ御座候えは、不実之取計仕候存念ニは無御座候えとも、右申上候　公金引受旁々ニて不相求右之仕合ニ御座候、何分此上とも不打捨一埒仕候様取計可申候間、此段宜被仰上可被下候、奉頼候、以上

辰七月廿五日

坂泉竜平左衛門殿
前野半右衛門殿

名　印

右御返書ヵ御縁組御願書共廿五日小弥太持参致、御陣屋ニて当番今尾茂左衛門ニ渡ス、ヵ時候御口上相述来ル、廿七日旦那妹義名古屋へ客分ニ差遣申候、表向引移之節御届ケ可申上候え共、先々内々之儀故御当番中迄御咄申候様被申付候、然共願之儀は今日差出申度、右書状は只今致持参候之旨申述候事

一七月廿八日御客分御引移ニ付、昨夜より御上下ふせり不申、何角御用意被仰付、尤兼ては昨日之御引合ニ候所、不成就日ニ付御延引ニて今日ニ相成、八ツ時人足共呼らせ申候、弁当之儀は岩倉九ノ坪より罷帰候者へは一度分米弐合五勺ツヽ相渡、名古屋迄之人足ニは五合ツヽ相渡候事、正七ツ半頃御道具御先へ遣ス、人別左ニ

簞笥　長持　釣台　才領堀半右衛門

右出払暫間有之御出立

御挟箱　御徒士　御供頭 山本滝八郎
同　同　御長刀　御駕籠　御中小姓 山本小弥太 ＊

＊御草履取　御茶弁当　御合羽籠　押　女中駕籠

一右御立ニて御使者間ニて御乗輿、跡志さりニ御門迄かき出ス事、草井渡場ニて暫手間取夜明申候、御先荷もいまた越不申御一緒ニ相成、一船先へ越、夫より無故障御渡舟有之候事、昨日草井村渡船頭へは為御祝義酒代金百疋、但米札ニて被下為持遣置候、御途中岩倉（ママ）寺ニて御休足、御同勢は勝手に茶屋ニて休足之事、半右衛門ニ申付、御道具は巾下より御堀際ヲ南へ廻り、南片端を七軒丁迄参り、下へ下り、杉の丁美濃屋万蔵方ニ御道具品々調有之ニ付、右方へ立寄取調、夫より呉服丁ヲ上ミへ上り片端筋ヲ北へ廻り、東片場より力助ヲ真直ニ参り、山高様御屋敷へ立寄り、只今御道具参り候、直様先方御屋敷へ可参哉御差図可被下旨申入候所、直様参り候様被仰聞候、先方御屋敷存居候哉ト御尋御座候所、存シ不申旨申候えは御仲玄一人御案内ニ御附被下、夫より行列相糾御簞笥・御長持・御化粧簞笥・御釣台ト相ヵ、御屋敷へ釣込候頃は九ツ時過ニも可有之存候由、御玄関ニて御目録相渡御道具釣り上候、直様上り候様御侍中挨拶ニ付御広敷より上り候所、御玄関次ニて御酒被下、御料理一汁三菜ニて被下候て致頂戴、夫より石谷又十郎様・山中鉄八郎様ニ御目通致し候て、開之節為御祝義　被下候、釣人足えは御玄関ニて同様御酒料理被下、御引弐十疋ツヽ被下候事

一岩倉迄参り候人足、藤兵衛・治右衛門・伝助・山東喜左衛門・勝蔵、当方八ツ頃相開来り候

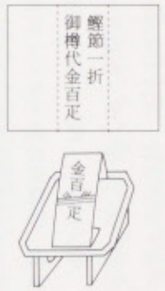
一九ノ坪迄参り候人足、甚三郎・山東儀蔵・林左衛門、七ツ過頃相開来り候

一山高様御屋敷迄御送り込人足

一山中様御屋敷へ道具持込候人足

一山高御立寄御休足ニ付御土産物左ニ

一扇子箱　一台	
一御菓子　一折	御持参也、御当方様より何角御世話ニ付、為御挨拶以目録金百疋、鰹節一折被遣候
一半紙　弐束	翌廿九日御使者
以上	滝八郎相勤候筈



右之通被遣候、山中様えは兼て御引合ニて左之通

覚

一扇子箱　御隠居様
一鼻紙　同御奥方様
一御菓子ヲ　御妹子様
紙包　御二方様
以上

上之通り、但紙包内女扇子四本・楊枝差弐ツ被遣御当方様より鉄八郎様へ鰹節一連被進、御口上ニは、不思義之儀ニ付御問柄ニ罷成候上は幾久敷御出会可申、就て為御祝儀聊御祝鰹節進上致候由申述候事

外ニ書付山高様迄御目ニ懸候、左ニ

覚

一挟箱覆紐共　一乗物ヲ蒲団
一長刀袋紐計　一長持油単
一簞笥油単　一櫛簞笥油単
一釣台ヲ油単

右之品送り人開之節一緒ニ御添被遣可被下候、以上

七月廿八日

山高様へ御着八ツ頃ニて、下供迄御茶漬被仰付御叮嚀被成下、夕方湯迄被仰何置有之候事、又々夕方御料理被下候事、右之内上藤様ニは御髪御上ケ直し等有之候由、御習三味線ニて御賑ニ有之候、夜ニ入五ツ半過頃山中様へ御引移、御土産物等取調差上候、御祝盃相済開申候、滝八郎・小弥太米札五匁ツヽ、下供へは弐十疋ツヽ被下置候事、人足六人雇山高様より連候事、万事山高様御世話、藤村様御門前罷通り候ニ付御口上被仰遣候、今日御立寄可申所、内々客分ニ差遣候事故、追て為伺可申候間、御門前乗打之儀御用捨可被下旨被仰遣候、夜中五ツ過頃皆々開、中島屋藤左衛門方ニ致止宿候て、翌廿九日山高様・山中様も御伺申上、御目通被仰付当方へ開候、御道具等受取罷帰り候、御屋敷へは夜五ツ過罷帰り候事

八月五日

一大屋根葺替ニ付竹かや等用意致置かや五百九拾九貫三百目縄拾六束人足三十人翌六日拾壱人両日ともかゆ被下候

八月九日

一御末様御引移首尾能相整候ニ付、御内祝赤飯被仰付、配方左ニ

平島様　三井様　少林寺　永田清左衛門　安池様　善兵衛方　小野多門殿　長谷川平馬殿　桃春院　常貞寺　久昌寺　明智庵　山本祐左衛門　宮川孫市　山本小弥太　堀半右衛門（但留主ニテ持帰ル）　永井七之丞

三組庄屋　苅谷竜見

米三升　糯米壱斗弐升　ささげ弐升

（表紙）

「文化六巳記録
前渡
用部屋
」

一□□礼延引之事ヲ御目通人数相定事
一□□御勝手方相談之事
一岐阜材木町山本竜助ト申者勢州金申込之事
一勢州松木雅楽之助へ之書状留
一笠松御貸附金拝借願込之事
一当村甚三郎方怪敷事有之ニ付見廻候所、博奕体之儀ニ付御陣屋へ御差出ニ相成候事
一大釜樋損候ニ付見分之事
一道直し出役之事
一京都白木屋ヲ長興院懸合書状留
一大竹作右衛門儀旧冬江戸表ニて内願之趣御返書留
一造酒蔵参宮之事
一御山内外御払之事
一平島御婚礼
一庄右衛門呼出、草井村文右衛門取扱一件ニ付下宿入用滞一件
一御下屋敷吉兵衛相願、守り被仰付之事
一矢熊山山東組より御願申上新山御聞済之事
一少林寺浅野兵部金当金渡之事
一去暮借置候村方三両金証文願上候間認遣ス写
一橋板才廻之事
一出高地面内橋之事
一下切村と当村替々橋之事
一金十郎田御引方之事
一御囲土居松苗植付之事
一庄右衛門江戸下リ一件
一祐左衛門・庄右衛門ト兄弟離届一件
一安池様御番頭被仰付候ニ付御祝儀御使者一件
一大釜入用出銀之事
一□□一件（裁）戴許之事ヲ口書写
一松平友松様御誕生触
一去辰年川並御普請弁金之事
一犬山妙海寺書替証文之留
一京白木屋金先達て之断状差戻スニ付少林寺より演舌之事
一祐左衛門・庄右衛門離別願和睦之事
一掘抜井戸之事
一御勝手方之事
一加納様御参府ニ付来状留・同返書ヲ安池様御供
一祐左衛門病死一件法会留ニ有之候
一石河伊賀守殿病死悔状留
一村方借用証文留
一雨乞之事権現籠

一二度目雨乞天神へ籠
一京都白木屋金法光寺懸合一件
一三度目雨乞多度権現代参之事
一お末様御祝儀配当座頭被下物之事
一御茶の間そよ御暇ニ人代之事
一四度目雨乞之事
一公儀より御関所破御尋者之事
一御知行所一統勢州へ雨請ニ付御陣屋より紙面留
一五度目雨請之事
一山東方植付惣村方手伝一件
一加納宿御足軽使宿二文字屋長七不如意ニ付御願ニ来ル一件
一村内田方耕作見廻之事
一御勝手向庄右衛門へ被仰付候ニ付苗名帯刀御免之事
一盆前御仕廻金村役へ被仰付候事
一西市場村継右衛門倅仲右衛門願之事
一河北村与平治借用金取扱之事ニ証文控
一芋島村清左衛門借用金取扱ニ証文控
一六度目雨請之事
一国役御弁金差出候ニ付勘定書留
一安池様御口入ニて金子御借入証文写
一村役弥三七・山脇角四郎証文留
一奥様御安産一件
一去冬年済ニ相成候村瀬金寺初懸合一件

一御馬御払
一御本家お姫様坪内徳三郎様へ御再縁一件
一七夜御祝儀一件
一七度目雨乞之事
一加納御郭内火災ニ付御見廻御状留
一三宝院様御内より之来状ニ返書留
一大野村百姓伊助所払ニ付廻状留
一御屋根・御畳替之事
一若殿様御誕生御祝御酒村方へ被下候一件ニ御宮参之事
一庄右衛門三州行
一法光寺上京ニ付京都一件
一所々証文留芋島村方大佐野芥見留
一御勝手向御借用方引受之事関丁山田源四郎・岩滝要助
一犬山成瀬様御隠居御家督ニ付御祝儀御使者一件
一検見出郷
一同犬山より御返礼御使者一件
一御借用方仕分京都白木屋引受ニ付武右衛門・庄右衛門ニ少林寺和尚上京一件
一松木雅楽之助より御林金返納之儀ニ付来状二度分
一三井御縁談ニ付御願添書一件
一少林和尚・武右衛門・庄右衛門帰参ニ付御勝手方一件
一坪内徳三郎様御改名権之助様へ御縁組御祝儀御使者
一加納安池様御安産一件

一笠松元締面々へ御使者
一正月（吉歳礼）二日定例御知行所庄屋組頭百姓御年頭申上候処、昨昼頃より大雪ニて今日も不止、壱尺余も積り候ニ付見合候え共不罷出、漸々昼過佐吉を使として村役共より申越候は、今日は何レ大雪故壱人も不罷出候間、明日ニ被成被下置候様申越候間、甚以不都合ニ付村役共罷出候様申候所、無程罷出、例之通御年礼帳御扇子二本致持参申候間、余リ自由ヶ間敷儀故御請無之旨申聞、利解申聞候は、全体村役共不行届、御目通え罷出候事は一年一度之儀ニ候えは、譬如何様之事有之候共罷出、御祝儀可申儀ニ候所、以使御断申上候条不得其意儀、如何之心得ニ候哉ト相尋候所、御差度蒙り候てハ恐入候段申候て、何レ御礼帳は御当役御預リ被下候様達て相願候間、先々滝八郎預リ遣候所、勘六・庄右衛門相頼候由ニて即刻御詫申上候間、早春之事ニも有之御聞済ニ相成候、併夕方ニも相成候間、明早朝罷出候様申聞遣候、是迄御目通へ出候者も不同ニ候所、今年より相改、以後右之人数より外御目通不相成、尤来年より正四ツ時限相揃、若右刻限相洩候者は重て御目通不相成旨申聞遣候、翌三日朝罷出候者左ニ

庄屋 弥三七　同断 元蔵　同断 弥兵衛　与頭 喜藤次　同断 惣右衛門
同断 平右衛門　頭百姓 半兵衛　茂兵衛　清五郎　弥七
紋七　次郎右衛門　八郎兵衛　吉兵衛　佐兵衛
源四郎　利助　喜兵衛　五郎右衛門　清六
彦市　茂七　源六　庄左衛門　与兵衛
文蔵　作平　清次郎　次右衛門　佐太郎
久米蔵　久蔵　常七　喜代七　林左衛門
甚太郎　七左衛門　銀蔵

〆三拾弐人村役六人都合三拾八人也

一正月（与平治）六日庄右衛門尾州河北二ツ屋水野与兵衛方へ参ル、右は去年中芋島村武右衛門・庄右衛門引合ニて御勝手方御振向ニも可相成ニ付、今日先々金子少分ニても請取来リ候様被仰付参リ候所、金子弐両受取来ル、与平治義九日ニ相伺候様申聞候由申聞候
一（同断）正月九日与平治罷出ル、為土産黒砂糖・鰹節弐節包・扇子弐本献上、御逢有之、芋島村武右衛門も来リ一緒ニ御目見、庄右衛門御台所まて来リ致応対、御勝手向之儀も先達ては、今枝喜蔵方金子滞有之分を年済ニ致候ハヽ、御勝手向御世話も可致旨申候え共、右ニてハ不実ニ付其儀は相止メ御世話可仕、尤何時ニても宜仕送人等御座候ハヽ、思召ニ御替被成候ても不苦、兎角実意之御世話可仕、滝八郎抔廻リ縁ニも候えは悪敷取計は仕間敷旨申候由、当人は勿論武右衛門よりも其段申上候、仍之先々取極之儀は不行届候間、先々今日は早々引取申度、武右衛門義は少林寺用向ニて江戸表へ明日罷下候間何角閙敷候間、罷帰リ候までは月々御入用之分は与平治より出金致候間、御差支は無之旨申上、御次へ下リ御酒等被下候て引取候事
一（岐阜金）同月十二日岩手村伝右衛門来リ、御目通之上申上候は、今日塩田より急ニ罷越候、其訳は長松村佐兵衛ト申者塩田迄罷越申聞候は、前渡様ニは金子御入リ用ニは無之候哉、イビ村へ金子千両借り請

候所、五百両は貸附候え共五百両は不用ニ相成、何共困リ入申候
間、岩手竹中様へ貸付可申ト態々参リ候所、竹中様ニも御入リ用
ニ無之由ニてすご〳〵罷帰リ候、今日加納駅亀屋え参リ、今夕六
ツ過頃迄右之所ニ御待申上候間、若御入用ニ候ハヽ是より直様前
渡村へ参リ此段申上候て、今日中加納亀屋迄否被仰遣候とも、又
は明日ニ相成候ハヽ岐阜東材木町山本竜寿慶ト御尋候て、右方へ
御音信被下候様ニと申候間早々罷越し候、御入用ニ無之哉ト申候
間、右等之儀は是迄も有之候へとも、取極候段ニは相違之事而已
故取用候事ニは無之候え共、一応相尋見候方可然ニ付、小弥太被
仰付即刻加納亀屋へ被遣候所、山本竜寿慶ニ致対面相尋候所、右
は勢州御林金ニて五百両遊居候ニ相違無之、御借リ受被下候えは
難有由申候、尤御地頭様御名前、御役人・村役共御師性名、村高
等御調被下、明日御沙汰御座候えは、夫ヲ以懸合申候えは相済候
由、当年は利足一割半、来年よりは一割ニて宜候由、其外謝礼等
少も入リ不申由申候え共、拾金もロ入人へ被下候様とのロ振りニ
御座候、尤伝右衛門ニも逢、委細此方様様子も承知之趣ニ相聞候、
夜五ツ過罷帰リ候（オフ金）

一同十三日滝八郎申付、岐阜東材木町山本竜助方へ遣候所、右は手
習師匠之由、右一件咄承候所、岡田将監様え五百両、竹中吉太郎
様へ五百両、都合千両申込候所、御不用ニ付何共致迷惑候由、願
済之上は坪内様ト御名目替リ候ても不苦、何レ急々伊勢へ相懸合、
当月下旬迄ニは否御沙汰可致由申候、尤是迄右体之世話被致候哉
ト相尋候所、一向世話等致候儀無御座、今一人間ニ世話人御座候
由申聞候、愚案ニては埒明不申儀ト存候え共、宜頼候段申置罷帰
リ候（イヤ金）

一同廿日名古屋へ便リ有之ニ付、勢州松木方へ書状を出ス、左ニ
以飛札致啓上候、余寒強御座候え共弥御安康被成御座珍重奉存候、
然は旧臘上納金之節は何角預御世話忝奉存候、其節貴公様へ差入
候証文下書取失候ニ付認不差上、今便相認差進申候、御落手被下、
去々年差入置候証文御引替可被下候、且又善兵衛不詰合申候間右
証文ニも印形無之候、此段御断申候

一当年御貸付拝借相済候ハヽ、何卒以御世話金百両計拝借仕度奉存
候、右御願込之儀は当方より村役人ニても差出可申儀哉、何分可
然御差図可被下候、春中ニも拝借相成申間敷哉、是又致承知度奉
存候、急々　御役所へは貴公様より御内願被下、御聞済ニも相成
候ハヽ早々為御知可被下候、幾重も〳〵宜奉頼候、右之段厚御頼
申候様嘉兵衛申付候間旁々如此御座候、恐惶謹言

正月廿日　　山本滝八郎印
松木雅楽之助様

一同月廿七日笠松御役所へ拝借金御願込ニ付口上書、左ニ（笠松金）
口上之覚
余寒之節御座候え共　太忠様弥御安泰被成御座珍重之御儀奉存
候、且御役所御貸付金之内百両拝借仕度申旨、知行所村役人共よ
り願出申候、何分　御聞済被下候様仕度、以使者此段御願申上候、
御序之節可然被仰上可被下候、以上

正月廿七日　　山本滝八郎

右相勤候所御役所引候ニ付、御役所えは罷出不申、元締四人え相
廻リ御使者相勤候、角屋幸七案内ニて門口迄参リ、申込候て引取
申候、明後日又々早朝罷出候筈ニ申置引取候
一同廿九日早朝罷出候所、幸七案内御ロ上書相渡候所、元締田辺新
兵衛罷出被申聞候は、先御郡代之節は其方切ニて相済候え共、当
郡代ニ相成候ては御壱分ニては不相済候間、御本家御役人中より
印形有之候様御取計可被成、去年平島村へ貸附ニ相成候も右之振
合ニ有之候間、其段御心得可被成旨被申聞候、并高百石ニ付拾両
と御定之由被申聞候事（京白木）

一同廿八日京都白木屋へ書状ニて懸合候様、少林寺より申来り候間、
庄右衛門認、則遣ス左ニ
一筆致啓上候、未春寒御座候え共弥御安清被成御座珍重奉存候、
然は先達て新加納少林寺より当方屋敷へロ入御座候て御調達被下
候金子之儀、元御勘定相打続候知行所凶作ニ付不行届、御渡方ニ
心配仕居候所、此度御手代新兵衛殿御差下シ御ロ達之趣、并長興院
御方より少林寺え之御紙上共委細承知、御尤之御儀ニ奉存候、捨
置候訳ニては無御座候え共、収納方存外相減、金子手段先手違ニ
相成、旧冬致方無之儀ニ御座候、右新兵衛殿御出ニ付、少林寺よ
り不行届取計方之段懸合有之、差支候様子同寺へ相歎申候所、左
候ハヽ両年分利足差加、元足共組込ニて今年明年両年ニ皆済金之
儀御頼可然ト申事ニ御座候え共、足金さへも不行届差支候勝手向、
少林寺了簡御引合之外御勘弁も被下候様ニ仕度、其段新兵衛殿え
も於少林寺御懸合ニおよひ候所、御承知無之儀、何レ少林寺御引
合通ニ申遣候様可仕ト申御事ニ御座候、何分右之訳合此上御勘弁
も被成被下候様仕度、尤当方より出張も仕、御勘弁筋之儀御頼可
申儀ニ奉存候、右之段為可得御意如斯御座候、以上

正月廿八日　　山本滝八郎
白木屋　　辻　善兵衛
善兵衛様

尚々本書之通御承知厚御勘弁之段奉頼上候、以上
未得尊意候え共一筆啓上仕候、未春寒厳敷御座候え共弥御安康可
被成御座珍重奉存候、然は先達て御加印被成下候白木屋金之儀、
打続知行所凶作ニ付不勘定ニ相成候所、此度白木屋手代中被差下、
尤少林寺御細面御差添有之、御ロ上之趣旁委細承知仕候、全御如
在意取計申候儀ニてハ無御座、前文之通知行所不作故収納方相減
候ニ付、金子手段手筈違ニ罷成致方無之候所、新兵衛殿御出被下
候ニ付、少林寺より厳敷掛合有之候え共、御渡金可仕儀不行届、
右故少林寺より申聞御座候儀は、両年分利足差加、元足組込今年
明年両年ニ皆済金ニ取計可申様、其段引合可申旨ニ御座候え共、
足金さへも得御渡シ不申候内輪之儀、此上も御勘弁被下候様御頼
申度、其段新兵衛殿へ御懸合申候所、御承知と申儀無之、何御当
寺より御談事御座候通リ申遣候様可致旨ニ御引合申候上ハ、新兵
衛殿より其段御申入御座候儀ト奉存候、何分右之様子ニ御座候え
は厚御勘弁被下候様仕度奉頼候、尤当方より罷出御勘弁筋之儀御
頼可申儀ニ奉存候、右之段為可得貴意如此御座候、以上

正月廿八日

長興院様

山本
辻　両人

右書状認少林寺へ遣、少林寺より京飛脚へ差出被呉候筈
右書状少林寺より差候紙面と趣意違之由ニて、四日頃両通共少林寺へ向返る

一甚三郎二月六日夜怪敷儀有之ニ付、小弥太一端引取之上又々罷出、右之段申上村方廻リニ罷出候所、無故障罷帰リ候所、又々帰りかけ甚三郎怪敷有之候間右場所へ踏込候所、何様十人も集り居候趣之所、火ヲ消皆々欠失申候故、右場所ニ鳥目三百文余・さい弐ツ・茶椀壱ツ・紙ニて張リ候銭拾四五文・かるた弐枚（表裏表裏）右品有之候間引揚罷帰リ親類九兵衛ニ預ケ引取候

一同断同七日甚三郎ヵ親類壱人呼出相尋候所、甚三郎儀は松本定兵衛方へ罷越留主之由、大勢集リ居候者も尾州之者之由ニて顔は存知候者も御座候へ共名は存知（不か）可申、酒ヲ呉候様申候間酒を計リ遣シ、妻儀は岐阜へ参り草臥（くたびれ）候て臥シ居候間誰か一向存じ不申ト計リ申候、然共存知さるもの二酒を計リ遣し、寝候事も有之間敷不都合之申方ニ付、惣親類預ケ申付御陣屋へ御差出之旨申聞候、御陣屋へ之届書左ニ

口上之覚

一去辰七月中被仰渡候博奕賭諸勝負等之儀、御制禁之儀は兼々厳敷被仰渡候え共、近年等閑ニ相成候ニ付不時相廻リ、若疑敷儀有之候ハヽ其場所へ踏込、其者召捕、御陣屋へ可申上旨被仰渡候ニ付、折々相廻リ候所、夜前前渡村甚三郎ト申者之方ニ大勢集リ居候間、其場所へ踏込候処皆々欠失、家内之者も相見へ不申候所、右場所ニ怪敷道具等有之ニ付引揚罷帰リ申候、甚三郎儀は惣親類へ預ケ申付置候、此段以口上書御訴へ申上候、以上

巳二月七日

坪内名内
山本滝八郎

右書付致持参候所当番茂左衛門へ相渡し、始末相咄候所茂左衛門被申聞候は、怪敷道具と計り御座候ては如何様之者ニ有之候哉不相分候間、重て御出之節は、名之不知者は絵図ニ御認御持参可被成旨被申聞候間、承知之旨申答引取候

一同大釜八日大釜池樋損候ニ付、為見分新加納より今尾周右衛門・河田源内出役、永田左内・苅谷弥兵衛・山本滝八郎罷出候所、水多篤ト不相分候間、早々庄屋弥三七方へ立越候て致支度、其上相談ニは、池水引次第申出候ハヽ松本御役人当方御役人両人立会見分之上、模様新加納へも申出候筈ニて引取

一同断同九日山本滝八郎御陣屋へ罷出ル、然所妻儀当病之由ニて不参、組合之者も不罷出、甚三郎ヵ親類与蔵・辰蔵都合三人罷出候所、立会之儀如何致候哉ト被申聞候間、何とも可然と申候所、左候ハヽ是ニ御控ト申候間差控罷在候、一応尋之所申ちんじ候故、左候ハヽ其節之道具其儘封付有之候、只今目之前ニて封切リ可申ト押開候所、品々有之候ニ付不届之旨厳敷呵、牢舎申付旨被申聞候、追て昼夜とも両人ツヽ番致候様、ヵ食物等持運ひ候様、庄屋へ被申付、

其旨之請書取之、惣方引取候

一（十二日）今日御山入札ニ付惣方罷出候所、落札小山村兵助、仍之取極書付左

覚

一金五両　五分三厘　荒井山
一金七両三分　三分七厘　御囲内
〆金拾弐両三分　銀九分

右は落札ニ付私へ被下置候上ハ、代金之儀聊無相違当月廿九日夕方迄ニ急度上納可仕候、且又荒井山之儀は農業えも差懸リ候間、当九月晦日迄切払候様仕度、御願申上候所御聞済被下難有奉存候、尤御墓所見通道境山の子鐘鋳場境松残し、ヵ苗木相残候様被仰付、是又奉畏候、且又御囲内之儀は鎌切残シヵ下草等相除候段、是又承知仕候、為後日一札仍て如件

文化六巳年二月十二日

北島　惣九郎
小山　兵助

前渡
御役人中様

一甚三郎同十五日滝八郎儀新加納へ出役、甚三郎妻病気全快ニ付村役より御陣屋へ御届申候所、昨日以手紙当番今尾茂左衛門・今尾富三郎より今卯之中刻罷出候様申来ル二付、其段以差紙申遣ス、右甚三郎妻ヵ同人組合与蔵・与三右衛門・丈吉・長次郎・親類辰蔵召連罷出候所、吟味之節妻申答候は、何方之者とも不相知酒を呉候様申候間弐合遣し、又四合遣し申候、其日は岐阜へ参り草臥候間とろ〳〵と臥リ候内、何かそふとふいたし燈火も消候間、早速火を燈候所、御役人様方御出ニて御座候、全存し不申ト申候故、口書取極かたく、仍之甚三郎儀出牢之上手鎖、女房入牢、子供は組合へ預ケ、ヵ甚三郎儀も組合へ預被仰付候所、幼年之子供御座候間、母入牢ニては難渋仕候旨達て村役よりも相願候間、又々甚三郎代リニ入牢被仰付、女房・子は組合へ御預ニ相成引取申候、夫より三軒屋池へ出役

一平婚礼同廿二日平島御婚礼ニ付滝八郎御差出シ、新加納村清右衛門方下宿、加藤辰右衛門同様、供廻リ若党壱人、道具挟箱・草履取、弁当持参之所御出遅刻ニ付、清右衛門方ニて粥申付為煮候事、七ツ過頃新加納へ御着ニて、同所太平治方ニて御小休、其節御通り懸ケ一里塚脇瑞眼寺道之所ニ控へ罷出候、御行列（列か）長持弐掉（棹か）・たんす一掉・御対箱・御打物・御駕籠・女中弐人・御小姓弐人・御挟箱、松原牧右衛門取次ニて御駕籠戸開、滝八郎・辰右衛門御逢、御跡より、箱琉球包駄荷壱駄、夫より太平治方ニて御小休、六ツ過御発駕ニて、御先え濃州羽栗郡平島本村ト記有之提燈ともし、其跡御道具、右之通松原牧右衛門ヵ郡上より之御附　金右衛門、夫より駄荷馬、其跡滝八郎・辰右衛門也、於平島御酒御料理壱汁五菜、開之節は夜明前ニ相成候事

一同廿四日大釜出役小弥太

一同廿五日従平島御使者岩佐安次郎羽織袴、郡上より之御土産として奉書弐帖、奥え真綿為持来ル、井ニ当廿八日皆々参リ候様案内申来ル

一同日当方よりも御使者山本滝八郎相勤、両種代として金弐百疋□御樽肴代金弐百疋ト相認、白木台真の熨斗包添被遣候、滝八郎へ為御祝儀鼻紙弐束、中間へ弐十疋被下候

一同日御陣屋より使来ル、左ニ袖ニ山本滝八郎様　今尾茂左衛門　今尾富三郎

以手紙致啓上候、春暖相成候、弥御安全被成御勤珍重奉存候、然は前渡村甚三郎儀入牢中病気差発リ、養生仕候え共牢中療治行届兼候間、出牢之上養生仕度親類村役共相願申候ニ付、吟味之上暫養生中出牢申付候、依之村預甚三郎居宅ニて昼夜両人宛番仕、取逃不申候様申付候、此段御承知被成置可被下候、右可得貴意如此御座候、以上

二月廿五日

右之通申来リ候間、明日甚三郎親類両人呼出シ、病体も相尋致加養候様可申付儀可然ニ付、差紙遣ス

一同日平島より御使者岩佐安次郎・供壱人来ル、時候御安否相述、今般御婚姻無滞相済大慶思召、就てハ御引移之節途中迄御使者御差出忝被思召候、郡上より為御土産小奉書弐帖、奥様え真綿被進候、右御披露申上候、且又来ル廿八日御差支無之候ハヽ亀酒被進度旨被仰越候、右御答御逢之上御直答被仰遣候事

一同廿八日殿様平島へ御出、御供御侍壱人・御道具・御挟箱・御草履取、今日は別ニ御土産無之、奥様より始て御斎被遣候ニ付、まんちう一井樓数六拾四被進候、あの方ニて三井様と御一緒御饗応之次第左ニ

小書院床銚

懸物　富士山之画　花生唐金□紅葉ニぎぼうし

明床　花生唐金船人したれ桜なづな

大書院床

三幅対　鷲之画　花生唐金薄ばた耳桃ばらん

座附　熨斗なし

三ツ組盃台

吸物　名よし　さんせうの芽　硯蓋　竹の子　やき鳥　小串　玉子

白みそ　吸物　鯛うど　大鉢　大鯛塩煮

鉢　塩かれい　鉢　ひしめ煮付

吸物　いか　茶椀　本膳　蝶足

生酢　いわ耳　さより　くり　汁　つミ入　れんこん　わかめ　坪　ふき　あわび　きくらげ

飯

二ノ膳　同断

生盛　名よし差身　三しまのり　みる

二ノ汁　むすびさより　みる

いり酒　香の物　かいしき　かすづけ大こん

引て平皿　名よし玉子やき　大くわい二口　かわ耳　猪口　いか　木のめあへ　焼物　鯛目下尺

冷中酒　壱厳切ニテ再進なし　亀相と相見候

菓子　まんちう五　梨子　干菓子　せん茶

奥ニて

床掛物　浮世絵女　鉢植谷わたり

次の間ニ　瓶子　長柄　提　取肴　銚　有之

納戸　衣かう銚有之

座付　包熨斗

三方松竹梅鶴亀の絵　三ツ組土器　鶴亀

長柄　提子　取肴　小角

御嫁子様計御盃相済

三ツ組盃　吸物名よし　硯ふた竹の子　玉子　わこんにやく　かまぼこ　吸物　鯉　鉢肴　蒲鉾煮付　鉢　名よし　さしみ　ちさ　かんてん　吸物　すまし　あわび　こせう　丼　青あへ　鉢　あわび　すがい　鉢　かれい煮付　吸物きらず　うと　鉢　名よし　煮付

年済証文之事

一金五拾八両也　但元利共

内金三両　当金渡

残て金五拾五両也

右は先年当屋敷勝手方諸向少林寺世話有之候節、御調達被下候所、書面之通差滞候ニ付、少林寺滞金同様当金御渡申、残て金五拾五両来巳年より寅年迄十ヶ年済相極、壱ヶ年分金五両三分銀五匁宛、以収納米御渡可申候、為後証年済証文仍て如件

文化五辰年十二月　山本小弥太

浅野兵部殿　少林寺納所

表書之通相違無之者也

坪内嘉兵衛

右証文持参ニて小林寺ニて調印相頼、旁小弥太被遣候、少林寺え当晦日切御渡金拾五両之所、五両は来月中旬頃迄延引申頼置候間、今日金拾両小弥太致持参、芋島村武右衛門え相渡ス

一右序ニ平島へ此間之御礼御使者被仰付、小弥太相勤ル

一同廿八日御出之節、郡上より之御状松原より受取来リ差上ル、左ニ

未得貴意候え共一筆啓上仕候、余寒強御座候え共弥御安全被成御暮珍重御儀奉存候、然は姉儀坪内佐左衛門殿え御縁談申合、今般為引越申候、依之御縁家ニ罷成大慶仕候、以来幾久被仰合可被下候、右之段可得貴意如此御座候、御内室様へも宜様被仰達可被下候、猶期後弁之時候、恐惶謹言

二月廿日　朝比奈藤兵衛

坪内嘉兵衛様　辰伸（花押）

参人々御中

一同三月二日吉兵衛呼出ス、右は先達て以書付願出候御下屋敷守リ之儀、願通被仰付候ニ付呼出左之通申付

相渡申置書付之事

一今般御下屋敷守リ仕度願出候処御免許有之ニ、右地面北は堀境七拾弐間半、西は祇通境塚長三拾弐間之所、為上木代金五両上納慥ニ令受取候、右地所五ヶ年之間年貢米之儀は米弐斗宛当暮より相納、尚又追々新開ニも相成候ハヽ、立毛ニ隨ひ御年貢米可被　仰付候間、其段相心得可申候、尤当年より酉年迄五ヶ年之間は作取肥代ニ被下候間、出情次弟可致新開候、且又年々開発之度毎、地所見分之上取懸リ可申候、為後日仍て如件

文化六巳年三月　　山本滝八郎印

御屋敷守リ
吉兵衛へ

右之通申渡候、山東方よりも矢熊山薪山ニ相願候間、是又御聞済有之ニ、庄屋弥兵衛呼出申渡ス、左ニ

奉差上御請書之事

一今般山東組小前より矢熊山薪山ニ相願候所、御聞済被下難有仕合奉存候、御境之儀は北は道通山神塚裾より峠三本松少し北方塚境、東は鳩岩迄峠境、所々塚有之候、右之通御願申上候、為山御年貢年々米三斗五升宛、山東方御新開米御上納之節一堵ニ上納為仕可申候、依為後日如件

文化六巳年三月

右十二月廿日受取済

山本滝八郎様

山本方庄屋　弥兵衛印

一二月晦日少林寺ニ兵部方滞金、去冬以来芋島村武右衛門取扱ニて年済ニ相成候所、当金渡方之儀去冬不行届、仍之囲内松本書入当月迄延引申頼候て、則書付も渡置候所、当晦日迄皆渡之筈之所、金五両は暫手操之所少林寺へ申頼候所承知ニ付、金五両は三月中旬迄延引之筈、金拾両小弥太持参ニて武右衛門え相渡し、同人ニ納所より之請取来ル、兵部方も去冬遣置候請文少林寺印形無之候故、最初より少林寺世話向之事故印形加印之上、三月朔日与兵衛致持参相渡右文面前顕ニ有之

一同三月五日元蔵罷出、先達てより追々申上候去冬差上置候金子御証文被下候様申出候間、則認遣

借用申金子之事

一金三両也　　但利足弐割

右は御勝手方要用ニ付借用申所実正也、返済之儀は来巳暮以収納可返済申候、為後証仍て如件

文化五辰年十二月　　山本滝八郎

本郷庄屋　元蔵殿

山東庄屋　弥兵衛殿

一同三月七日早朝村役罷出、橋板出来仕候間御見分被下、則今日掛ケ申度候間、御見分之上場所へ御出役被下候様申出候間、滝八郎罷出ル、右板才廻シ左ニ

覚

一長五尺八枚　此間六間六分七厘

六寸七分　九寸五分　壱尺
七寸五分　壱尺五分　七寸四分
七寸弐分　六寸七分
〆六丈五尺五寸平均ニして八寸壱分九厘
此才五拾四本六分三厘

一長六尺壱寸六枚　此間六間壱分

六寸八分　七寸三分　八寸五分
八寸七分　七寸八分　七寸
〆四丈六尺壱寸平均ニして　七寸六分八厘
此才四拾六本五分九厘

元〆百壱本弐分弐厘

右之通御座候、以上

巳ノ二月　　金十郎
茂兵衛

当番御庄屋
弥三七様

右之書付写之上弥三七へ相返ス、且又橋結近辺之橋先年より山ノ子浦橋を相対替ニ致シ、下切村を替へ懸候処、溝口土等揚呉候様頼候えとも、少々計土取リ其上へ橋懸候間、大雨等之節は一盃ニ悪水あぶれ申候間、何卒先年之通銘々ニ懸申度、如何可仕哉と申聞候間、何ッ之頃より替候哉と相尋処、村方ニても何ッ頃よりか不相分由申聞候、仍之伺之上申聞候は、下切村へ致相対候て、先年之通リ元々え致シ、水吐宜敷候様土等も揚候方可然旨申付候事

一且又天神前通リ南へ之道之内小橋弐ヶ所有之候、右地面は出高之内ニて、先年は出高より懸来リ候処、虫送リ之節堤外へ送リ出し候節彼是取組ニ相成候砌、右之橋も懸ケ申間敷之旨、其節之出高庄屋源右衛門申候由、其後一向打捨有之候、右道通リは鵜沼宿伝馬道ニも御座候間、何卒懸ケ申度由申聞候間、左様入組之場所ニも候ハヽ先々引取、勘考之上可申付旨申聞、伺候処、先年出高より懸ケ来リ候場所をまんざら此方より懸候も無詮事ニ候間、半分誤り、橋二ッ有之候へは壱ッ宛両方より懸候方可然、出高庄屋丈吉えも相談之上、右之振合取計候様申聞遣候事

一同日金十郎より申出候は、良助田地面荒、金子弐分も附候ても貰人も無之程之田所ニて、其上大釜切之節砂等入候儘ニて、度々人足も被下候間洲上仕候様被仰聞候え共、是以只今ニ其儘御座候、近年為七より無拠被頼作リ候え共、右之田所故年々一向取れ不申、年々畝引も被仰付候間、何卒少し御引御立被下候ハヽ、弥私か物ニ仕耕作仕度、左候えは洲も上ケ申度由申候間、洲寄之場何度有之哉、書付差出候様申付候処書付差出候、左ニ

覚

一長壱間半　横壱間　厚壱尺五寸
一長五尺五寸　横五尺五寸　厚弐尺五寸

一長弐間半五寸　横三尺五寸　厚二尺
一長四間　横四尺七寸　厚二尺五寸
一（溝北）長壱間　横壱間　厚四尺
一（同）長三間半　横三尺五寸　厚三尺
〆六ヶ所

右之通書付差出候間留置候、御引方之儀は是迄之小畝引帳吟味いたし、五ヶ年平均之上可申付、其上今年より五ヶ年も引方平均被仰候ハヽ、田地おきかへり可申旨、是又申渡候

一同九日ヤハセト（矢合）申所へ松苗買ニ遣ス役孫右衛門、数三千三百五十本ニて壱〆四百六拾文、但シ百文ニ付弐百三拾本也、御囲土居一重ヱ植、外御堀端御門前より北へ両側、西へ同断、南へ同断、天神裏迄、夫より弁才天前河原へ植させ申候

一同月十日夜芋島村武右衛門来リ止宿、翌日御目見之上申上候は、庄右衛門儀勝手不如意ニ付、家作売払借用方片付、江戸表へ罷下リ両三年も拝申度、夫ニ付孫市儀も召連度、此段内々申上呉候様申聞候間申上候、何分宜奉願との事故御仰セニは、身体づくの儀は当方より何とも不被申候間勝手ニ可致、尤存知寄有之候て差留候事ニも候えは手当ニても不遣候ハては差留候事も難成候間、何レ借用方も片付行立候様ニ世話致遣し候様申候趣、庄右衛門へも通可申旨被仰聞候

一同十五日滝八郎より山本祐左衛門届書差出ス、左ニ

以書付御届申上候

一庄右衛門儀私心底ニ不応義御座候ニ付、兄弟離親類離別仕候、尤小弥太儀も同家ニ御座候間私同様御座候、右之段御届申上候、以上

巳三月　山本祐左衛門印

御役人中様

一同十六日俄ニ加納安池へ参リ候処、今朝被召罷出候所、不依存御番頭被仰付、御用人兼相勤候様との被仰渡、ヱニ江戸御参府立帰り之御供是又被仰付候由、御隠居様御咄御座候、新太郎様ニは御礼廻りニて御留主なれとも、無程御帰リ御座候て致対面候、仍之

同十八日滝八郎御祝儀御使者、御酒二升御肴　被遣候

一先達て御用達て継右衛門金子、芋島村清左衛門継右衛門より之手紙持来リ候間、則証文認差遣、左ニ

借用申金子之事

一金七両也

右は御地頭所御要用御座候ニ付御上納被下候段致承知候、仍之当夏御上納麦貴殿御差図次第早束（ママ）附送り可申様、従御役人中様被仰付候えは無違乱差送り可申候、為後日証文仍て如件

文化六巳年二月　庄屋　元　蔵印

継右衛門殿

右引合通、村役共へ急度申付置候上は違乱無之候、以上

御名内　山本滝八郎印

右清左衛門へ相渡遣ス

此証文七月書替ニ成戻る

四月朔日

外ニ大釜割合申来ル、左ニ

袖ニ廻状　当番今尾富三郎

覚

一銀五拾壱匁四分三厘　惣〆

此訳

銀弐拾五匁七分壱厘五毛　前渡表御出分
銀拾弐匁八分五厘七毛余　松本表御出分
銀拾弐匁八分五厘七毛余　無動寺御出分
〆銀五拾壱匁四分三厘内

右は前渡村外三ヶ村組合大釜吐井、当二月より取繕候入用書面之通相懸候間、致割賦候通御出分、来ル五日迄ニ前渡村庄屋弥三七方え御差出、同人へ御渡請取書付御取置可被成候、且此廻状早々御順達、留より当方へ御返却可被成候、以上

当番
巳四月朔日　今尾富三郎印

山本滝八郎殿
刈谷弥兵衛殿
永田清左衛門殿

尚々本文御出分銀之処へ御調印、御廻し可被下候、巳上

甚三郎一件新加納　御陣屋ニて御吟味口書左之通

御請書

濃州各務郡前渡村

入牢　百姓　甚三郎
村預　同人女房　たみ
同　同人悴　千代吉
同　同　与三五郎
同　同　亀次郎
同　甚三郎五人組合之内　喜蔵
同　同　丈吉
同　同　与三右衛門
同　同　与蔵
他行留　庄屋　元蔵
同　組頭　惣左衛門

右は当月六日夜甚三郎居宅ニおいて、御地頭御役人山本滝八郎様博奕ニ相用候品々御引揚被成、当御役所へ御達ニ相成、右一件御吟味中書面名前之通被仰渡、一同承知奉畏候、依て連印差上申候、

以上

文化六巳年二月

甚三郎印
多美爪印
喜蔵印
丈吉印
与蔵印
与三右衛門印
元蔵印
惣左衛門印

新加納
御役所

右之趣被仰渡候ニ付、私一緒罷出承知奉畏候、則御請印形差上申候、以上

右村庄屋
弥三七

御吟味ニ付申上候書付

濃州各務郡前渡村
百姓
甚三郎
当巳五拾三歳
右申口

博奕賭之諸勝負前以御制禁ニ御座候処、近年別て厳敷御吟味被仰出候ニ付、御地頭御役人様御見廻り被成候処、折節当月六日夜私居宅ニおいて大勢集居候人声御不審相掛り、御踏込被成候ニ付、居合セ候者共不取敢逃去、家内之者も相見不申、其場所ニ簗弐ツ・茶碗壱ツ・銭三百四拾四文・内百文緡数弐百文・壱文宛白紙巻数拾六文・不緡分数百拾八文かるた弐枚、右は博奕ニ相用ひ候品ニ御座候間、御糾之上御地頭御役人様引揚被成、私家内之者共親類へ御預ケ被置、同七日当　御役所へ御達シ相成候ニ付、早速被召出、右始末有体可申上旨被仰渡、御吟味御座候

此儀、私居屋敷とも御年貢米五斗はと相勤候持高有之、家内私・女房并悴拾三歳より五歳迄三人、都合親子五人相暮、持高少御座候間、農業之透年中柚相稼、右ニて渡世出来兼、尤私居宅之儀は尾州草井村より濃州岐阜町え商売人其外共通路之往環筋ニ御座候ニ付、豆腐拵・酒取売仕、乍困窮漸々相営罷在候、然処当月六日之儀柚賃銭為勘定、隣村濃州松本村百姓定治方へ罷越、同夜九ツ時頃帰宅仕、私留主中前文御吟味之始末ニ相成候由承知仕、驚入奉存候、右は当御役所へ御達之後於新加納入牢被　仰付、再応御吟味被成候え共、御法度之品為取扱申間敷候旨、精々家内之者ニ申聞置候間、私留守中たりとも決て博奕等為致候筋無之、併其夜旅人四五人立寄酒呑居候内、悴為寝候迚女房たみ儀相眠り候由申聞候ニ付、相考候処、右旅人之内若博奕道具所持罷越居、御役人様御踏込御吟味御座候間相驚、右之道具取落シ逃去候儀ニも可有之哉、いつれ留守中之儀ニ御座候ニ付、一向不奉存候

右之趣申上候処、仮令案外之場所へ御役人様方御踏込被成候共、酒呑咄而已旅人ニ候ハヽ無謂可逃去道理無之、其上女房子共迄も駈失、勿論其場ニ博奕之道具相残居候上は博奕為致候筋ニ相当、

不埒之段被仰聞、御差当請候ては博奕宿ニ相当り、一言之無申披奉恐入候、然上は右一件ニ付如何様御咎被　仰付候共違背仕間敷候

右相違之儀不申上候、以上

文化六巳年二月

右
甚三郎印

新加納
御役所

右御吟味ニ付、私共一緒罷出承知仕候処相違無御座候間、奥印形差上申候、以上

右村庄屋
元蔵印
同村組頭
惣左衛門

御吟味ニ付申上候書付

濃州羽栗郡松本村
百姓
定治
当巳三拾一歳
右申口

同州各務郡前渡村百姓甚三郎と申者、当月六日私方え罷越、柚賃銭勘定仕、同夜四ツ時過頃帰立仕候旨同人申上候由、右否有体可申上段御吟味御座候

此儀、甚三郎常々柚稼薪木商売いたし私へ罷越候処、当月六日之儀も同人より申上候通私方え罷越、同夜四ツ半時と覚敷頃迄勘定相済し、罷帰り申候

右相違之儀不申上候、以上

巳二月

右
定治印

新加納
御役所

右御吟味ニ付、私一緒罷出承知仕候処相違無御座候間、奥印形差上申候、以上

右村庄屋
忠吉印

差上申御請書之事

内分坪内嘉兵衛

濃州各務郡前渡村
百姓甚三郎女房
多美
巳四十四歳

其方当二月六日夜宅ニおいて物騒敷人声いたし、地頭家来罷越候え共壱人も不残逃失、其場ニ博奕道具簗弐ツ・茶碗壱ツ・かるた弐枚・銭三百三十四文有之引揚、博奕為致候段之遂吟味処、其節夫甚三郎事柚賃銭勘定有之、松本村百姓定治方へ罷越候留守宅へ、不見知旅人体之者四五人立寄酒呑候内、小児宛為呑少々眠候ニ付、博奕致候哉手懸可相成義も無之段申之候え共、博奕道具有之上は博奕いたし候ニ相違無之候、然ル上は右体博奕致候を不存段不埒ニ付、押込申付

一 甚三郎事咎メ無之、其外庄屋元蔵・与頭惣左衛門ハ五人組喜蔵・丈吉・与三右衛門・与蔵は咎メ之不及沙汰、博奕道具・銭共不残取上申付

右之通被　仰渡、逸々承知仕奉畏候、依之御請一札差上申候所如件

同村百姓甚三郎女房　多　美　爪印
右夫　甚　三　郎印
庄屋　元　蔵　印
与頭　惣左衛門印
五人組　喜　蔵　印
同　丈　吉　印
同　与三右衛門印
同　与　蔵　印

文化六巳年三月

新加納
御役所

四月廿一日妙海寺へ去冬可遣証文是迄延引ニ付、今日犬山御出ニ付御供先より小弥太致持参、尤利足七拾八匁之所、去冬金壱両渡置候間、拾八匁不足分元金へ盛り込ム、証文左ニ

借用仕一札之事

一 文金拾両銀拾八匁也　但一ヶ月金壱両ニ付利銀六分宛定

右之金子借用申所実正也、依　高祖大聖人三枚続御本尊一軸御預ケ申置候、然上は来巳ノ十二月廿五日限リ元利共無滞返済可仕候、若及遅滞候ハヽ右一軸御自在可被成候、為其一札仍て如件

文化五辰年十二月　犬山　妙海寺　知事御法中　坪内嘉兵衛家来　山本滝八郎印

ス間敷旨井戸掘共申候間、夫より外へ場をかへ、忠蔵前其外二ケ所計為掘候所同様ニ付、山東へ参り掘セ候処、是ハ此方より浅く、壱間も入り候てより右之さバ土ト相見申候、夫故出来不致、しかれとも皆々たんのういたし候事

一 (五月)同廿一日村役罷出、打続快晴ニ付田方水無之、植付ニも相障候間、雨乞之儀願出ル、即刻御鬮を揚取計候様被仰付候間、其段申聞候所、一端引取、又々罷出申上候は、御鬮取候所今晩北島権現へ籠候之旨申出候間、則御代参可有之旨申遣ス、夜ニ入御代参として源右衛門様被為入候、此節祐左衛門忌中ニて有之候間、与兵衛御侍相勤御草履取、同廿二日夜より廿三日雨降申候

一 同廿四日村役罷出、今晩天神へ籠り候由、尤右は間(糊)有之候え共中々植付出来候程は雨も降り不申候故、昨廿三日外御用向ニ付村役三人とも罷出候間、雨請之儀申談置候間、今日相談之上罷出候、是以即刻御聞済有之、然共権現へ御礼之儀相尋候所、右は桃春院申候は御断申候間一緒ニ御礼致可然段被申候間、任其意候由申聞候

一 (廿八日)同日村役弥三七罷出、雨乞之儀申出候間、即刻取計候様被仰聞候、併先達て之権現・天神御礼済、其上多度成りとも熱田・洲原成りとも、其外何ニても御鬮上ケ候様申遣候所、引取候て申出候は、御鬮あけ候所今晩権現へ籠、天神は松明と申事ニ御座候、尚又明日ニも何レか代参ニても遣度、是以御鬮上ケ又々可申上旨申上引取申候、後刻平右衛門・喜藤次罷出御鬮揚候所、多度権現へ代参と申事ニ御座候、村方ニても信心之儀候間、御上ニても御信心之儀奉願旨申上候

一 同廿九日早朝弥三七罷出、今朝多度へ代参造酒蔵・市蔵と申者両人参り候段届出ル

一 同廿七日切通ごぜ・加納座頭お末様御祝儀配当取ニ来ル、先達ても両度参り候所、為持可遣旨申置、其後取紛失念候故今日又々来り候、仍之俣五郎様御慶事之節之振合を以青銅五十疋被下候、尤先々より振合ニ候哉と相尋候間、先規之通りと相答渡し遣候処、御礼申上候

一 六月二日弥三七・弥兵衛罷出、多度権現今日ニて二夜三日ニおよひ申候、封を切候へは荒雨ニ御座候由ニ候へとも封を切り申度、しかし今日切ニ御座候へは今晩御送り可申哉、如何可致旨申出候間、先々今晩一夜見合、弥々降り候と申事ニ候ハヽ封切申候も可然、何レ惣方相談之上取計可申旨申付遣候

一 同二日夜ニ入弥三七罷出申上候は、先程之趣吉祥院へも及談候処、多度之儀は是迄咄ニも不承候、久津竜権現へ雨請懸候処、御利生無之節は封を切候様ニ先方ニて被申候間封を切候処、其山伏之宅其外村内ニて三軒吹たおし、以之外之荒雨ニ有之、右之振合も有之候へは、若封切右体之事有之候ては拙僧儀は不厭候え共、能々御相談の上取計可申旨被申候、就ては二夜三日と申事ニ候へ共、相考見候えは、晦日之七ツ頃御着ニ有之候へは、三日之七ツニて二夜三日ニ相当り候旨被申、明三日七ツ時迄御馳走申上べく候哉、今晩御送り可申哉之旨申出候間、何レ凡慮ニては何共被申かたく

候間、今暫御馳走可申上哉御送り可申上哉、又は今暫日延可申哉、御鬮上候方可然旨申遣候

一同朔日夜惣方籠り候方、御神酒少々頂戴仕度之旨、喜藤次・平右衛門申出候間、見計取計候様申遣

一同夜本郷方若者津島祭り之真似いたし、畑中より灯燈ともし打囃ニて薬師寺内迄参リ候由、大さわき也

一山東方若者馬具三通御願申上拝借仕、今晩花馬三ツ出し申候

一同三日村役共罷出、多度権現当六日迄御馳走申上候様御鬮落候趣申出ル、吉祥院義は今日より一食ニて神明神前ニて一時千部之経文誦候由申出る

一同六日村役共不残罷出、今晩多度権現御送り申候旨申出る、井田方干割候之旨届出ル、沖中少々水替へ候由、是も替水も無御座候へ共今日は少々有之候由申出る、猶又今晩致相談、跡之雨請懸候方可然旨申遣ス

一北洞村　娘そよ儀思召ニ入不申、得(疾)ニも御暇可被遣思召之所、是迄御遣被成候所、御暇ニ相成候ニ付、人代り古市場村助五郎娘きをと申者六月五日より引越ス

一同日御勝手方之儀村方之者共申候は、殿様之儀ニ候へは質置候ても御暮方は不致候ハてハ相成不申候間、御仕様帳御下ケ被下候ハゝ猶又村方よりも存念之所可申上旨申出ル、至極御満足被思召候、併御借用方共引請呉間敷哉、其所一応相談致候様申聞候所、又々今晩ニも相談仕、追て可申上旨申上候て相下り候

一同七日弥三七罷出、多度権現昨夜御送り申上候よし届出る、井雨請之儀御鬮上ケ候所、今晩天神へ松明上ケ候様御鬮落申候間、日暮以前より寄合申候、夜分は不参之者も御座候間、明ル有之内ニ燈懸り申候由申出ル

一同夕七ツ過より太鼓敲、日暮以前より荒井山へ燈ともし申候

一同十日夜四ツ過より雨降出シ七ツ過迄降申候、仍之十一日夜御礼御鬮取、灯燈ともし天神へ籠申候段弥三七届出申候、井又々雨請かけ申度、法印頼御鬮揚候様申遣ス

一同十一日御陣屋より雨請ニ付以廻紙申越、左ニ

以手紙致啓上候、然は今般早魃ニ付、御知行所一統勢州へ雨請御祈願相願候間、任先例今十一日朝右飛脚差立申候、此段為御承知得貴意候、以上

巳六月十一日　　当番　河田源内

山本滝八郎様
松原牧右衛門様
加藤辰右衛門様

尚々御願達之上御返却可被下候、以上

一同十二日朝弥三七罷出申上候は、夜前法印方ニて御鬮取候処弁才天揚り申候、湯之花と申事ニ付今早朝神子呼ニ遣し候、差合さへ無御座候へは今日参り呉候事と奉存候旨、申出ル

一同夜少々雨降、翌十三日曇、十四日もはら〳〵雨降、十五日昼夜少々ツゝ降、十六日夜至て大雨也

一同十六日朝弥三七罷出、今日弁天へ御礼仕度、序ケ間敷候へ共湯之花揚可申奉存候之旨申出候間、夫は余り押付ケ間敷候間、又々御鬮を揚取計候方可然段申遣ス

一同弥兵衛罷出、御鬮揚候所松明と申事ニ御座候間、今晩降不申候ハゝ矢熊山ニ燈し、夫より籠り申候段届出ル、井御神酒少々被下候様願出候間、取計候様申遣ス

一同暮六ツ過より松明燈し申候所、六ツ半過より雨降出し大雨ニ有之候、同十七日朝も大雨致候

一同十四日弥三七・弥兵衛罷出、御勝手方之儀何レニも御断申上候様惣代之者申候由、此様子ニては日々作方も痛候間先面々当惑仕候之旨申出候間、夫は如何敷事ニ存候、先日既ニ御請申上、御仕様帳御下ケ被下候ハゝ村方よりも御仕様帳仕立差上可申段申出、御暮方之所は右ニて御請相済候趣ニ心得、其段申上置候所、今日之趣ニては手戻りニ相成、何共不行届候様被仰聞甚以迷惑致候、何レ御暮方は右之通御請も相済候事ニ候間、御借用方之所のミ談し遣候間、右之段惣代へも申聞、御借用方不行届候ハゝ御暮方は是非御請申候様取計候様申聞候所、又々引取相談之上可申上旨申候間、急々致相談罷出候様申遣ス、就は先年之振合も御座候間、御出入之者へも被仰聞被下方可然哉、尤恐入候え共心付候間申上候之旨村役共申出候間、何様尤之事ニ候間呼出可申聞旨申聞候

一同十五日夜御出入之者秀七・茂兵衛・半兵衛・牧蔵罷出候間、御勝手向之儀村方へ被仰付候所御断申出候間、尚又致相談御模通付ケ候様談遣候、先年之振合も有之候間、御出入之事ニも候へは右相談之場所へも立会、御模通ニ相成候様、とも〳〵可致相談之旨申聞候所、畏候へ共未熟者計故不行届候え共、可成丈は相談可仕旨御請申上候

一弥兵衛呼出明日(十八日)先々田方植付候様取計可申、尤夫々田主とも用意も可有之事ニ候間、其段申触候様申遣候、今朝より之雨ニて植も大方取れ可申旨申聞候、尤十六日天気ニ相成、又々昨日より折々大雨いたし候事

一同十九日明六ツ頃より大雨降出、雷少々鳴、雨も五ツ半頃迄大雨ニ御座候、依之今日は田方植付尚更よろしくと存候、右ニ付為見廻山本滝八郎供壱人召連罷出候所、大勢故不行届、小弥太呼ニ来リ候間、五ツ半頃より小弥太も出役也

一本郷方大門万蔵罷出、御下屋敷池田植付いまた不仕、何卒人足被下候様願出候間、山東へ参り、出役へ願人足頼候様申遣ス、人数凡百五六拾人も有之候由

一植付いまた出来不致分左ニ留置候

一壱反弥兵衛（山はな）　一弐畝同人（北はさま）　一壱反余久米蔵（山はな）　一八畝銀蔵（同）

一□畝五歩久次郎　一一畝弐十歩彦右衛門（池田）　一二畝余秀七（同）

一五畝歩同人　一七畝歩豊七（北はさま）（内見聚あり）　一三畝歩喜代七（同）　一二畝歩儀蔵（山はな）

一三畝余秀七（早稲田）　一壱畝歩同人（中袋）　一弐畝歩同人（とかな）　一壱反三畝歩喜代七（同）

一六畝歩常七（猿塚）　一壱反四畝歩甚太郎　一三畝喜右衛門（山はな）

一三畝歩　同人（にかれ）　一三畝歩勇七（猿塚）　一六畝歩勇七（なかれ）（平右衛門）

一 四畝歩儀兵衛（にかな）　一 弐畝余和吉豊七　一 壱反与左衛門岩下内見取有
見取
一 同 壱畝二十歩和兵衛　一 同 五畝歩豊七　一 同 二畝歩直右衛門
一 同 四畝歩喜代七　一 同 四畝歩和兵衛　一 同 三畝歩直右衛門猪塚
一 八畝歩治右衛門　一 三畝歩和吉　一 壱反余久米蔵橋詰

〆壱町大反三畝二十五歩

右場草もはへ申候間切替場をならし、根を深く植させ申候、存外手間取一日ニ片付不申、仍之明廿日は山東方北島の人足ニて植付候様申付、暮方引取申候、供壱人役申付、惣人足へは多平治前ニて酒ニても呑せ候様子相聞へ候

一 同廿日滝八郎出役、昼前之内ニ大方植付出来致候、昨日最初植候分は浅く植候間、少々しほれ申候、深植の分ハ障り無之候、苗田之分は昼後植候様申置引取候

一 同夕方庄屋弥兵衛・与頭平右衛門・惣代久米蔵為御礼罷出、惣代三四人も召連候筈之所、時分柄困候間壱人召連候由断申聞候、并御藍ニて植付も出来候間、村方子供等為遊申度由申候間、此間本郷方之振合申聞、本郷方遊候節勝手ニ可致、本郷より先ニては如何敷段申聞候所、何分ニも兼て存候は本郷相談之上ニ可仕奉存候之旨申上候、是より本郷方へも一礼ニ参り候様子也

一 同廿二日夜雨請内野神明へかけ申候由、湯の花執行候之旨申出ル

一 同廿壱日村役不残罷出、御出入之者呼出、此間先之御請申上ニ付御仕様帳御調へ之上相渡候、追て急々御答可申上之旨申付ル

一 同廿三日村役不残罷出、此間被仰付候御勝手向之儀、御飯米方計調達可仕候間、右ニて御免被成下候様小前之者申出候間、此段申上候旨申聞候間、夫は如何之事ニ候哉、又候手戻ニ相成候様被存候、此間弥三七・元蔵罷出申聞候は、御飯米ニ不限御小遣之儀も被仰付候ハヽ調達も可仕之旨申上候間、其段申上置候、然所今日又候右体申出候ては一向不取〆之儀申上候様ニも相当り候間、左様之儀難申上候之旨、色々利解申聞候所、村役之内壱人も答も不致利ニ伏申候、仍之終は今一応致相談候て心当之金主も御座候間、夫へも参り其上御答可申上、尤二日日延願候間三日日延申付遣候事

一 同廿六日加納宿上野長七来ル、右は白木御状箱御使之節取次之宿也、養老滝津瀬酒壱壺献上ニて口上書差出、左

年来御用被為　仰付難有仕合奉存候、今般御伺ニ罷出申候

加納宿御用取次
上野長七

右持参ニて口達ニて申聞候は、甚以追々不如意ニ付、御ねだりに罷出候、何分宜奉願之旨申聞候

一 同日弥三七罷出、今晩神明へ御礼燈灯ともし候段届出ル

一 右序ニ同人より内々申上候は、田方此節草取最中ニ御座候所、出情之者は草取候え共、不情之者は水無之場等一向手入レも不仕者も御座候、右は御評儀之上何レ共被仰出候様仕度、左候えは出情之者之矩模（規）ニも相成候様奉存候之旨申出候間、至極能心付候、勘考之上取計方可有之旨申遣し、則申上候所、明日見分致し、若草取不申場所も有之候ハヽ其者呼出急度申付候方可然旨被仰出候、

仍之廻紙ヲ以申遣候哉之旨伺候所、何レ御勝手方一件ニ付今晩村役共可罷出候間、其節口達ニて可申聞旨被仰出候

一 七月朔日御勝手方之儀ニ付庄右衛門被仰付被下候ハヽ、不行届儀も有之候節は私より其段可申聞候間、何卒庄右衛門へ被仰付被下問敷哉、武右衛門義も立入候え共、取しきり引受御世話申上候ト申ニも無之、御迷惑之所は此方計ニ候間、御勘考之上被仰出候様滝八郎よりも申上候ニ付、幸日柄宜候間今日可被仰付被仰出候て、則御書付御渡ニ付左ニ

申渡之覚

宮川庄右衛門

其方儀勝手向申付候間、山本滝八郎とも相談之上万事取計可申候、并ニ倹約向之儀心附候儀可申聞候、仍之苗字帯刀免許候間可得其意候、三日祝儀其外用向之節は以取次目通ニ罷出可申候事

文化六年巳七月朔日

右被仰付候ニ付、後刻為御礼罷出ル、孫市同断、村方へも右之段廻状ニて申遣、左ニ

以廻状申触候然は庄右衛門儀御勝手方差添被仰付候間此段（以下空白）

一 同四日村役三人呼出、盆前御仕廻金之儀三組ニて金五両調達致候様申付遣候

一 同日西市場村継右衛門悴沖右衛門来り書付差出候間、当番小弥太預り置申候、左ニ

乍恐書付を以奉願上候御事

一 私親継右衛門儀数年来当　御屋敷様へ御出入仕、御目厚御苦労ニ被成下置難有奉存候処、当春以来病気ニて養生仕候え共行届不申、四月十四日落命仕候、重病ニ罷成候ニ付は、当　御屋敷様御勝手御賄方え立入御世話仕、金子相賄御用達申置候段再三相尋申候処、八ヶ年以前戌年御書付金銀月々利合迄も御〆上ヶ御差引之表奉拝見候処、残金七拾四両余御帳面被下置、猶又翌亥ノ春ニ相成候ハヽ御勘定も可被成下候趣、冥加余リ候御書付被為下置候、然所亥年より辰年迄六ヶ年之内、不相替御出入仕候ニ付御手当も頂戴仕、猶又追々御返済被成下候趣、死後ニても御願申候様ニ申聞置候、然共甚病苦ニ搦れ、六ヶ年来之義抔一向六ヶ敷気ニ相見、強て相尋も得不仕、病気之障り不孝之筋ニも奉存、篤と訳合も得不承候内、段々病気も差重り、息継兼申聞候は、死後ニても御勘弁之御慈悲御手当而已奉願上候様ニと、遺言同様申聞候迄ニて、外事は不申聞、左も苦痛之体ニて死去仕候、兼て御存も被為成候親継右衛門儀、六ヶ年以前子年田畑家財諸道具迄も借用方へ差向、返済仕候え共行届兼、夫故継右衛門いつれを住所共難相極境界ニて、未熟之私、家内之相続必至ニ渡世ニ行詰リ難儀仕候ニ付、恐をも不顧、継右衛門遺言同様申聞候間奉願上候、何卒格別之御憐愍を以御手当被下置候様奉願上候、以上

文化六年巳七月

各務郡西市場村願主
沖右衛門印

前渡
御屋敷
御役人中様

右之願書預り置、時分故茶漬出し、帰し申候

一同日御勝手方之儀ニ付、滝八郎・庄右衛門両人二ツ屋与平治方へ罷越ス、右は当春御暮方へ差入候金子七両余之所、此節致返済候様催促有之ニ付、当盆前御六ヶ敷中々皆々不行届候間、金三両も致返済断可申、内相談ニて参ル、外ニ御模通筋之事も有之ニ付、参り候所留主ニて、暫待合候内与平治罷帰リ候間、右一件談事候所、何レニも一端元利共揃へ見せ候えは、直ニ又々貸候段申聞候間、其所能々取極候所、ケ様申上ハ相違なく直ニ貸シ可申旨申候間、左候ハヽ金子調次第可致持参旨相談申置候、井大津上納金引当金子頼候所、右金子ハ此節弟権右衛門戸田へ養子ニ参リ居候所、不縁ニて縁切金有之由、しかれとも未タ手ニ入不申候間、手ニ入次第調達可致旨申聞、何レ近々沙汰有之筈ニて、引取申候事

一同六日芋島村武右衛門来リ、庄右衛門同道ニて御逢之上申上候は、兼て継右衛門引合之芋島村清左衛門方御借用之分、当麦成御渡之筈之所、右証文仕替、其上金五両借増之筈ニ相頼候間、証文認被遣被下候様申上ル、井益前御仕廻方左略、書付ニて庄右衛門伺之上取極申候、扨又二ツ屋与平治方之儀、今日金子大概は都合候間、可致持参哉之旨被仰出候所、右寄金之分は銭大分ニ有之候間、其段与平治へ申聞、利足計リ致持参、直様是より武右衛門同道ニて可参旨申候間、則証文滝八郎認、左ニ

借用申金子之事

一金七両弐分也　但シ利足之儀ハ金壱両ニ付壱ケ月ニ銀八分宛

右は当方勝手方要用金之内え借用申所実正ニ御座候、返済之儀は当巳十一月切以収納米、元利共急度御勘定返済可致候、為其借用一札仍て如件

文化六巳七月

青山武右衛門印
宮川庄右衛門印
河北村
与平治殿　山本滝八郎印

此分相済候処、証文仕廻失候間書付取来ル

表書之通相違無之候

坪内嘉兵衛印

右可致持参之所、又々相談替リ、武右衛門義無拠事ニて是非今晩帰宅致度、是より出かけ候ても夜ニ入候間、明日ニも庄右衛門計り参り可申筈ニ相成候、尤武右衛門より手紙差遣候筈

一同日庄屋弥三七罷出、雨乞之儀申出候、右は惣産神之事ニ付薬師へ罷リ候由申出ル、井ニ虫送リ之儀是迄村方入組ニ付送リ不申候所、和熟之上今日送リ候由、尤虫送之儀は御届不申上候え共、先達て御沙汰も御座候故申上候趣申出候

一七日庄屋三人罷出、御仕廻金不行届候間御断申上候段申出候間、滝八郎も留主の事故罷帰候ハヽ可申聞候へ共、何レ御差支ニ候間、無手御断ニては相済申間敷段申聞遣候

一同九日夜新加納村玄良呼ニ遣ス、右役之儀は兼て近辺御百姓之内へ両人申付置候間、即刻罷出候間直様遣ス、井竜見取揚姥々・おつげ・おるん方へも参り候様申遣す、小弥太方おとや、右面々罷

出ル、九ツ頃より御腹痛御座候所、卯之上刻御安産御座候訳ニて、少々御むかひ気御座候へとも早速御快能御肥立御座候、庄右衛門方へも早速為知遣す、尤夜前可申遣所、庄右衛門儀名古屋へ罷出留主中故、夜明候てより申遣候所即刻申罷出候、玄良義七ツ頃引取ル、姥々儀ハ御安産後暫休、早々引取申候、今晩御夜伽おるん・おとや・女中壱人、右半夜替り相勤候

一同十日御伽おるん・お里う、姥々も伺、御湯いたし引取候

一今日より色々御祝物差上候え共、末々一堵(緒)ニ託置候

一(十一日)今日御乳付山東和吉妻しゆん罷出御乳差上申候、御酒御膳被下候て一宿致御乳差上申候、右は先年俣五郎様へ御乳付ニ罷出候間、右御吉例ニ付同人へ被仰付候

一犬山馬口労与八・浪人友山同道ニて来、御馬拝見之上頂戴仕度段相願候間、代金之儀相尋候所、札拾両ニ頂戴可仕旨申上候、此節正金と札と拾匁程も違候由、左候えは正金八両壱分五匁程ニ相成候間、則御払ニ相成、明日為牽差遣候筈

一半右衛門妻御祝儀申上ル

一おばゝ今日も御湯召させニ上候

一御乳張候ニ付、乳の不自由成小児御尋御座候所、河原屋敷彦蔵方小児来り、御乳戴申候

一元良・竜見相伺

一同十五日御七夜ニ付赤飯被仰付、餅米三斗壱升・米九升・小豆六升、　右配り方

一安池新太郎様　一同新三郎様　一柴田雄之丞殿　一平島様

一三井様　一永田清左衛門　一松本村庄屋忠吉　一松原牧右衛門

一加藤辰右衛門　一少林寺　一岡崎玄良　一苅谷竜見

一庄屋三人　一与頭三人　一御出入之者五人　一常貞寺　一桃春院

一久昌寺　一吉祥院(名古屋)　一勘六(同)　一弥作　一お志ゅん

一彦蔵　一山中様　一石谷様　一山本滝八郎　一同小弥太

一宮川庄右衛門　一堀半右衛門　一久蔵(各務村女中小せん親)　多七

一諦定(御中間引籠ニ付)　一明智庵　一おつけ(取あけば、)　一助右衛門(大工)　一永井正入

一忠蔵

〆四十五軒

御祝物左ニ

一末広二本酒壱升勘六　一木綿一反恵山

一御酒壱升半右衛門妻　一御祈禱札屋子箱二本入吉祥院

一末広包弐本おつけ　一御重一組茶飯安池様(かかん村)

一酒弐升寿るめ二十柴田雄之丞　一御菓子一包御屋子一包多七妻

一御酒壱升末広一包常貞寺　一御酒壱升末広一包苅谷竜見

一御酒壱升助右衛門　一末広包久昌寺

一末広包桃春院　一御酒弐升平島様

一御産着地うねおり永井正入　一末広一包久蔵(口村)

一御酒壱樽　弥作　一産着一重寿るめ一折安池様

一八丈単物　瑞昌院　一花染袷　久昌院

一花染単物地安池新三郎様　一御酒弐升庄屋・与頭・御出入

一金弐百疋　扇子一包　惣百姓
一鰹節一連　山本滝八郎
一扇子一包　小弥太
一鰹節二　宮川孫市
産着一ツ　名古屋
差鯖　山中様
一扇子一包　諦定
一扇子包しゆん　玄良
一御扇子箱　玄良
一御酒壱升　松本村　忠吉
一糀味噌　芋島村　武右衛門

一同十五日召寄られ候人数左ニ
一滝八郎家内不残二人　一小弥太家内不残四人　一孫市方同断五人　一刈谷竜見　一玄良（但当病ニ付御断）　一正入家内三人　一吉祥院　一勘六・弥作　半右衛門　おつけ　おしゆん　諦定方（但シ諦定不参）三人　右御酒被下
赤飯かけ合御料理被下候　智光方内人
硯ふた　生姜（するめ）　田作　玉子　鉢すし　小鯖丸　丼（にんしん）　したし　鱠（ずいき）　はちき豆
汁　とうくわ　あおみ　平玉子（いも）　なす　香の物　飯　焼塩かつを魚

一先達（廿三日）てより追々願出候日照ニ付畑方見分之儀、先頃九日出役申付候所、雨天殊更御出生ニて延引相成候所、今廿七日出役被仰付滝八郎罷出候所、芋格別之照ニ当り候趣ニ相見へ候、井ニ木綿・荏抔も余程痛ミ候様ニ相見申候、大豆ハ至て宜趣ニ見受候事、尤昨廿六日廻文出置候所、早朝弥三七案内へ来ル、弥兵衛へも罷出一（緒）堵ニ参り候事
一七月廿四日吉祥院罷出申上候は、関南光院へ参り候所、京都より御来状ニ付、私持参仕候旨申差出ス、左ニ
御名様　三宝院御門主御内
御役人中　左右田掃部　上書如此

藪豊膳

一書致啓達候、然は其御知行所濃州各務郡前渡村在之候当山派修験本明院、右院久々中絶之所村方よりも相願候ニ付、濃州関ニ罷在候当御門主御内修験南光院弟子相続為致度、申出候ニ付承届候、遠境御末派之儀ニ御座候之間、何分宜御計意之儀御頼得御意度、如此御座候、恐々謹言

七月廿三日　三宝院御門主御内　藪豊膳（春水）（花押）
左右田掃部（実緒）（花押）
坪内嘉兵衛様
御役人中

一八月七日三井より廻状順達有之、左ニ
以手紙致啓上候、然は大野村百姓伊助義、公事出入ニ付江戸表へ罷下り居候処、於寺社御奉行所一件御（赦）戴許有之、所払被仰付候間、大野村は勿論御知行所村々え一切為立入申間敷之旨、御支配下とも一同申渡候、此段御承知可被成候、右之趣可得貴意如此御座候、以上
己巳八月五日　今尾富三郎
今尾茂左衛門
山本滝八郎様
松原牧右衛門様
加藤辰右衛門様

一八月十日御使者山本小弥太被仰付、三井・平島へ被仰遣候は、明後十二日例年祭礼ニ御座候所、去年迄は倹約年限ニ付御出之儀御断ニ被及候所、右年限明ニも有之、殊出生之御小児参宮ニ付、御賑々敷御出被下、御祝ひ被成下候様致度、尤当年も旱損ニ付、別て御馳走は無御座候え共、御惣客様被為入被下候様申遣ス
一同十一日庄屋計、井壱組より惣代壱人ツヽ呼出シ、目録を以御酒被下候、演舌之上後刻取ニ遣し候様申渡、惣村方酒四斗五升・鰯拾五枚被下候
一同十二日三井・平島・安池様・柴田雄之丞殿、右御上下拾八人、但シ三井様は御侍二人也、加納よりは御駕籠弐挺、外ニ御宮参りニ付被召寄候者おつけ・お志ゆん・おるん、御宮参ニ付おりせ御抱申上御参詣、御供御侍弐人、御道具御挟箱・御長柄傘、女中弐人、桃春院へ扇子箱弐本入、御初穂二十疋、御帰懸滝八郎へ御寄り、三本入扇子被下候、同人よりも弐本入御扇子箱差上候、其外御勝手御取持犬山深津稲八殿・諦定・加納魚屋林右衛門、今日源右衛門、御召遣女中引越ニ付右母同道ニて来ル、御酒壱樽献上、駕籠人足共上下五人也、此外烈道家内三人・おしの子共二人・芋島村武右衛門・おとや・秀之助・いと、右荒増也
同十三日吉祥院罷出、明日関へ罷出候ニ付、御返書被遣候ハヽ持参可仕旨申出候間、則差遣ス、左ニ
貴札拝見仕候、然は当知行所濃州各務郡前渡村有之候吉祥院儀、久々中絶之所、村方よりも相願候ニ付、幸其　御門主様御内関南光院弟子本明院相続之儀願出候之所、嘉兵衛承届候ニ付、御来状之趣被入御念候御儀奉存候、右貴答可得貴意如此御座候、恐惶謹言
八月十四日　山本滝八郎（書判）
辻善兵衛（書判）
左右田掃部様
藪典膳様

一同十三日庄屋・組頭・惣代之者御礼ニ罷出ル、今日御酒頂戴仕候由、今朝より村遊ひ候て昼飯後桃春院へ寄合、惣方たべ候由、皆々余程酔候由ニ及承候、四斗五升之内弐斗程も余り候由ニ候
一同（十月）廿一日芋島村武右衛門来り御勝手向内談、庄右衛門同断、右は去ル九月晦日大津御役所へ参ルニ付、白木屋金一件両様相兼致上京候所、大津ニて七里左六郎殿相尋候処、此節検見ニて留主之由ニ付、直様京都へ参り白木屋ニて色々談合候処、先達て借用致候五拾両金六ヶ鋪申聞候ニ付、此度仕法相立相頼申候、右は御高半分御借用ニ当、半分之所ニて御暮方取賄候間、当暮出金之儀相頼候所、白木屋手代清兵衛と申者色々勘考之上、相談ニも相乗り可申旨申候間、左候ハヽ年限十ヶ年と相定、一ヶ年分米百拾石ツヽ年々御渡申候間、右ヲ以借用方御左略被下候へは、一ヶ年一ヶ年と立候程借用方減候間、其節ニ相成御出金御引取之上ニも少々ツヽ残金も有之候間、何レニも御頼申候旨申候処、清兵衛申聞候は何レニも少林寺へ御引受被下候ハヽ、金子は何程ニても出金可

致候間、弥々其思召ニ候ハヽ、当月中ニ少林寺和尚御同伴被下候ハヽ御相談可申旨申候間、可然御頼申候段相頼罷帰り候て、大津海津屋へ立寄、七里氏相尋候処、未帰り無之由、仍之当冬所は荒増白木屋ニて内談致候間、少は心丈(夫)婦ニも候間、留主幸ニ先々宅迄見廻置、何レ近々上京之節又々立寄可申旨演舌致、引取候方可然ニ付、島壱反相求、右ヲ以七里氏宅へ参り、庄右衛門より内室へ口上相述引取候事、右之様子ニ付、今廿一日何角書類取調、明廿二日少林寺和尚同道ニて、武右衛門・庄右衛門致上京候様被仰付、右書類左ニ

一金百五拾両也　大津御役所金

但シ巻割利足を以去辰年より八ヶ年済、右之内去辰年分返納元利共ニ不相納

一金弐拾六両也　伊勢御役所金

但シ巻割利足差帯当巳年皆済返納分

一金七拾五両壱分ト銀八匁六分　京金元利〆高

一金弐百五拾七両也　少林寺

是より古借分

一金五拾五両也　長塚金

一金弐拾壱両也　草井金

一金百両也　同断

但シ年々六両ヅヽ利渡之筈、追々相渡去ル子年より辰年迄五ヶ年不相渡

一金拾五両也　安良金

一金弐拾六両弐分　廻間金

一金六拾六両　更木金

〆金七百九拾壱両三分　八匁六分

外ニ金九両ツヽ構金

右之通借用方取調御渡申候、以上

文化六巳年十一月　青山武右衛門印

宮川庄右衛門印

山本滝八郎印

少林寺御納所

右之通ニ有之候　坪内嘉兵衛印

右直紙横帳也

振向証文之事

一当屋鋪不勝手ニ付、先年貴寺御頼申金子御口入被下候処、多分ニ差滞候ニ付、其段江戸表本家え御達御座候処、速ニ勘定可致旨被申渡、右ニ付元利金都合弐百五拾七両、当巳年より寅年迄壱ヶ年金弐拾五両三分三匁ツヽ、十ヶ年済之筈ニ相究、証文御渡申置候所、追々手後レ、殊ニ当年格別之旱魃ニて　御公儀金ヰ貴寺年済金返済方差支、手操難相成ニ付、当屋敷知行高六百石之内、三百石之物成ヲ暮方ニ引当、残り三百石之物成、定免として百拾石ツヽ、来午年より卯年迄拾ヶ年之間、年々御渡シ可申引合ニて、当巳年より借用方貴寺御頼申御引請被下　御公儀金ヰ貴寺御借請金等、当暮之儀は此上貴寺より御借入御取計被下、其外右借方之儀も夫々御取計可被下候、然上は御引合通納米百拾石宛、拾ヶ年之間御渡シ米之儀ニ少も違変申間敷候、為後証振向証文仍如件

文化六巳年十一月　坪内嘉兵衛内

青山武右衛門印

宮川庄右衛門印

山本滝八郎印

少林寺

御納所

表書之通相違無之候　坪内御名御印

一十一月八日三井より平島様御連名之御状箱来り候処、御留主故平島へ持参候様申遣候所、同九日平島より右御状箱持セ御順達有之、左ニ

一筆致啓上候、寒冷之節御座候え共弥御堅勝被成御座、珍重之御儀奉存候、然は拙者妻縁之義尾州名古屋阿部石見妹縁組致度、依之江戸表へ願書差出し申度奉存候、貴公様方よりも御願可被下候、右願書之義先年江戸表より前渡表御同苗様より御差図被下候趣を以下書いたし候、則願書ヰ書簡共別紙懸御目ニ申候、御勘考可被下候、例之通御両所様よりも御願御添状被成可被下候、何分可然様奉頼上候、恐惶謹言

十一月八日　坪内太郎兵衛　定高（花押）

坪内嘉兵衛様

坪内佐左衛門様

参人々御中

掛合日記之覚

一十月廿五日京着、三条通日光屋八郎兵衛方ニ止宿

廿六日天気

一同日早朝白木屋善右衛門方へ相越、清兵衛ニ面会いたし、先達て、御引合ニ付証文ヰ借用方取調へ別帳ニ記持参致候由申候処、清兵衛被見之上申聞候は、先達て御引合とは大キニ相違致候、此様子ニては何方ニても買人無之、御相談ニ及かたく、猶又私一存ニも御答相成かたく、何れニも買人有之候様之御勘考可被成、私儀も篤と相考可申段申聞候ニ付、一先ツ引取申候、右ニ付日光やニて段々相談仕候へ共、精々始末取調候故致方も無御座、ゆり居て駈合候方可然旨決評いたし候事

廿八日天気

一同日白木屋へ相越、清兵衛ニ面会いたし候処、同人申聞候は、御勘考筋ハ如何之由相尋候ニ付、勘考と申候ても始末精々取調へ証文等も相認メ参り候えは、何れニも此向キニて世話いたし、呉候様相頼候処、私儀は何分御せ話致候へ共、此ふり合ニてハ中々当地ニおいてハ何方ニても取合申間敷、殊ニ先達て之御噺之趣は、来午年ニ至利足分引残元方へ当分之金子相応ニ相残り候様相見へ候処、其儀も相違、殊ニ当巳年御収納米之内も弐拾両程ハ残金御座候由御申聞御座候処、其段も相違致候よし申聞候ニ付、私共相答候は、成程先達ても申入候通、廿両程過金も有之候へ共、御役所金所々御座候故、右廿両之内ニて笠松御役所金返納十三両之処

屋敷え引受返納いたし、引残金七両之儀は仕舞金勝手掛之外ニ無拠払方有之候故其方へ振向申候、左候へは先達てハ伊勢・大津・笠松三御役所金ニ御座候由御引合申候処、笠松一方十三両を屋敷へ引受候ニ付、当巳年御借請金高先達て御引合とは拾三両相減、伊勢・大津両所ニいたし候段申披、道理明白ニ御座候、右ニ付清兵衛申候は、此儀御尤ニ御座候え共、何れニも此御調方之金高ニてハ迚も金主方取合不申候間、此趣ニ相限候ハゝ御断申上候段申聞候、右ニ付清兵衛重て申聞候は、田舎之烏子も都のからすも羽色ハ替り不申、眼前十露盤粒の合ぬ事ニ買人ハ無御座、又売ニも被参不申候間、直段之呼り声立られ候様之御勘考可然と、十露盤を押むけ立会ニて種々と談事候え共、致方無御座ニ付私共清兵衛え申候は、左候ハゝ如何いたし候て宜敷御座候哉、其元より直段ヲ立、御屋敷も行立、借用方も取治り候様之発端承知致度旨相尋候処、同人申候は、先ツ此講金之儀は借用方之外ニ御座候へハ、此九両ハ御除キ可被成と申候ニ付、私共申答候ハ、迚も此九両を除候てハ御勝手方難取計候間、左候ハゝ屋敷より四両弐分・少林寺より四両弐分持合ニいたし度旨少林寺へ相談ニ及候処、和尚不構嫌ニハ御座候へ共無是非承知被致、講相満候まて年々四両弐分ツゝ掛金被致候段御引合ニ及、其段清兵衛へ申候、右ニ付同人申候は、古借方之儀当巳年より御両人之御世話ヲ以、年々少林寺様より御取計御座候よし御申聞有之候え共、当年之儀ハ前代未聞之旱魃、田方抔ハ皆無同様と御座候へハ、此年柄ニ七両弐分御取計御座候てハ、来午年より豊年引続七両弐分ニて之御取扱ハ無心元、

さすれハ当年之儀は御断而已ニて御取計可被成候段申聞候ニ付、左候ハゝ其積ニて勘考致呉候様申候ニ付、又々清兵衛そろはんニて荒勘定相当り候処、行届かたくよし申候へ共、何れニも此上致方ハ無御座候間、此ふりニて世話いたし呉候様、尚又講金四両弐分之儀ハ来午年よりハ屋敷より懸金可致候へ共、当巳年分ハ借請申度段引合、此儀は承知ニ御座候、干時清兵衛申候大津三拾両之新金、年々四両弐分ツゝ利足払ニいたし元金借り居ニ致置候てハ、畢竟此方より三拾両返金致候様ニ相成候へは、是又勘定之外ニ相当り候へハ、何れニも御引合ニ及かたく段申候て破談ニ相成申候ニ付、和尚被申候ハ、両人之もの両度も上京いたし証文迄も取極候事故、此節破談と相成候てハ拙僧始両人之者嘉兵衛殿え申訳無之気毒いたし候間、戌年ニ至り候ハゝ拙僧方より新金三拾両元金は返納いたし可申候間、何れニも世話致呉候様相頼被申候ニ付、左候ハゝ先右之訳合主人え可聞（ママ）と候ニ付罷帰申候

十二月七日若来　二条様御役人馬淵徳兵衛殿・大塚屋清兵衛来、相談之上証文下左ニ写置

奉拝借御用銀之事　利足月壱歩三之定

合銀拾六貫五百目也

右は　二条様御殿御修覆料御用銀之内、書面之員数慥ニ奉拝借候所実正明白ニ御座候、尤右は御要用第一之勝手当銀被為有えは、御臨時御用之節は何時ニ不限返上納可仕義勿論ニ御座候え共、先来午十一月廿五日限元利相揃聊無相違急度返納可仕候、万一拝借

主如何様之故障出来仕候共、其節は本人不抱御約定限月之通無間違、証人共より急度返上納可仕候、此段毛頭異変仕間敷、為後証連判一札仍て如件

文化六年巳十二月　　濃州各務郡新加納村　少林寺
　　坪内嘉兵衛家来　青山武右衛門
　　同　宮川庄右衛門
　　京都東洞院通□地上ル町　大塚屋清兵衛

二条様御殿
御役人中

前文之通御銀高奉拝借候所相違無御座候、万一返上納相滞義有之候ハゝ、我等引請聊無相違急度返上納可仕候、依て奥印書如件

文化六年巳十二月　　濃州各務郡前渡村　坪内嘉兵衛

二条様御殿
御役人中

別紙一札之事

一本証文御銀高之通慥ニ奉拝借候所実正明白ニ御座候、尤右は御要用第一之御手当銀ニ被為有候えは、御臨時御用之節ハ限月不抱急度返上納可仕候え共、則為引当私知行地

高六百弐石八合四勺四才

右之通書入差出置候上は、若拝借主返納相滞候歟、又は如何様之故障出来仕候共、右知行所引当ニ差出置候上ハ、関東表え御届ケ之上如何様ニ御取計被成下候共、其節ニ至り聊異変仕間敷候、為後証別紙一札仍て如件

文化六年巳十二月　　坪内嘉兵衛

二条様御殿
御役人中

一札之事

一貴寺大旦那家坪内嘉兵衛様御勝手方差支御難渋ニ付、六百石之御知行高之内三百石之御物成を以、御借用方貴寺へ御引請之上、別紙証文写面之趣ヲ以、金子口入致呉候段御頼ミ御座候ニ付　二条様御要金御世話申、銀拾六貫五百目御拝借御座候て、御証文之表ニては来午十一月廿五日限ト御座候え共、別紙御借用方御調之通り、百拾石之内ニて年々ニ御返納御座候筈ニ、御役人中へ私より御頼申上置候間、百拾石之御渡米ニて御引合通急度御取計可被成候、為其仍如件

文化六年巳十二月　　大塚屋清兵衛印
少林寺

覚

一高拾六貫五百目也
　内弐貫五百七拾四匁　巳十二月より午十二月迄　御利足
　又壱匁　御証文料
　引て拾三貫九百廿五匁

此金弐百拾七両弐分ト銀五匁相渡ス
巳十二月七日
右之通り相渡シ申候
二条殿役所
少林寺殿

（表紙　白紙）
「　（文化七午年）　」

一山東久蔵娘縁付届
一太郎兵衛様御再妻御願済ニ付礼状留
一半右衛門方新客
一犬山妙海寺証文留
一与三右衛門山東和兵衛相手取馬一件
一御尋者人相書
一新加納御影披露
一南都薬師寺勧化御触留
一安藤対馬守御死去
一公義　おらく様御死去右ハ　大納言様御実母之由
一坂泉竜平左衛門病死
一人別御改留
一犬山町方火災ニ付御見廻御状留
一御本家御三男様御誕生
一永井出羽守様御在着一件ニ付御着御祝儀状
一成瀬様御返書留
一切通御陣屋より之返書留
一大溝お増様御死去ニ付御来状留
一加納より御徒使

一当村祭礼踊願一件
一山東浅右衛門娘縁付
一弥三七病死ニ付跡役申付候一件
一上中屋天神枯木銀割賦之事
一御本家御幕御貰之一件
一同前野半右衛門御家老被仰付候一件
一切通陣屋より御使
一平島奥方離縁ニ付郡上小出之内方より由来候御紙上之事ニ付一件
一御本家御影御拝借被成度前野迄之御内書
一信楽御役所拝借願一件
一安藤様御家督御祝儀使者一件
一笠松拝借金上納廻文留
一山東方御林落葉掻取候一件
一円照院様十三回忌御法事
一常貞寺御大会ニ付御寄附之事
一山田拝借金之儀ニ付松木より之来状
一綱平聟入ニ付届出ル
一信楽拝借金証文留
一伊勢拝借金証文留
一京金返済一件
一三井婚礼一件
一北島銀蔵娘嫁入届
一笠松拝借金一件
一大津御役所へ上納金断一件
一酒造蔵不埒ニ付村役一統願出候一件

（正月）
同五日
一当村利助罷出、半右衛門方新客之由御庭迄罷出度旨申出候間、先々より罷出候儀哉之旨相糾候所、先々は不罷出候由申候間、左候ハヽ罷出候ニおよわす、殊ニ以前広ニ沙汰も無之、押付ケ間敷も有之、殊ニ半右衛門客ニも無之弟丈四郎客之由ニ有之候えは猶更之儀ニ付、其段申聞相帰し候

同十八日
一滝八郎犬山へ年頭ニ罷出候ニ付、妙海寺へ証文致持参、左ニ
借用仕一札之事
一文金拾両ト銀拾八匁也　但シ一ケ月金壱両ニ付利銀六分宛究
右之金子借用申所実正也、依　高祖大聖人三枚続御本尊一軸御預ケ申置候、然上は来巳ノ十二月廿五日限元利共無滞返済可仕候、若及遅滞候ハヽ右一軸御自在可被成候、為其一札仍て如件
文化六巳年十二月　山本滝八郎印
犬山
妙海寺
知事御法中
右返り
同廿七日

一前渡村本郷西組与三右衛門、先達てより追々馬一件願出候え共、村役切ニて相済候様申聞候所不相済由ニて、当廿二日願書差出候、右願面は、去八月与三右衛門馬山東方和兵衛替馬致候所、其節金弐分打金致候て牽替候処、右馬足痛候て一向用ニ立不申候故、其段申聞候て又々牽替候様ニ申頼候所、右馬和兵衛牽出参り候後一向無差別候ニ付、追々懸合候え共利不尽計申候由、然共元来金壱両ニ和兵衛直は(を付か)候馬故金壱両と致シ、其積りニ致相対候て手附金弐分は打捨、馬ニ当り候壱両分相立候様懸合候え共不行届、内少々受取、残り金全之所三分相滞候間、無拠願出候趣之願面也、仍之今日双方呼出相尋候処、与三右衛門義は願書之趣申立候、相手方和兵衛相尋候所右申口、右馬之始終無相違御座候、併金壱分弐朱ハ右馬今以和兵衛方ニ居候間、右馬売払次第与三右衛門へ金子可相渡申候所、延引之段不承知ニ付御上へ御苦労相懸申候、和兵衛義も出入七日程右馬ニ相懸居候間、一日弐百文ツヽ之日庸ニ相当候程被下候様ニ申頼候、外ニ馬牽出候節金壱分ト百文受取居候、此分は相立候之趣申聞候間、村役共よりも一応御下ケ可被下旨申候間相下申候、然所双方納得致シ、壱分弐朱ト百文ハ和兵衛より出銀致シ、残り壱分弐朱ハ馬ニ相当候えは、馬売次第勘定可致筈、然共至て悪馬ニ付、若壱分弐朱ニ売れ不申候節ハ和兵衛より足しては出銀難致旨、為念与三右衛門へ懸合置候、然上ハ与三右衛門よりも日庸代として壱貫五百文和兵衛へ可遣筈ニ取極申候、仍之願書願下ケ之節御請書ニ右壱分弐朱馬ニ当り居候訳御書加へ可被下之旨、庄屋元蔵・弥兵衛、与頭惣左衛門・平右衛門申出候間、其趣ニ取調申候、与三右衛門親類甚三郎・和兵衛親類五兵衛罷出候

一(三月)此度御影御披露ニ付、新加納村役太平二諸色小見セ物等引請者共へ三人者より及沙汰候趣ニ付、少林寺和尚挨拶御座候て差出候一札左ニ、懸合候事ハ日記ニ有之ニ付略ス

差上置候一札之事

一今般御本家ヵ御三所御知行所より願上候真向　御影御披露中、私共奉願、小見セ物色〳〵引請取計申候、右小見セ物興行仕候えは諸人之足留ニも相成可申哉ニ被思召、見セ物小家裏ヵ茶屋之小家かけ裏ニおいて、若心得違之者有之、御法度之勝負事いたし候もの有之節ハ、御銘々様御支配下之衆中立寄り被申、心得違之筋取扱可申哉、千一(カ)左様者有之、御陣屋御役人様方御見咎メ等御座候てハ　御本家様え被為対御三所様御外聞不宜、勿論御銘々様方被仰訳も無之被思召、付ては御内存之筋も御座候よし御尤至極ニ奉存候、右御法度之勝負事堅ク相慎ミ候様、従御本家様被　仰出候えは、心得違之義急度為仕不申候、御銘々様御支配下之衆中心得違之もの出き申間敷哉無覚束被思召候段、村役人之内え御内沙汰も御座候由申聞候、右申上候通堅相慎ミ罷在候えは全ク御心遣之義無御座候間、御銘々様御存念之筋御座候共御延引被成置ヵ被下候様、少林寺御納所様え御頼申上候所、御聞済被下置候段難有奉存候

一御三所様より見セ物御見物ニ被為入候節ハ、前々之通り御桟敷

拵へ置、聊御手支無御座候様仕、麁末之義仕間敷候、且亦御家中ヵ御中間衆ニ至迄如才之取計致間敷候

一此度は小見セ物類私共引請取計候え共、以来御披露之節右体之小見セ物村内之者共之内引請取計候迚も、今度形を以御桟敷之義御手支無之様急度可仕候段、村内承知仕候ニ付、惣代之者ヵ組頭之内加判仕候

右之趣少も違乱仕間敷候、仍て差上置候書附如斯御座候、以上

文化七年午三月

新加納村 勧進元　治兵衛印

右同断　藤吾印

前渡御屋鋪
山本滝八郎様
平島御屋鋪
松原牧右衛門様
三井御屋鋪
加藤辰右衛門様

右之通勧進元之もの共申上候ニ相違無御座候村内一同承知仕候ニ付、私共加印仕候、以上

同村組頭　七郎治印
同村惣代　七蔵印

表書之趣拙僧相願候ニ付、取計申候ニ相違無御座候処、仍て如件

少林寺　納所印

(六月)同十九日新加納御陣屋より廻状左ニ

以剪紙致啓上候、然は当午年人別御改ニ付、御支配下村中当六月晦日迄出生以上之人別、僧坊百姓男女共御糾被成候、来七月四日巳之刻当御役所え御書付御差出可被成候様、御達可被成候、右之趣大塚甚三郎より御達可申候え共、未タ病気引籠罷在候ニ付、私より得貴意候、已上

庚午六月十九日

当番　今尾富三郎

山本滝八郎様
岩佐清蔵様
加藤辰右衛門様　三井へ順達いたし候

七月四日御差出

人別御改覚

一男三百五拾一人
一女三百五拾八人
〆七百九人
一僧二人

濃州各務郡　前渡村
禅宗　桃春院

一尼三人　　同宗　妙知庵

一僧二人女二人　　三拾ヶ年来中絶之所去辰年より真言宗相続人　吉祥院

一尼二人　　法花宗　久昌寺

一坊主三人女二人　　浄土真宗　常貞寺

一坊主三人女二人　　同国葉栗郡下中屋村西入坊舎弟前渡村住居　諦定

惣〆七百三拾人

右は当午年人別御改ニ付、当歳以上之男女僧尼相改差上申候所相違無御座候、依て如件

文化七庚午年七月　　坪内嘉兵衛印（花押）

坪　式部殿

右之上包直紙、上書人別御改書　　御名

一筆啓上仕候、然は当年知行所人別御改ニ付入念相改、此度証文差上申候、右可申上如此御座候、猶期後喜時候、恐惶謹言

七月四日　　御名

坪　式部様　　御書判

参人々御中

一筆致啓上候、然は人別御改ニ付知行所相改証文差出申候、可然頼入奉存候、恐惶謹言

七月四日　　御名

前野半右衛門様　　御書判

一同廿六日当村若者政蔵・彦三郎　罷当年（出脱か）雨順も宜敷候間神楽入事ニ子供踊為致度、尤山東方之儀は去年之旱魃ニ付、断ニは御座候へ共故障之儀は無之間、御聞済御座候様申出候間、追て沙汰ニ可及候間引取候様申聞遣候

一同三組庄屋共呼出候所、元蔵・弥兵衛ハ他出ニ付、喜藤次計罷出候間、若者踊催度由申出候、村方故障之義は無之哉之旨申聞候所、追て可申上旨申候、尤故障無之候え共喜藤壱人（次脱か）故又々申出ル筈、同夕弥兵衛罷出、村内故障無之之段申出候

一同廿七日与頭惣左衛門罷出、庄屋元蔵いまた鵜沼より帰不申、依之昨日被仰聞候村方祭礼之義惣方故障無御座候間、御聞済御座候様申出候間、即刻若者両三人も罷出候様申遣候処、若者惣代三人罷出候間、左之通書付取之

午恐奉願上候口上之覚

一当八月定日神祭例年之通神楽仕度、就は子供俄踊為致度奉願上候、村方は勿論惣若者納得之上故障之儀無御座候、何卒御聞済被下置候ハヽ難有仕合奉存候、依之惣若者惣代午恐以書付御願奉申上候、以上

文化七庚午七月廿七日　　若者惣代　柳蔵爪印　政蔵同

御役人中様　　次右衛門同

一（八月）同月十八日夜山東方弥兵衛罷出、浅右衛門娘山の脇村甚兵衛方へ縁付ケ候之旨届出ル

一去ル七月弥三七病ニ付、跡役之儀村方よりも不申出候間此方より催促致候処、庄屋元蔵・喜藤次両人罷出申候は、両度寄りを付致相談候へ共、村方ニて存付候者無御座候間、御上御目鑑ニて被仰付被下候様申出候間、左候ハヽ以書付相願候様申遣候所、八月廿三日書付差出、左ニ

午恐書付を以奉願上候

一弥三七跡役之義ニ付、小前一同打寄相談仕候所、誰ト申上候者も無御座候間　御上様之御目鑑ニて被仰付被下置候様奉願上候、誰へ被仰付候共村内故障不可奉申候、右之段一同奉願上候、以上

文化七午年八月　　百姓惣代　久右衛門印　八郎兵衛印

御役所　　勘六印　新吉印

御役人中様

右之趣御願申候ニ付、取次奥印仕奉差上候、以上　　当番庄屋　元蔵印　喜藤次印

右書付差出候間、於当方種々致評義候へとも誰ト申人も無之、先は喜左衛門へ被仰付可然哉之旨御沙汰ニ付、其段内々喜藤次へ相咄、猶又村方存寄も候ハヽ可申上旨申聞候所、一端引取夕方迄ニ又々可申上旨申聞、相下り候、則夕方当番庄屋元蔵罷出、御内意之趣及相談候処、喜左衛門へ被仰付可然様午恐奉存候段申出候ニ付、差紙左ニ差出ス

喜左衛門　　百姓惣代　両三人

右之者召連、庄屋・与頭相揃、明廿四日朝五ツ時罷出可申候

外ニ造酒蔵

同人義も右刻限召連罷出可申候、以上

午八月廿三日　　御役所印

本郷両組　庄屋　与頭

追て申遣候、何れも印形持参可申候、其節差紙相返可申候、以上

同廿四日五ツ時惣方呼出、申付書付為致、左ニ

御請申上候事

一庄屋組頭隔年相勤申候弥三七病死後、跡役之儀小前一同打寄相談仕候所、名差御願申上候者も無御座候故、　御上御目鑑ニて被仰付被下置候様奉願候ニ付、此度喜左衛門へ当年組頭役ヵ隔年庄屋役相勤候様、弥三七同様被仰付奉畏候、然上ハ於村内故障無御座、惣方難有奉存候、依之連印御請書奉差上候、以上

文化七午年八月

前渡村百姓代　久右衛門印
同　断　新　吉印
右村庄屋　喜藤治印
立会当番庄屋　元　蔵印

御地頭所
御役人中様

「紙貼　印鑑
（貼紙）「印鑑㊞　喜左衛門㊞」

御請申上候事

一親弥三七跡役此度喜左衛門之被　仰付候段被　仰渡奉畏候、右御請書奉差上候、以上

文化七午年八月　造酒蔵印

御地頭所
御役人中様

右御請申上候ニ付奥印仕差上申候、以上

庄屋　喜藤治印

八月廿六日新加納御陣屋へ喜左衛門御届ケニ罷出候ニ付、添書遣文面左ニ

以手紙致啓上候、秋冷相催候え共各様方弥々御安全ニ被成御勤仕、珍重ニ奉存候、然は本郷方東組庄屋組頭隔年相勤申候弥三七跡役、当年組頭役喜左衛門と申者へ弥三七同様申付候間、御用向等御座候ハヽ同人へ被　仰付可被下候、右為御届罷出申候間、宜敷御頼申上候、以上

八月廿六日　山本滝八郎

御陣屋
御当番中様

尚々本文之趣殿方様へもよろしく奉頼候、以上

同廿九日上中屋村　天神祢宜次郎左衛門罷出、御境内枯木御払ニ付、御陣屋ニて右代金御割賦ニて御預置被下置候様申参候ニ付、当方分金壱分ト銀六分三厘、此銭七拾三文、預り置、持廻り書付左ニ

覚

一金弐両三分ト銀拾弐匁壱分五厘
枯松拾弐本御払、斧障木代共

此訳

一金壱分ト銀六分三厘　三井　加藤辰右衛門
一同　平島　松原牧右衛門

一同　前渡　山本滝八郎○

一銀拾三匁弐厘五毛　松本山之脇庄屋　四郎右衛門

一金壱分ト銀拾壱匁五厘　無檢寺　永田清左衛門

引残

金壱両弐分ト銀壱匁壱分八厘五毛

御本家
御陣屋○

右ハ上中屋　天神御境内御払木代金、如書面致割賦、右村次郎左衛門を以御預り銀相廻候間、御銘々御分御請取被成候上、割賦当り銀之肩并御名前ニ御調印、御順達、此印紙御返却可被成候、以上

文化七午年八月

金掛　今尾留三郎○
当番　今尾茂左衛門○

永田清左衛門殿

持廻　書付

其外共

（十月十一日）
一筆申あげ侍候、次第ニひやゝかに相成侍候え共、先ツとや御機嫌克御入なされ、めてたく御うれしく存上侍候、其後は前渡様へハとなた様へも御無沙汰計、申わけもなく、となた様へも宜御咤被仰上可被下候、さてハ此度佐左衛門殿より松原牧右衛門御使者ニ爰元へ被遣、おかじとの其御家風ニ合不申故、御不縁被致候まゝ、此段浅（朝）比奈藤兵衛殿方へ申通候様ニ、弥左衛門私方へ被仰越候、御不縁と有之上は致方へ無之候え共、佐左衛門殿近頃御召仕女中きつう御気ニ入、右之もの常々御梶とのへたいし無礼之振舞共ニて、御国なとも近付ケ不申候て彼是取計、御夫婦之中何かと申妨をなし候趣ニ粗承知致侍候、左様之御事ニて御不縁と申てハ如何敷、私儀平島之儀は寄光院出所ニ候えは、藤兵衛へ対し不縁之事申通候も、右女中其訳被差置候てハ迷惑致候まゝ、申通かたく候、それとも私面皮ニ御とんしやくなく御取計之事ニ御座候哉、此所ハ佐左衛門殿ニも士道之訳を以、何分議理合立候様とくと御勘考被下候様致度存候、お梶との身分よろしからぬ事候ハヽ、外人之御世話と申ニも無、私御世話之事ニ付、異見ニ及候てよろしく候ハヽ、一二応も是迄御申越候て、それをも不被用候上之事ニ候え共（はか）致方へ無之、藤兵衛も得心と申もの ニ御座候、是迄一向左様之事なく、此度不存寄差懸り牧右衛門へ御口上ニて驚入、他人ヶ間敷御取計、何共迷惑致候、此段宜佐左衛門殿へ被仰通被下、近頃御セもじなから、御二方様御内々筋能様御取計被下候様、御頼申上候、牧右衛門へ右之次第返答可申候へ共、同人事佐左衛門殿御威光ニ恐侍候て得申上かね可申と存侍候まゝ、牧右衛門へ之佐左衛門殿へ御答ハ一通りニ、右之事ニ付御二方様まで申上候筋有之候まゝ、定て佐左衛門殿へ御通可有之候まゝ、御承知可被下、

右之訳之分り申候上ニて、此度被仰下候御口上を以、お梶との不縁之事藤兵衛方へ可申通候段相答置候て、牧右衛門ハ差戻申候、佐様思召被下、何分宜御取計可被下候、太郎兵衛殿ニはあまり近き間柄ニ付、私之事を御贔屓之様ニ平島ニて御心之処も難計ニ付、嘉兵衛様へ乍御面倒御連名ニて御セもじ御頼申上候、被仰合よろしく御取計可被下候、此段可分〳〵御頼申上候、めてたく申上候以上

菊月廿八日　　小出弥左衛門内

坪内

嘉兵衛様

太郎兵衛様

参人々申上候

尚々、くれ〳〵御世話様之事恐入侍候、本文之通たとへ熟縁ニ不参候とも、其筋相立候えは藤兵衛へも両人共申聞能ニ付、此段御頼申上候、兼て去年よりちら〳〵沙汰承候故、平島近辺之者を便り、お梶との様子、御家内之様子承置候て、手前ニても朝比奈ニても承居申候ゆへ、御仕向之よからぬ事ハ承おり侍候、扨〳〵何共こま入侍之事ニ御座候、しかし本文之通私心得違ニも御座候ハヽ、何分無御遠慮、御両所様より御教、御異見可被下候、此段も外ならぬ御方様方、何分願侍候、以上

右文十月十一日三井より来に付、当方ニて致開封一見之上、翌十二日三井へ参り右一件致相談候処、来ル十五日平島へ三井同道ニて参ル筈

一同十五日平島へ三井同道ニて参り、先右来状を平島ニ見せ、如斯申来り候、ケ様之儀ニも候ハヽ一応御沙汰も可有之儀、私義一向不存驚入候之旨申演候処、佐左衛門殿申候は、兼て可申上存候え共、先々離縁之上可申上と存候は無念之由被申候、先右体申参り、私共両人より返書差遣申さねハ不相成候、如何申遣へく候哉、何レ御存念之所致承知度、并御離縁ニ付は如何様之儀共思召ニ入不申哉、其御趣意も承度段、色々申演候処、佐左衛門殿答ニは、何も申立候程之趣意無之候之旨被申候故、左候ハヽ御離縁ニも及間敷事ニは無之哉、後日ニ如何様入組、若郡上表より本家へ懸合等ニも相成、其節本家より尋等も有之候節は、拙者共迄も迷惑候間御尋申置候、被仰立候程之御趣意も無之御離縁と申儀は、余り御勘弁薄ニも相当り候儀ニは無之哉ト、三井両人ニて色々申候所、左候ハヽ御内々申入候、平生夜具等も絹布のミ着致し、無理ニ木綿夜具着セ候処、翌日風邪之由ニて平臥致候、其外万事右ニ順シ者り候間、勝手不如意之儀ニ候へは中々相続不相成、左候へは先祖へ対し不孝ニも候間離縁致度との事故、夫式之儀は被仰立候ニも無之由申候へは、佐左衛門申候は、夫故趣意は不申候、只家風ニ相不申由申立候儀ニ御座候之旨被申候間、夫は何とやら郡上表より申越候、御召遣之女中ニ抱候様ニも相聞候之旨申候処、佐左衛門殿被申候は、拙者気ニ入女と申者は無御座、如何之事ニて郡上より右体申参り候哉之段被申候間、三井被申候は、御口上ニては間違候事も、御座候間、其段鳥渡御書付被下候様被申候て、拙者ニ案文致候様三井被申候間案文致候、文面は中(宙)ニて覚不申候間

其筋而已留置申候、其文は、此度家風ニ相不申致離縁度、就は郡上表被申越候ニは召遣之女之内拙者気ニ入候者無之、尤拙者右之通ニ付外々家来迄も同様ニ御座候、何レ離縁致度候間、本家表并ニ郡上表共可然御頼申候との文面也、右案文ニ佐左衛門殿自筆ニて、右之通相違無之、両人名、佐左衛門と認させ、右書類は三井持参也、右ニて又々追て之事ト申引取候、雨中大雨ニて帰り大難義也

一同十九日三井へ、郡上・本家表之儀如何可致哉ト、拙者も参御相談申度候え共、余り度々参り候間、御閑暇ニも御座候ハヽ御出被下間敷哉之旨申遣候処、廿一・二日頃可参旨申来り候、則廿二日三井相見へ、色々及相談候処、先々暫く見合、其内淋しく相成候時分ニ、焼直しも出来間敷者ニも無之候間、今暫く相合候方可然旨致一決候、右ニ就は内々謀計之事共談事候事

一当年も御勝手六ヶ鋪ニ付、幸此節笠松表へ信楽元メ杉原清九郎殿出張ニ付、右方へ相頼、信楽御貸付金願込可然旨ニ付、右杉原氏は野口村安積清左衛門(右か)縁家ニ付、右安積相頼可致同伴、并逗留之様子聞合旁日間取候内、廿七日出立之由ニて跡ニ相成、依之庄右衛門安積へ参り致内談候処、是ハ押付参り候ても出来之事ニ御座候え共、為念文通致置候も可然候間、幸近日米上乗り致し桑名迄参り候間、其節御状致持参、拙者よりも添手紙致候て、四日市ニは出張御役所御座候間、夫迄持込ませ候へは早速相届候間、明日ニも御状私宅迄可遣段被申候間、則翌廿八日右書状認メ為持遣候、案文左ニ

未得貴意候え共一筆啓上仕候、甚冷之節御座候え共、弥御安泰可被成御座珍重ニ奉存候、然は当知行所前渡村困窮ニ付、其御役所御貸附金之内六拾両拝借仕度、村役人共罷出御願可申段申候え共、委細別紙ニ得貴意候訳ニ付、先々以書中申上候、可然御取曖被下候様奉頼上候、右得貴意度如是ニ御座候、恐惶謹言

十月廿九日　　宮川庄右衛門

定親（花押）

山本滝八郎

定英（花押）

杉原清九郎様

一(十一月)此度安藤対馬守様御家督ニ付、前例之通御歓之御音物御使者被遣候ニ付、御三所様御相談御座候ニ付、被進物三井ニて願出来いたし、先月廿五日・廿六日両日ニ相勤候様相談致、切通シ伊藤嘉右衛門方へ当方より以書中、此度対馬守様御家督ニ付三所より使者被差出候故、廿五日・廿六日御差支も無御座候ハヽ下宿御頼申候、三人共出合相勤申渡段申遣候所、返書、承知いたし候段申越、乍然廿五日・廿六日は少々差支有之候間、追て近日当方より日限可申上候間、御延引可被下様申越、別紙ニ、御心安任得貴意候(マヽ)申、御陣屋御使者御差向ニ付御音物等御(マヽ)御座候哉申越候ニ付、加納御在城之節振合を以取計申、両種進上いたし候様申遣ス、同十一月朔日切通伊藤嘉右衛門方使差越、兼て申遣候御使者相勤申候日限、四日・五日両日之内同人宅へ向可被出様申越候ニ付、返事ニ承知いたし候、尤下両家及相談、追て日限治定いたし可申遣旨及答、

夫より御両家様へ及相談候所、御差支も無御座ニ付、弥四日ニ相勤申候趣、嘉右衛門方平島より申遣ス、同四日三井加藤辰右衛門宅へ向山本滝八郎罷出、然ル所供方間違ニ付、当方よりハ若とふ壱人・そうり取壱人・宰領壱人召連罷出候所、前例は道具・挟箱為持候様申事ニ御座候ニ付、可然相談いたし候所、奉伺も差懸り候故、三井ニて道具・挟箱調相勤申候、且辰右衛門少々痛所御座候故田上代助殿相勤申候、三井様ニて釣り台仕立、代助殿同道ニて平島行、松原牧右衛門殿同道ニて釣り台先立宰領付、三人揃伊藤嘉右衛門方行、同人出向、同人玄関通り座敷通り挨拶いたし、今日兼御頼申候御陣屋へ御使者相勤申候えは、右御着之旨可申上申御陣屋同人行、三人共着用のし目麻上下、嘉右衛門帰り、御着趣申上候所、押付御案内御座候故、しばらく御控可被下候様申候、御空服御座候間出来合茶漬差上可申様申候間、只今平島ニて支度致候間、先御陣屋可相勤旨申候えは、左様候ハヽ御済シ被成候て御引取之筋差上可申候、尤御陣屋ニても御酒御料理出候様申候、其内御陣屋より案内御座候故、嘉右衛門案内ニて釣り台先立、三人共揃罷出ル、御玄関右方へ釣り台置、御玄関行、下座敷へはつび着用いたし候足軽罷出、下座いたし候、銘々使者よし申敷台へ上ル、中番敷台出下座致候、御玄関六畳敷左勝手口へ奉行島田利右衛門殿継上下ニて出向候間、居付候様いたし候えは、被成御通り候様申候えは、御玄関右十二畳敷座敷通り、利右衛門殿御玄関敷居ぎわニ着座、御口上之趣申候て目録差出候、一見いたし、御口上之趣対馬守可申聞候、宜敷答御座候、中番者御進物銘々御口上御座候と上座ニ直し置候、銘々御進物相渡候て自分〳〵挨拶致候、たば粉盆・茶・火鉢出ス、夫より三ツ組盃・吸物・釘子、硯ふた・鉢肴・差身出、酒済膳

盃（鶴島絵 三ツ組台朱）　吸物（鯛 味噌 現口うと）　硯ふた（看小串 椎茸 かまはこ くわい 九年坊）

鉢肴（鯛 浜焼）　差身（かつを 長むき大根 羅蔔おろし）　何れも台のせ

御膳

鱠（さんはいず）（ほら作身 三島のり 蓮根 きらげ 大根 すりしうが）　汁（かふ ゆば）

坪（さき海老 ぎんなん にんしん 栗ふ）　香物（なら漬 うり）　めし

引て

平（竹あ 大長芋 大椎茸）　猪口（にんしん ししたし物）　焼物（いなだ）　湯

右相済、暇乞致、島田利右衛門殿敷台送り申候、中番下座敷ニて下座いたし候、嘉右衛門先立、御門番所ニも幕打、番人はつび袴ぽふ直し置居下座致候、嘉右衛門方行、着替候内茶漬出ス、茶漬断候えは酒出ス

盃　酒　酢たこ（せいこ）　（につけ）大根こゝり　鮎うるか

供者へは嘉右衛門方ニて酒肴・茶漬出ス

平（たこ）（ねぎ）（にんじん）　茶漬　酒　肴同様

猪口（にんじん）

相済礼申暇乞いたし、嘉右衛門門前迄送出ル、牧右衛門殿切通シ

ニて分れ候、夫より代助殿同道ニて高田迄参、是ニて分れ候、其節先達て相勤申候節御陣屋嘉右衛門方へ礼之義も談事候所、引取銘々取調、追て及相談候様申、分れ申候

御口上手控之覚、文言左ニ

口上手控

寒冷之節　対馬守様倍御勇健ニ被成御座、重畳目出度御義奉存候、今般御家督被為蒙　仰候為御祝義、御陣屋迄以使者聊之両種目録之通り進上之仕候、此段御序可然御（ママ）御執成可被下候

十一月四日

目録

鯛　壱箱

御樽　一

以上

一御使者供方、若とふ壱人・そうり取・道具・挟箱、御三所一所ニ釣り台壱釣り・宰領壱人、当方より人足弐人、御両家より御進物鯛百数入白木箱足付・樽白木弐升入服巻わらび縄、三井ニて御三所様一所ニ被申付候様頼候故、同所ニて出来、割合追て申参り候様引合置

一同七日申之中刻過笠松より之廻文来ル左ニ

上包　笠松

廻状　御役所

附印　濃州各務郡芥見村始

其村方拝借罷在候御貸附金、元利証文割合之通当午年分、当月廿日迄持参罷出可相納候、若於滞は急度遂吟味候条、日限無違滞罷出可相納候、廻状村下令請印、刻付を以早々順達、従留可相返候、以上

午十一月四日　笠松　御役所印

濃州各務郡
芥見村印
新加納村印
西市場村印
山脇村印
三井村印
島崎村
岩田村印
前渡村印
右村々

庄屋
年寄
百姓代

右廻文翌八日辰上刻島崎村へ送る

一同日（十四日）常貞寺呼出ス、并同断一両人差添候様昨夕申遣、右は追々願出候明春　開山五百五十回忌ニ付、大法会於同寺相勤候間、御寄附之義以上徳坊願上候処、今日呼出之上申渡候は、先年御寄附之

義申立候えとも慥成義も無之候え共、後例先例ニ被懸思召ニ今度内敷三ツ御寄附有之旨申渡、左ニ

口達之覚

一祖師御年回忌ニ付大法会相勤度、就は先例之義申立候え共、慥成義も無之候えは、今度之儀は先例後例ニ不拘、思召ヲ以内敷三ツ

別紙目録之通御寄附有之候間、此段承知可有之候事

文化七年年十一月十四日

常貞寺

別紙目録

金千疋	先年御寄附之儀相尋候所、惣縫の内敷、是ハ奥様の御小袖之由申伝候、尤五百年忌之節ハ急ニ御法会相勤候事由、申伝而已之由常貞寺より申候事、今日同断茂兵衛・和蔵両人罷出候、即刻為御礼住寺ヱ右両人罷出候
以上	
名	

一同廿日三井へ向平島へ参り、先達て之一件ニ付、佐左衛門召遣たの儀暇被遣候哉、又は御呼戻し御熟縁ニ相成候ものか、両様之所思召相伺、猶又両様共不応思召候ハヽ其段も無御遠慮可被仰聞、何レ御相談之上何共可仕旨申談候所、即答ニも難出来候間一両日中答可有之旨、佐左衛門申ニ付引取申候

一同廿三日三井迄佐左衛門参り申候は、たの儀暇遣候間其段前渡ニも宜御頼申由被申候由、仍之廿五日太郎兵衛参られ、右之段被申聞候、仍之郡上表之返書ヱ平島へも、たの暇ニ相成候ハヽ其段致承知度旨、申遣可然之旨被申候間、左候ハヽ明日ニも此方より案文認入御覧可申之旨申遣候、仍之左ニ

郡上へ之御返書左ニ

御文拝し侍候、追々寒サに向候え共いよ／＼御障りも不被為在候よしめて度存侍候、扨々此度佐左衛門殿より松原牧右衛門御使者ニて、お梶殿御義平島家風に合不申間御不縁被成度、朝比奈藤兵衛殿へ御通辞被下候様、其御二人様へ申参り候所、御不縁之事ハ無是悲事ニ思召候へ共、佐左衛門殿近頃召遣女常々お梶殿へ無礼のミ相働、お国殿抔も近付不申、御夫婦合何かと申妨候趣、粗御聞及ニ御座候由、左様候ては寄光院殿義ハ平島御出所ニも御座候間、尚更藤兵衛殿へ対し御気之毒ニおほしめし候段被仰越候趣共、逸々御尤千万存侍候、嘉兵衛方へハ御離縁之様子も一向御沙汰なく、牧右衛門参り候儀も一向不存罷在候所、御文之趣ニて驚入申候、仍之両人相談之上早々平島へ参り、佐左衛門殿へ及相談候え共、取極候談シもてき不申引取、又々其後参り候て色々及相談候処、先は召遣女たの義暇遣候筈ニ相成申候、折角私共、被仰下候儀ニ御座候間、何卒程能取扱可申存侍候え共、万事不調法の私共ニ御座候へは、何事も急ニは行届不申右之者暇ニ相成候えは御返事申上候品ニも御座候へは、先々此段申上候、何レ於私共も残念存侍候間、今一度御熟縁ニ相成候様仕度奉存候え共、何ヲ申も火急之事ニは難行届存侍候儘、春つけて又々御相談申上へく存侍候、此段弥左衛門様ヱ藤兵衛殿・御梶殿へも御序ニ宜御達し可被下候、

お前様ニも定ていろ／＼御心痛之御儀ト、其段は乍惶察入存侍候、何も／＼右之仕合ゆへ急々ニは不参、其上時節柄ニも御座候え共何となく人気も隠かならす存侍候ハ、来春ゆく／＼平島へも相談ニおよび申度存侍候、先ハ御返事迄、あら／＼申上侍候、めて度、かしく

十一月廿六日　　坪内太郎兵衛
　　同　嘉　兵　衛

お久様
人々申給へ

尚々、乍序殿方様ニも宜御通し可被下候、両家内よろしく申上候、扨々何角取紛御返事延引ニ相成申候段、御めん可被下候、かしく

平しまへの下書

——然は此間三井迄御出被成被仰聞候、御召仕たの義御暇被差遣候趣、至極御尤之義委細致承知候、私共おひても安堵仕候、左候へハたの義御屋敷相下り申候ハヽ早速乍御面倒御知せ可被下候、右御返答如此御座候、以上

十一月廿六日　　坪内太郎兵衛
　　坪内嘉兵衛

坪　佐左衛門様

尚々、本文之趣可然様奉願上候、お国様へも宜敷、尚両家いつれも宜御伺申上度申聞候、先日ハたん／＼御馳走難有奉存候、又々太郎兵衛申上候、当廿三日御来光之上たの御暇遣され候趣、同廿五日前渡へ参り委細御暇之趣申聞候処、則両人御返事及申候、左様思召可被下候、以上

右返事

御紙面拝見仕候、如仰寒冷御座候え共、御揃弥御機嫌克被成御座、目出度御儀奉存候、然ハ此間以参申上候様、則前渡えも被仰遣候段仰下され、承知仕候、右御請早々如此御座候、以上

十一月廿六日　　坪内佐左衛門

坪内嘉兵衛様
坪内太郎兵衛様

尚々、殿方様へも宜願上候、且又先頃ハ御出之所何も無御座、恐入奉存候、右御礼被仰下恐入候、本文申上候通御承知仕候、右一件此間も申上候通間違無御座候間、別段不申上候間、左様思召可被成下候、取込早々、以上

一京都金当十一月廿五日ニ京着候様可致返金筈之所不都合ニ付、幸武右衛門儀御冥加講鬮ニ当り上京致候ニ付、同人義日延断旁申延候様ニ談シ、同廿三日出立ニて十二月四日帰宅ニて、翌五日当方へ参り、先々右一件十日出ニ岐阜飛脚へ差出候筈之由引合参り候、尤此節大塚屋清兵衛病ニて不弁ニ付、馬渕氏へ参り直ニ懸合申候由、右断之印ニ拾両持参致候へ共、不揃候てハ受取不申由馬渕申候ニ付、清兵衛方ニ預置、同人ヱ悴仁兵衛両名之受取書取来ル、然所十日ニもいまた免状不出候間相調不申、仍之同九日岐阜飛脚へ断書状差出ス、当十五日出ニ差出候様申遣候事

一十二月九日三井より使来、右ハ婚礼一件左ニ

以手紙致啓上候、寒冷之節御座候え共、弥御安全被成御勤珍重奉

存候、然ハ兼て御苦労被下置候、旦那縁談之義来ル十三日引移ニて、同日婚姻相調ニ被申候積ニ治定被致候、此段御手前様迄為御知得貴意候様被申付如斯御座候、何分宜様御被成申被仰上可被下候奉頼上候、已上

十二月九日　　加藤辰右衛門

山本滝八郎様

尚々、道筋之義ハ草井渡し場より御知行所堤通りへ相懸り上中屋天神宮前へ向通行有之候積ニ御座候、此段も御承知置可被下候、以上

一同十一日夕方庄右衛門無事ニ帰着、信楽表ニて五十金拝借金受取来ル、右御役所杉原清九郎義ハ安積縁家ニ付、先安積より申込候処、当年ハ至て不自由ニ付、先達て御状被下候ニ付、御断書状差出可申存候所、御用多ニ付延引候内ニ預御出、何共気毒致候え共、右之振合故当年ハ被成御延引、来年ハ急度御取持可致間、其段庄右衛門殿へ貴様より通辞有之候様被申候段、安積被申聞候、先々御案内可致候間、清九郎殿へ御出御逢之上、又々御頼可然段被申候間、致同道宅へ参り候処、同様被申候ニ付達て相頼候、然ハ壱割金ハ無之候え共、壱割半宿場之方ニ候ハヽ無拠所を歇(久)候て、先ツ同役共ニも談し、追て御答可申段被申候間、何分可然御頼申候之旨申引取候、間もなく清九郎殿対談致度候間、只今罷出候様申来り候間、即刻罷出候、壱割半金五拾両手繰致候間、証文為御持御役所へ御召連候人成共御差出可被成、御手前様御出ニハ不及候由申聞られ候間、一礼申述引取、書類相認申候

御貸付金質地証文之事

一金五拾両也　　坪内嘉兵衛知行所

濃州各務郡前渡村

此質地壱町八反五畝歩　但年壱割半利之積

此分米弐拾七石七斗五升

内訳

字巾下　地主　与三右衛門

一上田五反七畝歩

此分米八石五斗五升

字築塚　地主　九兵衛

一上田三反五畝歩

此分米五石弐斗五升

字橋詰　地主　孫市

一上田六反六畝歩

此分米九石九斗

字山花　地主　秀之助

一上田弐反七畝歩

此分米四石五升

右寄

反別合上田壱町八反五畝歩

此分米弐拾七石七斗五升

此代金七拾四両　但シ村方質入直段壱反ニ付金四両積

右は当御支配所東海道宿々助成御貸附金之内、書面之金子質地差出拝借仕候処実正ニ御座候、尤当時用イ候御検地帳面之通字反別位附仕、拝借金三割増之地所差上候処相違無御座候、勿論右田何

方えも質物書入等仕候儀無御座候、若荒地変地等相成候ハヽ引替差上可申候、返納之儀ハ来未十一月十五日附元利無相違急度上納可仕候、大切之御貸附金ニ付、万一水旱損其外何様之儀御座候共、御日限通相納可申候、若相滞候ハヽ質地御取上御払被　仰付候共、又ハ地所村方え引請相払、元利御金高都合仕急度上納可仕候、依之御貸附拝借ㅐ質地証文差上申所仍て如件

文化七年(丁巳)十二月　　濃州各務郡前渡村

地主　与三右衛門

地主　九兵衛

地主　孫市

地主　秀之助

百姓代　定八

年寄　惣左衛門

庄屋　元蔵

信楽

御役所

右之通相違無御座候、万一元利ニ不限返上納相滞候ハヽ、嘉兵衛方より取立無遅滞急度返上納為仕可申候、依て奥印仕候、以上

坪内嘉兵衛家来

山本滝八郎

宮川庄右衛門

一同十三日(十二月)三井御縁女様御引移ニ付、昨日掃除申付、前の川揚り場より竜見前迄道直させ申候、為見分滝八郎罷出候、十三日昼頃より造酒蔵方迄出張申候、途中為御案内草井川端より足軽両人はつひ袴着候て差出置候、九ツ半頃草井渡端へ御出、為御迎加藤辰右衛門殿罷出候所、造酒蔵前ニて同人逢体いたし御口上申候所、追付通行被致候間、其節御使者御勤被下候ハヽ、供被致候者も不案内御座候間、御手札相渡候様被申聞候、承知いたし候答、無程御通行ニ付札辻坂へ罷出、御通行節平伏致、尤道具伏セ御こし、後より御用人片倉源右衛門殿罷出挨拶いたし候故、手札相渡シ御口上申、夫より竜見老方御小休ニ付、同人方迄御送行、同人方ニて休足致、無程御出立ニ付、後より御供致候、松本村定兵衛前迄松原牧右衛門殿罷出御使者相勤申候、夫より同人同道ニて三井御屋敷罷越、着用のし目麻上下、御使者之間へ通、名古屋より御供致候家老吉田又左衛門殿・御用人片倉源右衛門殿同席致、尤辰右衛門殿罷出挨拶致、同人義取込候ニ付御挨拶も不行届故、両人者より挨拶いたし亭主役御頼申候様に、太郎兵衛様より御沙汰御座候よし、夫より御茶・多葉こ盆・火鉢出ル

御盃　　御吸物(海老味噌)　　釘子

碩ふた(蛯はへ 玉子 かふ茸 九年坊)　鉢肴(かれい につけ)　吸物(すまし すいき こしよふ)

井(たこ につけ)

御膳

井(なしたし物 かや 木口切)

鱠(いなた作身 岩茸 大根 みしまのり ゆは)　香物(なら漬 瓜)　汁(大つミ入 岩茸)

坪(ふまはこ 椎茸 くわい にんじん)　めし

引て　平（長芋 青こんぶ）　青あへ　猪口（たこ うと）

焼物（またか 塩焼）　湯

茶

菓子（まんしう三ツ 干菓子十二 せんへい三枚）

右相済、御祝盃四ツ半過頃相済、銘々於御書院御逢有之候て御答御座候、相済皆々開候ニ付御酒、茶漬出ル

盃　吸物（いなた うと）　井（焼とふふ かぶ耳 焼はや）　井（水物 金かん）

平（むき身 とうふ）

香物　茶漬

辰右衛門殿より、御奥様御逢可被成之所、御病後故御六ツケ敷故、重て御逢可被成よし、皆々開申候、吉田氏・片倉氏御中ノ口迄被送候、辰右衛門殿敷台迄被送候、相済引取刻限七ツ半時過

一同十二日平右衛門より届出候は、小島銀蔵娘小網元右衛門方へ縁付申候由、届出ル

一同十六日三井へ為御歓、御使者宮川孫市相勤、供壱人、御進物

目録
一鯛　一打　奉書
一御樽　一　竪紙
以上
御名

白木樽　料四匁八分、外ニ酒弐升代

白木台　三匁五分

大鯛目下壱尺八九寸　料壱〆百文

御口上、時候御安否、此間は吉辰ニ付御婚姻首尾能御調目出度被存候、依之御歓之印迄両種被致進候、且那義も早速御歓ニ罷出可被申候へ共、先々以使者御祝儀申入候段被仰遣、三井様ニて御酒・御吸物被下、太郎兵衛様御逢、帰り之節孫市へ半紙壱束、供へ十疋被下候

一同十七日田上代助御使者として御台来ル、目録左ニ

目録

一御扇子　一箱　嘉兵衛様え
一御小紙　壱包　御隠居様へ
一御小紙　壱包　御奥様え
一御つむり銚物　壱包　御上臈様え
一御巾着　壱包　若殿様え
以上

使者　田上代助

十二月十七日

外ニ弓張十かけ一包来ル、右は御目録ニ不相見候間相尋候所、源右衛門様へ被進候由、辰右衛門書落候段断申候、着用和巾麻上下、御逢之上御答御礼被仰遣候

一同日武右衛門義笠松永田専治殿迄差遣、右は先達て頼置拝借金、其頃可願出候所、平島村彦九郎彼是世話致候間、何角費用多、夫故平島は断申候所、此節可模通筋も及かね候間、右永田氏へ差遣候て内輪訳咄合候所、何レニも被所引次第承合可申候間、夫迄相待候哉、併夫も退屈ニ可有之候間、貴様引取被申候ハヽ明日模通候方ニも有之候ハヽ、前渡表へ飛脚差立可申之旨被申候間、可然頼入之旨申置引取候

一同十八日源右衛門様宛ニて笠松永田より書状来ル、左ニ

口演

尚々、昨日武右衛門殿被仰聞候飛脚賃致承候処、犬山迄弐百五十文之由御座候、左候ハヽ其御心得ニて此者へ御渡し可被下候、以上

甚寒之節御坐候へ共、御全家御揃被成愈御安全被成御座、奉恭慶候、誠日外は御来臨被成下、殊向より之品被懸、尊慮難有奉存候、其後も一向御沙汰も無御座、如何ト奉存候処、昨日は武右衛門殿御出ニ付、委細承知仕候処、乍然余り押詰候間如何と奉存候処、昨夜内々承候処、一向直ニ御越被成、御書付御出し被成候方可然由、手代衆之内被申候、尤最早大金ハ出来不仕候と奉存候由、しかし三十斤位ハどふやら出来も仕間敷物ニも可有之由ニ御座候、いづれ明日ニも早速御書付御持参被成、私方へ向御出被成、御役所へ御差出候方可然奉存候、夫共ニ御受合ハ尤不存候え共、却て内々之取引仕候儀は悪候間、直ニ御用人中か又ハ武右衛門殿か御使者ニて、書付御持参被成候方可然由被申候仁も在之候間、此段今日申上候、尤本書ニ申上候通、決て出来仕候儀ハ不被申上候へ共、先々御差出し御覧被成候方可然由被申候仁在之候間申上候、先達て之節ならバ却て相済候え共、ちと日限遅り候故如何と奉存候へ共、先々此段昨夜承候間早速申上候、尤昨日武右衛門殿へ御咄申候、出来不仕候筋合ならバ飛脚遣し不申候由申上置候えとも、急度出来不仕候振合ニも承り不申、先々僅之金高故大方出来之趣ニも相聞申候、尤思召次第ニ奉存候間、明日御家来之内被遣候ても、若も出来不仕候共御恨ミ被仰下候てハ如何故、為念申上候、私昨夜承り候ハ、右之振合故申上候、飛脚之儀ハ御費ニも可相成哉ニ奉存候え共、右之振合故打捨置候てハ如何と奉存候間、ヶ様ニ申上候、尤明日一日も早く御書付被差出候方可然奉存候、委細ハ御人被遣候仁へ得と尚又可申上候間、明日早々被遣候方可然奉存候、乱書御免可被成下候、以上

十二月十八日　　永田専次

坪　源右衛門様

上

御口演書致拝見候、如仰甚寒之節御座候え共、弥御清栄被成御座珍重奉存候、然は昨日武右衛門罷出御頼申一件、昨夜内々御問合被下候処、内輪取引之儀は却て不宜此節尤押詰ニ相成候え共、少分之儀故三十斤位は出来可仕哉ニ付御人被下旨奉存候、愚兄へも申聞候所御懇篤御世話被成下候段忝仕合奉存候、宜得貴意候様申聞候、何レ明日家来之内貴宅へ向へ差出可申候間、何分此上とも可然頼候、只今出懸故取込罷在以他筆貴答申上候、此段御用捨可被下候早々、以上

十二月十八日　　坪内源右衛門

永田専次様

右飛脚へ弐百文渡遣候

一同十九日山本滝八郎笠松行、若党壱人・草履取、口上書左ニ

口上之覚

一当御役所御貸付金之内金五拾両拝借仕度段、知行所前渡村より願出申候、尤此節差懸御願申上候段恐入候え共、少分之儀御座候間

当冬中御貸下被成下候様仕度、以使者御願申上候、此段可然御取扱可被下候、奉頼候、以上

十二月十九日

右致持参永田宅へ参り、逢対いたし咄合候処、永田被申候は、御貸付之儀は一向不案内ニ付手代衆へ承合候処、とふか少分之事故出来も可仕哉ニ付昨日申上候、是迄御願込之御振合は如何御座候哉ト、尋有之候間答申候ニハ、是迄は角屋幸七案内ニて御役所へ罷出候由申候へは、左候ハヽ其御振合可然段被申候間、直様引取角屋へ参り候所最早御役所も引候間、御支度ニても被成候て御待合可有之、其内ニは八ツニも相成候間、皆々御出勤御座候旨申候間、其内ニ証文下等角屋ニ有之候間写取申候、右ハ一件書類之中へ入置候、是迄之振合とハ相違ニて、水帳・名寄帳等御引合ニて至て六ヶ敷候由角屋申聞候、夫より御役所へ致案内候間罷出、御玄関ニて取次、委細申述候処、御手控ニても有之候哉と相尋候間、持参仕候之段申候処、貸呉候様申候間相渡候所、持参ニて暫過罷出、御口上之趣申聞候所、当年は最早押詰候事ニも有之、至て御金払庭(底)ニ付被及御断候間、明年可被成御願之旨申書付相返候間、無手品罷帰り、夫より永田へ参り候処、甚以気之毒がり酒等出し被申候て、色々心配之趣ニ付、早々引取候

一同日大津御役所へ書状出ス、右は明日岐阜飛脚屋出る ニ付、今日籏屋丁伊勢屋太兵衛方迄為持遣左ニ

一筆啓上仕候、甚寒之節御座候え共、弥御安泰被成御座珍重奉存候、然は其　御役所御貸付金之内当冬上納分、此節罷出返上納可仕所、一統穀安ニ付、此節取調不申、仍之尊公様方迄以書中御断申上候、尤当冬中ニは返上納可仕手筈ニ金先懸合申候え共、万一不行届候節は恐入候間、何卒早春迄御日延被成下候様奉願上候、尤私罷出此段御願御断可申上義ニ御座候え共、左候ては金先懸合方及延引猶更不都合ニ付、不顧恐先々以書中此段申上候、何分可然御取合奉願候、恐惶謹言

十二月十九日　　宮川庄右衛門

柴山泰蔵様　浅野紋蔵様

七里左六郎様　篠田牧太郎様

一同廿四日当村酒造蔵義、庄屋より呼使遣候ても庄屋へも不参、再応使遣候処漸々参り色々申募り、其上庄屋喜藤次・元蔵支配請不申、仍之御年貢も上納不仕之旨雑言申候ニ付、村方割等之儀ハ村役一統之事故、惣村役より願書差出候ニ付及吟味候処、右願面之趣相違無之由口書差出候ニ付、年貢之儀ハ早々今晩迄喜左衛門へ上納可仕段申渡候処、早速皆済致候、仍之咎申付候訳は、村役支配請不申段過言ニ相当り、役所蔑致上ヲ不恐申方ニ御年貢是迄一銭も上納不致、彼是其科不軽、仍之戸〆申付候、右一件書類ニ有之候

（表紙）

「文化八未年記録

御用部屋」

一御年頭之次第
一百姓御礼
一江戸御飛脚中野村之者願ニ付申付候事
一御鏡開
一寺方御礼
一年始御使
一当村丈助秋葉参詣ニ付届方不筋ニ付糾一件
一名古屋御使
一江戸御年玉品々留
一加納へ御出御年玉
一大溝御年玉
一尾州御用人中より御倹約ニ付来状
一酒造蔵御咎御免
一十五日御具足御鏡開
一村方へ申触候廻状
一当番受取渡届之事
一小弥太方安産届
一武右衛門大津より京行
一当村要助御林内落葉掻取候ニ付御咎一件
一江戸御出府相談之事
一武右衛門帰宅之事
一大盤若経転読之事
一山東馬炙治場所替之事
一常例少林寺大盤若
一桃春院懺法
一当村西組猶七悴不孝ニ不情ニ付呵一件
一常貞寺御大会ニ付薪御願之事
一同寺緞子袈裟御願一件右両様寺社方留ニ有之
一公儀御触書朝鮮人来聘其外六通
一大釜吐井見分
一烈道病死
一山東参宮届ヶ
一山林境改之事ニ下切境改一件
一北島秀七秋葉参り届ヶ
一平島不通一件
一江戸大火ニ付本家へ見廻状
一御隠居様奥様少林寺御参詣
一三井様御病気之所御全快ニ付御床上御祝之事
一勢州松木へ拝借金一件願書状出ス
一平島義絶届一件
一大釜吐井板見分之事